
アレグリア・バンディッツ

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アレグリア・バンディッツ

【Nコード】

N1295F

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

タグザムティアとライスカイス、二つの星による地球の統治権を賭けた戦いが始まった。タグザムティア軍の少女、ルキロは今回の戦争に対して疑惑を抱いたことから、反逆罪により追われる身となる。ライスカイスの少年兵、カイと共に遠い昔に地球から抹消された歴史を知ることになる。

第一章 赤い髪の少女

それを確認した瞬間、無防備にも内部の操縦席をのぞかせていた胸部外扉が微かな音をたてて閉じた。操縦席内の機械が破損せぬように、と。候補が腐るほどいる操縦者の命などよりも、金のかかる精巧な機械部品のほうが遙かに大切なのである。そのためのプログラムだ。

胸部の装甲を、数発の弾丸が虚しく跳弾し、オレンジ色の火花が散った。

一番外部の装甲が閉じたのに続いて、内部でいくつもの薄い装甲が左右から、上下から次々と閉じ重なっていく。

……ノウハ、シンパクスウ、テイシ、カクニン。

マニユアルパイロット、カイジヨ。

キタイノレイキヤクノノチ、プログラム、ヘンコウ。

オートパイロット……プログラムP 2、イコウスル。

薄暗闇の窮屈な棺桶には、大小無数の計器類が並び、様々な色の信号灯が明滅している。

閉じた装甲板の裏側は大きなスクリーンとなっており、荒れ地とそこにポツンと存在する自動車を映し出していた。自動車の屋根に銃を両手に構えた少年が立っていた。空を……こちらを、見上げていた。それは、困惑の表情であった。高解像度スクリーンは、その手の震えまで捉えていた。

少年は目を見開いていた。少年の半ば錯乱した狂気の世界の中、自分の網膜が……脳が捉えた映像が、一瞬にして現実の世界に引き戻した。だが、それは、彼をますます混乱させるばかりだった。

計器の一つが素早い点滅を始めた。まるで透明な手がそこにあるかのように、中央の大きなレバーが大きく引かれた。スクリーン上

の少年の姿が……地面が、ゆつくりと、下へと流れて消えていく。薄暗い黄色の雲と、全体に広がる赤紫色の空、それが画面一杯に広がった。

それは上昇を続けた。

今度は何を……そして、誰を護るのだろうか。それは、誰の意志で。

第一章 赤い髪の少女

1

地獄への揺りかごは、闇と不快な熱気とに包まれていた。

どのような極寒極暑の地での戦いになるか分からない。故に必要な最低限の空調設備は搭載されている。だが本来の目的はあくまでも機械を守るためと云う事であり、搭乗者に快適さを楽しんでもらうためのものではない。機体冷却のあおりによる熱波があまりに酷くて、内部空調の効果など微々たるものでしかない。

しかしもう、搭乗者は慣れっこのようだ。汗をかきこそすれ、それほど不快気な表情は浮かべていない。

指が素早く動く。書いてある文字など全く読みとる事の不可能そうな暗闇の中で、込み入った配列のキーを、慣れた手つきでなぞるように叩いていく。細い指が、実にしなやかに美しく動く。繰り返し動作で、体が覚えてしまっているのだろう。

左側のパネルには、無数の小さなキーがみっしりと詰まっていた。右側はキーとレバースイッチが混在している。体を捻るように密集したキーボードに手を伸ばしていたが、身を返して右側のレバーに指が伸びる。

続いて左手が頭上に伸びる。二本のレバーを捻りながら、前方に倒した。と同時にその右横にある青いボタンを押す。

計器のランプだけが唯一の光源であったこの狭い空間内が、少し

だけ明るくなる。薄暗い森林の画像が映っていた。外の風景を映し出しているようだ。機体前方、胸部装甲の裏側がすべて情報を映し出すスクリーンになっている。その大きな画面の左右には、それぞれ小さなサブモニターが二機ずつ配置されており、文字や、線だけに簡素化した地形などを表示していた。

前方のメインスクリーン上に大小様々な文字や矢印等が表示される。サブモニターの一つにはその情報を捕足する文字が絶えまなく表示され、上端へと流れて消えていく。

左手が再びキーに伸びる。スクリーンの文字情報が変化する。周囲の空気を構成する成分、温度、湿度、風量、その他音等の情報。キー操作を続ける。画面に人の形のコンピュータ画像が浮き出る。それは真つ赤に塗りつぶされているが、ごつごつとした、まるで鎧を着ている騎士のように見えた。真つ赤なその形が、少しずつ位置を変えながら、次々に表示されていく。無数に出来た残像が、後ろから追うように消えていく。……空氣の流れと温度を調べ、数分前のこの場所の様子を探知しているのだ。それにしても、スクリーンに映った通りの大きさだとするならば、それはなんという大きさだろうか。十メートルを軽く超えていた。

木々の隙間からどんよりと空一面を覆う雲が見えた。雲に切れ間が出来、太陽の光が差し込んでくる。カメラはそれを捉え、スクリーンに表示する。薄暗い空間で木々による緑と茶色だけを表示していたスクリーンだったが、その上空の光を受け明度が増した。そのスクリーンの光が、狭い「棺桶」の中をうつすらと照らし出した。シートにすっぽりと納まっている小柄なその影は、何か考え事をしているかのように、うつむいている。燃えるような赤い髪が両目を覆っており、表情を完全にうかがい知ることが出来なかったが、その口元は薄く笑っていた。端麗な、まだ幼さを残した赤く小さな唇、おもむろに開かれた。

「さあ、行こうか、ウーズイ。殺し合いの始まりだ」
小鳥のように高く澄んだ、そして無垢な少女の口調であった。

「宇宙人どもめ。くだらぬ、愚かなことを始めおった。なにが地球の平和を最終的に守るための正義の戦だ。自分らの勢力争いのための舞台として、下卑た陰謀劇の舞台として、この薄汚れた、落ちぶれた星を選んだだけだろうが。貴様らのつまらぬ将棋遊びなどで、この星をもう傷つけないでくれ。もう我々を……」

小高い丘に、一人の老人が立っていた。

錆びた鉄のような赤黒い空。険しい山々が周囲一帯を遠く取り囲んでいる。

風が吹いている。遙か昔に人類の大半を滅ぼしたという、恐ろしい細菌を多量に含んだ死の風だ。皮肉なことに、現在の人類は常にこのような空気にさらされていないと、体内の抵抗力が保てず、他の未知の細菌に接した際に簡単に蝕まれてしまう。

眼下に人の影が二つ立っており、絡み合うように互いの位置を素早く入れ替え、戦っていた。足下から土煙が舞う。中世の騎士のように、右手にサーベル、左手に盾を持ち、突き、払い、なぐ……だが、その戦いは、姫を守る名誉のあるものではなかった。そしてそれらは人間ですらなかったのである。それは身長十メートルを超える、鋼の巨人であった。

一体は草のような深い緑色を基調とした、無骨な装甲に覆われている。

一体は焦茶色の、流線型の目立つ装甲であった。

茶色の巨人が、緑色の巨人の首を、刀の横なぎの一振りで、吹き飛ばした。力でねじ切った、そんな強引な攻撃だった。残った胴体の切断面からはパイプ、コード、機械部品がのぞき、激しく火花を散らしている。茶色の巨人は返す刃を一端引くと、一気に緑色の巨人の胸を貫いた。貫かれたその箇所が爆発を起こした。

巨人は、人型の戦闘兵器であった。

茶色の巨人は、転がっている緑色の巨人の頭部を拾う。だが突然

にそれを地面に投げ捨てると、背中に備えられていた長銃を右手に持ち、近くの丘を目がけて撃った。青い光の一閃。うなる鞭のように、獲物に襲いかかる蛇のように、細かい波を描く。

さきほどから丘の上に立ち、叫んでいた老人。すでに、彼の姿はそこには存在していなかった。空気に溶けたかのように、一瞬にして存在が消失してしまったのである。丘の一部が深くえぐられ、まるで月面のクレーターのようであった。

戦いを邪魔するうるさい老人を始末した巨人は、再び首を拾った。長銃を背中に戻そうとした矢先、自分自身の頭部が爆発し、大地に崩れた。倒れた背中に、さらに幾条もの光線が貫く。爆発が爆発を呼び、轟く低い爆音とともに、周囲の地形と自己の姿とを粉々に吹き飛ばした。

空中から銃を構えた緑色の巨人が十機、その巨体に見合う特大の落下傘で降下してきた。それぞれ手にはその巨体に見合う巨大な銃を持っている。

薄暗い空が、雷雲でも訪れたかのように、さらにどんよりと暗くなる。

巨人だけではない。空中に戦闘艦のようなものが数隻浮かんでいる。それが空を覆い、地面に影を落としていたのである。

雷のような閃光に、轟音が続く。降下中の機体に一体、また一体と光が照射されると、それは爆発を起こし、煙をあげて落ちていった。地上からの攻撃であった。

また別の巨人があらわれた。それは大きな翼を広げ、空中を飛んでいた。水中を進む魚のように、重力の存在など微塵も感じさせない優雅さであった。それらもまた二種類あり、敵味方に別れているようだった。

険しい山に遠方を囲まれた、のどかであった丘陵地は、わずかな時間の間に轟風、爆音の耐えぬ乱戦の地と化した。

焦土となるも時間の問題であった。

スクリーンには、鬱蒼とした森林の画像が映っている。左右の補助画面それぞれには、焦茶色の鎧で全身を覆われた巨人が銃を構えている姿が映し出されている。味方の機体だ。

メインスクリーン中央に表示されていた緑色の照準が縮小しながら左上へと動き出した。……標的を認識した。緑色の巨人が、右手に鈍い銀色の光を放つ刀を握り、立っていた。

「敵一機。散開」

端的に状況と、部下への指示を出す。

三機の反応は素早い。軽く跳躍し、右に左に散り、木陰に隠れた。三機が三機とも、腰に異様な物をぶら下げている。緑色の巨人の、首であった。頭部の輪郭を形作る装甲板に、ワイヤーロープを通し、二つ、三つと腰に下げている。何のまじないか習慣かは分からぬが、それにより彼らの一機一機が負け知らずの強者であることがわかる。それら三匹の猛禽が同時に、一匹の獲物を狙っていた。彼等にはそれが小鹿にでも見えていたのだろうか。

疾駆する黒い影が三方から迫り、襲い掛かる。それらが交差するのを待っていないければならない義理もなく、緑の巨人は自ら軽くタイミングをずらした。左側面から襲う一機に体を向け、軽く膝を折り、跳んだ。宙で二機のシルエットが重なる。不意をつかれた攻撃を受けたその一機の、様子がおかしかった。……首がなくなっていた。運よく爆発は起こらなかったが、制御機能を失ったその巨体は、無様に地に落ち、地響きを立てた。

緑色の巨人はそのまま宙を駆け、そして巨木を両脚で蹴った。たわみ、すべての枝が揺れ、葉が舞い落ちる。その巨人の体躯を考えれば、樹齢数千年の巨木と云えどもへし折れておかしくないものであった。だがそうはならず、そのまま緑の巨人は反動で逆方向へと跳んだ。無骨な外観の装甲に似合わず、驚くほどに身軽な動作だった。機体性能の故か、それとも操縦者の技量故かは分からない。

緑の巨人が着地ざまに横に払った刀は、見事なタイミングで残る

二機のうち一機の着地時の足下を狙った。だが、すでに精神的に持ち直したのか、その標的は背中と脚のバーニアの噴射により、一瞬だけ着地を遅らせた。銀色の光が虚しく空を切る。

緑の巨人はあらためて刀で突きかかろうとしたが、後ろからのもう一機の攻撃を察知し、急遽身を真横に踊らせた。巨木を背に、二機と向かい合う形となった。

二対一となったこの戦いは、膠着状態が続き、一様に決着を見せなかった。長期戦となれば、一機で多数を相手にせねばならない側が不利となっていくのは必至だろう。もしも、疲労感を覚える普通の人間が戦っているならばの話だが。

不意に、焦茶二機のうちの一機、操縦席内部のスクリーン映像の右側半分が、真っ暗になり見えなくなった。映写機の映像が投影されている幕を、誰かが引き裂いたかのように。

「この星から出ていけ、宇宙人め」

集音器がとらえた音声がそれぞれの操縦席内に反響した。

少年達が木々の枝の上に立っていた。何やら液体のつまった風船のような物をそれぞれ手にしている。

4

「逃げる！」

エイジは叫んだ。二人の仲間が木から降りるのを確認すると、彼は残った左手の水風船を適当な一機に投げつけた。素早く一段低い木の枝へ、さらに低い枝へ、そして地面へと飛び降りた。風船は巨人の左腕に命中した。粘度を帯びた黒い液体が弾け、こびりついた。「タク、もうそれはいい。捨てる。走れ。急いで逃げろ」

エイジは幼い子供に叫び、避難を促す。タクは、両腕に樹液のつまった風船を沢山抱えていたが、兄の言葉に風船を捨て、小さな腕を力一杯振り回して走り出した。

エイジの親友であるカンツとウー、二人の少年はエイジのすぐあとに続いた。ウーは突然よろけ、地面に膝をついた。小太り気味の

ウーに、少しは痩せるなどと軽口を叩きながらエイジは後戻りして彼に近寄った。ウーに手を差し出した。その時、多勢の側、地面や木々と同じような色をした人型兵器の、一機が彼等の方を向いた。本体同様に特大サイズのその銃口を、彼等へと向ける。エイジはただ前方を、その銃口を睨んでいた。

銃口に、光が収束していく。

彼らの家にはまだ直接の被害はなかった。家々の間隔はかなり離れているし、例え壊されても数カ月もあれば家族で建て直せるような粗末な造りだ。ただ、麓の町が少なからず戦火に巻き込まれ、物資の供給が滞っている状態が続いていた。だが、多少の蓄えはあるし、現在のところ子供にはあまり関係のない話だった。

「彼等」の来襲は、わざわざ市民を混乱に陥れ、意図的に建物を破壊するようなものではなかった。それよりもっと酷かったのだ。

「ただ何も考えていないかのよう」に「好き勝手に戦っているだけ。他人が巻き込まれても知ったこっちゃない」、町の人間たちは口々にそんなことを云っていた。要は地球人の存在価値は「彼等」にとってはアリ以下なのだ。

エイジは十六歳。同年代の大半の少年達と一緒に、学校に通った事はない。物心ついた時からずっと親の手伝いをしてきた。木を伐採し、乾燥させ、焼く。コツがいるが単純な、燃料を造るための仕事だ。

読み書きは母から教わった。本を沢山持っている友達がいて、難しい言葉を覚えてからは、よくその友達の家に遊びに行った。貸りた本を、仕事の合間に読むのが楽しかった。

特に歴史の本を読むのが好きだった。現在の複雑なこの世界は、猿が自己の肉体を変化させながら少しずつ築いてきたのだ。その年月の変化や、様々な人物の活躍を空想するだけで、夢幻のドラマを感じ、楽しく思えるではないか。ただし……近代の歴史はいくら読んでも理解出来なかった。当然である。要所要所が、黒く消

されているのだ。破かれて無くなっている頁もあった。その一冊だけではなく、そして、その家だけではなかった。

中途入学となるが、弟のタクは来年度から町の小学校へ行ける事になっている。エイジが今までよりも多くの時間を仕事の手伝いにあてるから、と父親に頼んだのだ。

「町の学校」、と云つても、二クラスだけしかない。生徒の総数は数十人程度のもので、単純に年少年長で区分されている。授業料などはたいした額ではないのだが、大概の家庭は学問の必要性などあまり感じてはいないし、何よりも、働き手が減少することが困る。

学問に興味を持つ者が変人扱いされる御時世といい、穴だらけの史書といい、人類を退行させようとする誰かの恐ろしい陰謀だろうか。などとエイジは本気で考えたこともあったが、何を幼稚な友人に馬鹿にされるに決まっているので誰にも話していない。自国の野蛮な歴史を隠す行為、正当化する行為など、今日始まった事ではない。何しろ、彼のいるこの国は、昔は「正義と自由の国」と云う大変に誇りのある国だったそうだ。国民のためという今さら自己欺瞞にもならない大義名分のもと、上の連中が色々と策動するのは当然のことだったかも知れない。すでに、国益云々という時代ではないというのに。

彼は毎晩遅くまで父と一緒に仕事をする。ふと仕事の手を休め、夜空を見上げると、真っ黒な天幕に無数の星々が張り付いているように輝いている時がある。恒星の輝き。昔、人類はそれらの恒星間を宇宙船で軽々と渡つたらしい。もっとも今となつては夜空に星が見える事など希少である。地球全体を覆う黒い雲と汚染された空気とで、滅多にその星々の輝きを見る事は出来ない。気流の関係で雲のほとんどが散ってしまう時がある。風が夜にそのプレゼントを持ってきてくれるその時まで、エイジはただその雲の向こうの世界を想像するだけである。

大気汚染、地質汚染、資源枯渇、戦争内乱による技術の後退、二酸化炭素の増加に始まる地球温暖化による砂漠化の進行、海面の上

昇……無垢な魂の少年たちが、届かぬ星々にほのかな夢を見られるのも、時折幻想世界のように空を覆う虹色の光も、過去の人類の過ちがもたらした皮肉な結果であった。汚染などの諸問題は、遙か昔の出来事とはいえ、自分ら人類が解決していかなばならない問題であるはずだ、とエイジは考えている。今、目の前で自分に銃を向けている巨人、地球内のことで彼らにあれこれ云われる筋合いなどはない。

自分たちは……地球人は、すでに十分に罰を受けたではないか。そして、今なお受けているではないか。自然を恐れて生きねばならない、情弱な生き物へと堕ちたではないか。

だがそんな思いなど通じるはずもなく、その巨大な手の中にある銃の引き金は情け容赦なく引かれたのだった。

光が彼の体を包み込んだ。

5

これだけ間近に父の姿を見た事はかつてなかった。普段思っていたよりもずっと大きく、ずっと逞しい体だった……ただそれだけの事に、あらためて尊敬の念を抱いていたかも知れない。普段下品な冗談ばかり云っている父に語り尽くせない感謝を覚えていたかも知れない。こんな時でなければ。

エイジがウーの手を掴み、引き起こした時、巨人の構えた銃の圧倒的な威力が二人の少年に襲いかかろうとしていた。青白い光が銃口から放たれる。死ぬのか……。気づいた瞬間には、突き飛ばされるような横殴りの衝撃が彼を襲った。激しく押され、そしてその腕の中にいた。エイジの父、トウジであった。クマのような体躯に完全に包まれていた。瞬きするほどのほんのわずかの後、集約された高密度の光の束が、からみ、一条のまっすぐな線となる。同時に、光の照射を受けた地面は音もたてずに消滅していた。半径一メートル、深さ五十センチほどの小さなクレーターが出来ていた。

機械の体の微かな駆動音、風の音、叫び声、三人の体が地面に倒れ転がる音。

エイジは、熱波を背に受けて気を失い自分の上に倒れかかる父を抱き起こすと、ウーと協力してそれぞれ両方から父の肩を支え、歩き出した。周囲には薪が散らばっている。薪のほとんどは熱波により炭化し、崩れてしまっていた。トウジが背負っていた物だ。おかげで、致命傷は免れたようだが、重傷らしい様子に変わりはない。

すでに巨人たちは自分達になど目もくれず、彼ら自身の崇高な戦いに戻っていた。

「負けるな。あんなの、やっつけちゃえ」

タクが叫んだ。二機を相手に戦っている緑色の機体に向けての言葉であった。タクは好奇心から、兄達について来ただけ。現在戦っている、巨人に乗る者達に、直接に迷惑を受けたことなどなかった。それどころか、麓の町などあちらこちらで、十メートル以上もある大きな大きな甲冑の戦士が戦っていると友達に聞き、少なからず心を躍らせてもいたのである。

だが、エイジたちを助けるために犠牲になった父の姿に、タクの心は変化した。ドングリのような幼い目には父達をめぐけて銃を撃ったそいつが敵に見える。二対一の戦いを平然と挑む卑怯者に思えた。だから、タクは、まだ自分達に銃を向けているのを見たことがない、一機で戦う緑色の巨人に声援を送った。

視界のきかぬ方の機体を狙う事は当然である。故にそれを庇う事も当然である。カメラを少年達の水風船で汚された一機の、頭部の一つ目から、まるで涙でも流れるかのように黒い水がこぼれた。洗浄液がカメラを洗っているのである。その機体の前に、無事な一機が立ちふさがろうと動く……その瞬間を狙われた。緑の機体は素早く踏み込み、刀を振り上げた。カメラを洗浄している一機に襲い掛かる。だがそれは、フェイントだった。庇うために立っていた機体が、無防備な仲間を守ろうと反応したその時が、緑の巨人の狙いだ。銀色の刀は、金属と金属がこすれる耳障りな音をたてながら

も、実にあっさりと、庇おうとしていた一機の首を飛ばしていた。そしてその首が地面に落ちるよりも早く、すでに次の犠牲は作られていた。

エイジたちの見ている中、三機を相手に戦った緑色の巨人は、その三機をそれほど苦戦もせずに、無傷で倒したのである。

6

少年達の視界には、残骸となった三機が転がっている。緑色の巨人は、戦いの決着がついた後、さらに一機一機の胸部をサーベルで貫いていった。人間同士の決闘で、倒した相手の命を確実に奪うために心臓を突き刺しているようにも見えた。実際のところ、それと同じだろう。搭乗者の命を確実に奪っているのだ。

巨人は片膝をつき、地面にしゃがみ込んだ。胸の装甲は出入りするための扉にもなっているらしい。弾けるように上に開く。さらに中にある二枚の薄い扉が左右にスライドする。

「うちゅう……じん？ え……いや、違う、あれは……」

少年たちは啞然とした。中から自分達と同じ姿をした……人間が出て来たのである。

誰も、情報として宇宙人が戦っていることは聞き知っていたが、姿を見たことはなかった。単に漠然と宇宙人とらえているだけで、考えてみれば、どんな姿なのか想像すらしていなかった。地球に訪れた目的、地球を戦地とする目的はすでに語られているのだから、姿は既に地球人には知られている。ただ、自分達が情報に疎く、思い巡らせることもなく、単に知らなかったのだ。

機体から降りてきたその姿に、少年達はみな啞然とし、無言になった。

すらりとした体軀ではあるが、どこかまだ幼さの残る……そう、それは少女だった。肩まで伸びた赤い、柔らかそうな髪の毛が風になびく。材質はまったく見当がつかないが、微妙に青みがかった白い色の、上下繋がった服を着ている。腰の形やまだ発展途上中の胸

の膨らみなど、その肉体が作り出すラインは、地球の人間の少女のものとはひとつとして変わるところはなかった。機体内部がどれだけの熱気に包まれていたのかは分からないが、少女は額の汗を拭いながら、風を気持ちよさそうに浴びている。

「おい、あれ地球人じゃないか」

やつと夢から覚めた心地のエイジは、隣のカンツに語りかける。

「あの娘が宇宙人から奪って操縦してたのか。それとも、あの娘はやっぱ宇宙人で、地球人と同じ姿をしているということなのか」

カンツからの返事はないが、エイジは一人続けていた。

「……なんか、ムチャクチャかわいいな。好み」

ウーが鼻の下を伸ばしている。

「アホ、こんな時に」

カンツがウーのぶつくりとした頬に軽く肘うちを食らわせる。

手がかり足がかりのある昇降用ワイヤーロープで地面に降り立つた少女（の形状をした生物？）は、ひとしきり地球の風を堪能すると、次の行動に移った。自分が巨人を駆って刀で吹っ飛ばした、地に転がった巨大な首のところまで駆けて行くと、そこで何やら作業を始めた。何をしているのかエイジ達には全く知ることが出来ないしばらくすると少女はそこから少し離れ、振り返った。左腕をかざしてで目を覆うと同時に爆発が起きた。転がった機械の首の、刀による切断面等から爆風による煙が激しく噴出した。内部の細かな機械が粉々に散り、表層の骨格だけとなる。……あの、呪術儀式のような、首を腰に吊るす行為のためだろうか。

少女は自分の乗っていた機体に引き返そうとし、ふと足をとめた。少年達に気付いたようである。

ウーは少女の外観に安心したのか、様々な興味もあつたし、無意識の内に近づいていた。

少女と目が合う。

少女は赤い髪をなびかせながら、その大きな瞳で近寄ってくる小太りの少年を見ている。

「ウー、あんまり近づくな！ 馬鹿」

カンツの制止を聞かずに、ウーはさらにゆっくりと近づいて行く。敵意のないことを示そうとしているのか、大きく両手を広げた。そのまま近付き続ける。少女は先ほどと変わらぬ体勢だが、少しその表情が訝しげなものになっている。ウーは少女と数歩の距離まで近寄ると、ようやく口を開いた。

「わたし、地球人」

ニコリと笑った瞬間、ウーの肥満した大きな肉体は後ろに吹き飛ばされた。

父トウジをとりあえず安全そうな場所に横たわらせて戻ってきたエイジは、ウーが苦しそうにもがきながら地面を転がっている様を目にした。

腰の右側と、右の太股と、それぞれのホルスターに銃らしき物を吊っていた少女は、ウーの動作に反応するや少しだけ身を屈めて右太股にあった一丁を素早く引き抜くや、有無を云わせる隙も覚悟も与えずに、ただ発砲したのである。あまりの早業に、少年達は何が起きたのかまったく理解出来なかった。ただ、地に横たわる少年と銃を構えた少女の姿と云った結果から、何が起きたのか判断出来た。ウーが、撃たれた！ エイジは混乱した。走る。少女のいる方へ。ウーが倒れ転がっている方へ。ウーの生死を確認し、助けようとしているのか、それとも少女に対して何かしようとしているのか、エイジには、何のために自分が走っているのかよく分からなかった。ひたすらに、雄叫びをあげ、走った。

少女は今度はエイジに銃を向け、引き金を引いた。この躊躇のなさは、別に彼女の残忍さを証明するものではなかった。戦争の理由は別として、現在の状態から自身を守ることは全くもって正当な行為だし、その銃に、殺傷能力などなかったことを、エイジは身をもつて知った。光弾も実弾も、音すらも出なかった。引き金を引く微かな音だけだった。その音と同時に、エイジはいきなり力が抜けたように、受け身すらとらずに倒れた。痛みは感じなかったが、頭の

中が真っ白で、何も見えず、何も考えることが出来なかった。

体の大きさの故か、ウーには、それほどの効果はなかったようで、すでに立ち直りかけていた。入れ違いにぐったりとなったエイジの体を抱きかかえ、立ち上がろうとした。

少女がすぐそばに立っていた。少女は自分たちに銃を向けていた。そして少女の、自分の髪の毛ほどに赤い小さな唇がゆっくりと動いた。

「ウ・ゴ・ク・ナ」

その呟きは確かに、地球の共通語だった。そしてまた呟く。

「地球の、子供、か？」

エイジはもがいた。意識はすぐに回復したのだが、身体が全然思うように動かない。ウーがさすってみたりと努力をするが、全く効果はなかった。

得体の知れない科学力をその身をもって教えられ、すっかり怯えた目で少女を見ていたウーの表情であったが、それが微かに変化した。少女……ではなく、その後方に焦点がいつていた。少女がそれに気づき、振り返ろうとした瞬間、木々に隠れていたカンツが少女の背後から飛びかかっていた。二人は地面に倒れ込む。下側になった、うつぶせに倒れた少女を、カンツはすかさず頭を押さえつけ動きを封じようとする。が、そうされる前に、少女は強引に体をひねり、カンツの顔面を殴りつけた。少なくとも、外見から彼等が判断していたよりも、遥かに強い腕力を彼女は有している。横殴りの一撃に、一瞬意識が遠くなる。だが、少女が武器を持っていることを恐れているカンツは、その程度のことではひるまない。少女の体の上に馬乗りになり、体の自由を奪おうとする。

エイジに目配せで合図され、ウーもその争いに加わった。常に少女の体は地面と接触する側にあつたが、巧みに身を動かし、腕を極められる事を避けている。少年二人がかりでも、なかなか捕らえることが出来なかった。そして、ウーの巨体にカンツは邪魔をされた形となり、少女の右手が一瞬自由になった。まずい、とカンツが思

ったその瞬間、

「野蛮だな、地球人はっ！」

ウーの体が強烈な電流を浴びたかのように痙攣し、気を失った。

少女とカンツの上にその体重がのしかかってくる直前に、少女は体を回転させ、逃げ出した。

カンツは気絶したウーにのしかかれ、まったく動くことが出来ない。

彼等に、少女はもう目もくれず、自分の乗っていた草色の巨人のもとへと駆け出した。

ようやく、エイジの体の感覚が少しずつ回復してきた。耳鳴りがしていた聴覚も、だいぶ正常になってきた。

みな、呆然としている。なんだか狐につままれたような気分だ。

少しして、彼等の両の鼓膜が同じようにびりびりと振動した。少女の叫び声が飛び込んで来たのだ。

巨人に、タクが乗り込もうとしていたのである。一体どうやってワイヤーロープの昇降操作をしたものか、すでに胸部の操縦席に入ろうとしていた。

「お前達にはそのシステムは扱えない。取り込まれて、人格崩壊する前に、ウーズィから降りろ」

だがその叫びも虚しく、緑色の巨人、彼女の云う「ウーズィ」は動き出した。

「まさか」

少女は目を見開いている。表情と気持ちとの対応関係が地球人と同一であるとすれば、彼女のそれはまぎれもなく驚愕の表情であった。

まさかと云ってはみたものの、目の前で起きている事が現実である。少女は気を取り直したのか、尻餅をついた格好で手足を出鱈目に振り回すウーズィにゆっくりと近寄っていった。まだ垂れ下がったまま収納されていないワイヤーロープに手をかけた。よじ登ろうとするものの、激しい揺れにままならない様子。ワイヤーロープが

出たままであることから、どうやら地球人の子供は、ただ強引に機体をよじのぼっただけのようだ。高い木々に囲まれている土地だし、木登りなどが得意なのだろう。

規則性のまったくないウーズイの動きに、少女はロープにしがみついているのがやっとで、何をすることもできず、ただ振り回されていた。

最初から辛い悲劇という訳ではなかったが、眼前で演じられている物語は喜劇の域へと変じていた。父を負傷させられ、自分も変な銃で撃たれて苦しい思いを味わされたエイジであったが、どうにもあの少女を憎しみの目で見ることが出来なかった。

「カンツ、あのデッカイの中に、弟が乗っちゃったようだ。降ろすの手伝って……」

まだたどたどしい口調でエイジが云いかける。その時、立ち上がりかけていた緑色の巨人ウーズイが、爆音と同時に、巻き起こった重く激しい風に真横に吹き飛ばされた。肩の装甲が、細い木にぶつかり、木はそのままへし折れた。ウーズイも地に崩れ、けたたましい地響きを起こした。

閃光。あたり一面が、カメラのフラッシュのように光り、そして再度爆音。津波のように、見えない熱波が風に乗って襲ってきた。少女もその熱く激しい風を全身に受けた。華奢そうなその軽い体は簡単に遠くへと飛ばされた。咄嗟のことながら、体が無意識に反応し、受け身をとろうとする、が、間に合わなかった。下生えがクツションにはなったものの、激しく地面に叩きつけられた。少女は苦痛に、短く鋭い悲鳴を漏らした。彼女は朦朧としかけた意識の中、敵の姿を見た。

「ギ・グルーグか」

さきほど戦っていた機体と同じタイプだ。流線型をした焦げ茶色の巨人である。しかも三機、崖の上に並んでいる。一機が飛び降りると、残る二機も続く。三機の姿は完全に木々の中に隠れた。微かな機械の駆動音が、風に乗って不気味に届いてくる。

少女は意識を強くもち、両腕で這うように地を進み、ウィズィへと向かった。

ウィズィは倒れており、胸部の操縦席に乗り込むのは簡単だったが、地球人の子供を降ろすには時間がかかりそうだった。神経、筋肉の動きから情報を読みとるための、触手のようなセンサーが、すっかり体に固定されてしまっており、いちいち解除している時間もない。少女は、自分も操縦席に入り込み、少々のプログラム変更をした。気絶している子供同様に、少女の体にも触手が伸びてからみついた。そしていくつかのスイッチ類に手をやり、素早く動かす。手慣れたいつもの動作である。だが……

少女の頭の中を、「何か」が襲った。熱く激しい衝撃。鈍器で脳味噌を直接殴られているかのような痛み。体をしぼられるような激しい圧力。ねじまげられる窮屈な感覚。細い細い道を強引に押され、詰め込まれ、体の形がどんどんねじくれていく。肉体ともども、精神までが醜くいびつに変形してしまいそうだった。

通過した。それは、真っ暗で、広大な空間だった。宇宙のように見えるが、実際は異なっている。少女には、だいたいわかって自分の精神の世界だ。だが……

「同調に失敗した時に起きる、あの感覚……いや……何か、違う……」

ともかく、自己の精神が見せる世界に変わりはないはず。なら、何が違う？　きらめく光の中、自分の肉体が浮いていた。意識と云う名の身体が。……さきほどまで、自分の隣で気を失っていた地球人の子供もいた。これが……

不意に感じる、溶けそうな感触……

なかば恍惚とした気持ちの中、少女は考えた。……自分が同調に失敗したからではない。逆だ。そして、この子供も機械と同調している……それで……

瞬時にして、暗黒と恐れの中に、その感情は飛んだ。少女は否定する。

「そんなはずはない。ありえない。こんな生き物などが……」
少女は叫んだ。その場を逃げ出した。その精神の世界を。

狭い操縦席の中、隣には地球人の子供が気絶していた。

少女は額の冷や汗を拭った。

ウーズイは立ち上がる。

「動きが鈍い。同調率が低下していく。当然か」

地球人の子供が一緒にいるため。それと、自分自身の負った怪我のため。だが、今は都合がよかった。得体の知れない、嫌悪と恐怖の世界から抜け出すために、自ら同調率を下げた程なのだから。「未知」は恐怖であり、危険である。だが今は敵の襲撃により自分の生命が危ない。考え事は、あとでゆつくりとすればいい。

ウーズイの巨大な手が、転倒した時に落ちた銃を拾う。だが、もう残り弾がない。再び地面に放り捨てた。

左腰の刀を外し、右手に構える。銀色の鈍い光沢を放つ刀に、次第に薄いピンク色の、霧のような光がまとい始める。再び敵、ギ・グルーグの砲撃。今度は狙いは正確だったが、少女は木々の向こうに見える銃口の先が輝く発射のタイミングを瞬時に判断し、ウーズイの巨軀を右へと跳躍させた。後ろの巨木がバリバリと音を立てて、裂けた。燃え出した。

「あまり、地球を壊すな」拡声器を通して、少女の声が聞こえた。

「中身は全く違うのだからけれど、同じような姿をしてる地球人の……あの目で睨まれると、夢見が悪くなる」

その言葉は、ギ・グルーグの行動には何も影響を与えなかった。ウーズイは再び砲撃を受けた。しかも今度は単発の攻撃ではなく、大まかな狙いを定め、連続して撃ってきた。爆発、爆音、土が舞い上がり、嵐のような風が周囲の木々を揺さぶり、枝を折り、葉を吹き飛ばした。

巻き起こった風もおさまらぬうち、攻撃の二幕目が上がる。もうもうと吹き上がる煙の中から、刀を振り上げたギ・グルーグが踊り

出、ウーズイの頭部めがけて振り下ろした。ウーズイは、咄嗟に後ろに飛びすさりながら刀を真横に薙ぎ敵の刀を払う。バランスを崩してやったつもりだったが、次の瞬間、ギ・グルーグの蹴りが腹部を直撃、ウーズイは背中を木に叩きつけられた。

「アロ・イーグじゃなくとも、こんなやつら……」

操縦者の意識が遠のく一瞬を狙って、ギ・グルーグが素早く次の攻撃に出るが、ウーズイに乗る赤毛の少女は驚異的に早い立ち直りを見せた。ギ・グルーグの勢いをつけるために両手の刀を天高く振り上げる行為は、ただ大きな隙を作るだけのもの、自分自身を死の世界へと送り込むためだけのものではなかった。ウーズイの頭部両頬が唸り、火花が散る。激しく上り立つ水蒸気。地球の古い兵器にあるバルカン砲の類だろうか。一つ目の巨人、ギ・グルーグのそれぞれ目の目を覆っていた半透明の装甲板が、すべて碎け散った。おそらく、三機とも視界は完全に奪われているに違いない。それでも、ギ・グルーグは防御を何も考えず、両手の刀を振り下ろした。だが、ウーズイはすでに、その振り下ろした先には存在していない。その刀は虚しく地面に突き刺さる。ギ・グルーグの腹部から刀の先端が突き出てきた。背後にウーズイが立っていた。刀を抜く。うつすらと、赤黒い液体がこびりついていて。再び刀を一閃させると、今度はギ・グルーグの首が飛んだ。

ギ・グルーグはまだ二機、残っている。だが、メインカメラを完全に破壊され、すでに戦闘力はない。機体を脱出するつもりだったのだろ。二機の胸部扉が同時に開いた。だが、その直後、軽く跳躍するように二機の間割って入ったウーズイは、一機の胸部に刀を突き刺し、もう一機の胸部に右足を蹴り込んだ。二機のギ・グルーグは胸部から火花を散らし、ほぼ同時に後ろに倒れた。木々が折れ、轟音があがる。刀で貫かれたほうの機体が、小さな爆発を起こし、操縦席から炎と煙が噴出した。

少女はウーズイの操縦席の中で、大きく息を吐いた。

キーを操作し、地球人にからみついたセンサーを外していく。そ

して自分の分も外し終えたと、扉を開いた。見える木々は今まで超高解像度スクリーンに映っていたものと同じだが、流れ込む空気が体にまとわりつく感触が、映像ではないことを教えてくれる。かなり汚染されている大気ではあるようだが、それと戦闘後にまだ命のあることを感じ風を浴びることの心地よさはまた別の問題だ。

地球人の子供を抱きかかえようとした。が、赤毛の少女はふと思ったように子供から手を離し、身を前方へと屈めた。外へ出る前に弾切れになったままの銃にエネルギーを込めておこうと思ったのだ。足下付近にある小さな引き出しを引っ張る。少女はそこから、手のひら大の鉛色の箱を取り出し、銃の尻に当てる。エネルギーの充填は一瞬で終わった。

だが、少女は降りて来なかった。

中で椅子に腰をかけたまま……そしてタクを抱きかかえたまま、気を失っていたのである。

第二章 カイ

1

丸太を積んで固定しただけの単純な壁で、調度品もほとんどない。殺風景な部屋である。だが今誰が部屋に入って来ても、部屋の造りなど微塵も気にとめることはないだろう。ここを出た後に、果たしてどんな模様の部屋であつたのかも全く覚えていないだろう。部屋の真ん中、ある一点があまりにグロテスクで衝撃的であつたから。恐怖に顔を歪めた形相の、不気味な死骸の山が築かれていたから。安物回路に内蔵された電子音のように軽い音であつたが、その都度に放たれる、凝縮された青い光弾は男たちの額を的確に撃ち抜き、永遠の無へと送りこんでいく。

男たちはすでに手足を撃ち抜かれ、酷い怪我を負っており、身動きのままならない状態になっていた。ただがむしやりに助けを求めただけの、哀れな男たちの頭部を、一発、また一発と青い光弾が貫いていく。虐殺、そう表現しても大袈裟ではない光景だった。焼け焦げた血の匂いが室内に広がっていた。

残るはただ一人。彼も右足と右手の筋を撃ち抜かれており、その部分はえぐられたかのように蒸発して消失している。血と肉とが熱に焦げて癒着している。

連続した射撃に温かくなった銃口が、男の額に押しつけられた。

エズワ・デンは、六人の仲間を目の前で殺され、足の激痛も忘れるほどの恐怖にかられていた。今まさに自分にも同じ運命が襲いかかるうとしているのだ。自分の心臓の音をはっきりと聞くことができた。

目の前に、死神が立っていた。革製のような光沢を放つ真っ黒なスーツ、真っ黒なヘルメットをかぶった人影。真直ぐとデンの額へと伸びた左手には、銀色の正方形の箱に握りをつけたような無骨な形の機器が鈍く光り輝いている。これが、彼らの銃なのである。そ

の銃の凶悪なまでの破壊力をデンは嫌というほどに見せ付けられていた。何しろ、分厚い鉄板に隠れて身を護ろうとした仲間の一人を、その鉄板ごと貫いてしまったのだから。

デンはなんとか自分の喉の奥から言葉を搾り出すことが出来た。まだ言葉というものを忘れていなかった事に驚く冷静な自分もいた。「わかった。一時間以内に用意するよ。だが地球の物なんかで間に合うのかい」

また、軽い銃声。デンのこめかみから血が流れる。

「余計な事は云わなくていい」

くぐもった声がヘルメットの奥から聞こえる。抑揚の全くない、若い男の声だった。

デンは足を引きずりながら、出ていった。苦痛をこらえる呻き声が、一步ごとに漏れる。だんだんと小さくなっていく。

黒いスーツの男は、銃を腰のホルスターに納めると、ヘルメットに手をかけ、ぬいだ。

透けるほどに色の白い、きめ細かい肌の男であった。造り物めいた、半透明の青い髪の毛が、窓から差し込む淡い陽光を浴びて輝いた。髪だけではなく、存在の全てが、誰かの造作物のようであった。高名な芸術家の彫刻のようであった。見た目は、二十歳前後であるうか。眉目の秀麗なその顔には、何の表情も浮かんではいなかった。男は、右手の甲、手袋にある小さな装置を口元に近づけた。

「カイだ。明日の回収地点は確認した。それまで、地上でジーン・ウーズイの首を稼ぐ」

カイ、と名乗った男は、通信を終えると山小屋の外へ出た。なだらかな傾斜地になっており、辺り一面を針葉樹に囲まれている。

目の前に、茶色の鎧に身を包んだ巨人が跪いていた。木々の隙間から漏れる太陽の光を受け、鈍い輝きを放っている。全体的に流線型の装甲は、様々な攻撃をすべるように受け流してしまうだろう。薄暗い場所ならば、土や木々の色に完全に溶け込んでしまうのである。

う黒みがかった茶色のカラーリングが施されている。

ギ・グルーグと呼ばれるこの機体に乗って、カイは戦ってきた。だが、機体は無茶をさせすぎて回路がショートしてしまった。通常の動作に問題のない程度ものではあったが、戦いの場では何が起こるか分からない。修理を行っておこう、とギ・グルーグの外へ出たところ、デンたちに狙われたのである。

周囲を取り囲む木々は、全てを見ていた。近くに一件ポツンと建っていた山小屋から、男たちが出てきた。七人いた。近寄って来る彼等は何やら理解の出来ない台詞を云いながら（恐らく翻訳機の性能の問題ではないだろう）歩み寄り、不意に隠し持っていた銃でカイを狙った。だが、一人は銃を持った腕を蹴り折られ、一人は青い光弾で銃と腕とを落とされ……あつという間に全員とも戦闘不能に陥れられた。カイは、それでも情け容赦なく一人一人の頭部を狙いとどめを刺していったのである。

たまたま最後に残ったデンには、とどめを刺さず、生きる権利を与えてやる代償に回路修復に使えそうなパーツを要求した。

酒盛りでもしていたのだろうか。食い散らかした跡。焚き火の跡。カイはそこに焼け残った本を見つけ、少し興味を覚え、手に取った。黒い皮カバーの本である。

小屋へ戻る。中は簡素極まりなかった。物資の乏しい時代だといっただけではなく、デンたちが食べられる物を食らい尽くし、燃やせる物を燃やし尽くしてしまった結果であった。もちろんまだ部屋の中央には死体の山が築かれている。

カイは手にした本を開いてみる。

二九七二年 九月十九日

彼らの戦闘は、この付近でも絶え間なく続いている。

彼等は我々と同じ姿をしているが、中身は悪魔の化身に違い無い。なんでも、この大陸に、二千機ずつをつぎ込んだの、正々堂々とし

た星と星との戦いなのだそう。

疲弊しきり、全世界中の政府が無力化し、科学的にも衰退し、物質はなくなり、大地のほとんどが汚染され、我々は免疫を持っていくが人類の大半を死滅させた死の風が常に吹く……その地球を守り、正しく復興させるため、地球を外部から統治するのだそう。低級な生物は、脳を別に持たなければ進化できない。単細胞生物から脱することが出来ない。ああ、我々にとって実に有り難い行為だ。その統治権利をどちらが有するかを決するための戦争なんだそう。本当に本当に有り難いことだ。汝らに光あれ、だ。

たしかに、いろいろな大罪をおかしてきたのではあろう。だが、科学文明が滅び、闇に怯えねばならない暗黒の時代を向かえたことで、我々も学んだのだ。つまらぬ者もまだ多くいるが、種全体として精神は浄化され、向上したはずなのだ。（せめてこの程度はどうと発言出来なければ、そもそも我々の歴史はあまりに悲しすぎるではないか）

政府の無力化も結構なことではないか。くどいようだが暗黒の時代を向かえることで、精神的に無垢で純然とした光の時代も来たと云えるのだ。ところが、奴らは我々の精神を暗黒の状態に引き落とそうとしているのだ。一体、何度輪廻しても許されぬ罪などというものを、いつ我々

まだ燃え残った部分はかなりあるのだが、文章はここで終わっている。ペンを持っている最中にデンたちに乗り込まれたのだろうか。そして、撃たれ、切り刻まれ、この近くで永久に眠っているのだろうか。文章の途切れているその頁には、大量の血がかかっている。

カイは、本を投げ捨てた。どのみち、彼には何と書いてあるのかなど、全くわからない。生命体の意志を読みとり、相手に意志を伝えるだけの翻訳機に、文字の解読など不可能であった。

話に聞いていた、地球の紙というものを初めて見たので、つい手に取ってみただけで他意はない。

デンが戻るのは早かった。頼まれた部品ではなく、武装して自動車に乗った十人近くの仲間を引き連れてきた。カイが撃ち抜いた彼の右太股には包帯が巻かれている。薬のせいかもしれない。興奮のせいかもしれない。もう全然苦痛を感じてはおらぬ様子で、カイを罵る言葉を吐いている。

カイが全く無防備な様子で小屋の中から出てくるのを見ると、怒りと、その後に襲い来るであろう快楽を想像し、奇怪な笑みを浮かべた。

「いいかてめえら、あの痩せぎすのくそ野郎を……」

横を向き、他の男達を見回して叫ぼうとした瞬間、デンの左側頭部に小さな穴があき、同時に右側頭部から血と脳しようが吹き出た。血と皮膚が蒸発し、音をたてる。小さな穴から一瞬湯気が立ち上る。予期もせずいきなり降りかかってきた赤黒いシャワーに、驚いた運転席の男が大きく口を開け、絶叫した。その口の中が青く輝いたと見えた刹那、その光はその男の首を突き破り、後部席にいた大男の胸板を貫いた。大男は奇声を発し、車から転げ落ちた。男はそのまま永遠に動くことはなかった。

カイは銃を手にしていた。一瞬で三匹を屠殺したカイは、さらに二回引き金を引いた。結果を確かめもせず、小屋の中に身を躍らせた。閉まった扉に銃弾の雨霰。樫製とはいえ所詮木製である。瞬時に蜂の巣のような無数の穴があく。だがもうその先にカイはいない。カイは小窓から目をやる。小さな爆弾らしき物を持った男が、それを投げようと手を振り上げた。カイはその爆弾めがけて銃を撃つ。正確な狙いだ。男が手にしていた物が爆発し、すぐ隣にいた男をも巻き込んだ。四肢が千切れ乱れ飛ぶ気味の悪い光景が続く。わずか数秒で七人の仲間が地獄に叩き込まれる様を見て、残った三人は逃げ出そうと、慌ててハンドルを握りなおす。カイはゆっくりと銃を手にした腕をあげた。確かめるように一発ずつ、三回撃った。

カイは悠々と銃のエネルギーカートリッジ交換を始めた。

その時である。地球人をあなどるあまり警戒心が鈍っていたのだろうか。小屋の中、奥の扉の向こうに気配と物音を察知した時にはもう遅かった。火薬が爆発する小さな音が響いた。扉に穴があき、飛び出した何かがかいの腹部を突き抜けた。かいの腹と背から血が流れた。無地の木の壁がかいが背にしていたところ赤く染まった。

火薬を爆発させて、金属の弾を飛ばす。原始的かつ有効な殺傷兵器だ。カイは、自分がその銃弾に腹部を貫かれ、負傷したことを体を襲う激痛により認識した。だが、彼の表情は相変わらずであった。痛覚などたかが脳に送られる情報の一つだ。そう云わんばかりである。

撃ち抜かれた瞬間、彼はもう反撃に移っていた。低く跳躍し、一瞬で扉へと迫る。扉を蹴った。何か柔らかいものを一緒に蹴飛ばす感触。扉が開く。そこは地下室への階段になっていた。扉と壁の間に挟まっているのは、まだ十歳にも満たない幼い子供であった。かいが押えている扉に身体を奪われ、右手に持った銃をかいに向けることが出来ない。

「悪魔め。父ちゃん達のカタキ」

かいを睨み付けた。小屋の持ち主の子供だ。デン達から隠れ、母親と一緒に地下室に潜んでいた。地下室にも当然魔の手は伸びた。母親の機転により、この子だけ死角へと隠れ、難を逃れたのである。連れ去られた母親がどうなったのかは、子供には分からない。すでに何日も過ぎているのだろう。げっそりとやつれており、目だけが幼い子供とは思えぬ殺気をはらんで輝いていた。自分の体力精神力が限界に近づいていた頃、運良く愚かな傭兵たちが仲間割れを起こして殺し合い、一人きりになった。そう思い、出てきたのだろう。

カイは子供を静かな表情で見つめた。すでにかいの腹部からの流血は止まっており、服の上からでは分からないが、損傷が治癒し始めてさえたのである。

カイは、子供の額に銃口を当てた。引き金を引いた。三発、撃つ

た。床に叩き付けたトマトのように、頭部は碎け、飛び散った。

「銃さえ向けなければ、おれは敵ではなかったのにな」

血の池の中に立ち、呟いた。

常人ならば間違い無く吐き気を催すであろうほどに完全に原形を失った頭部。……なぜ二発も無駄弾を使ってしまったのだろうか。

カイはそれだけを考えていた。

3

約五千メートルの高度に、超大なその姿は浮いていた。テオ・リユー・フィルク。タグザムティア軍の二千メートル級超大型戦艦である。紡錘形で、中央に艦橋らしき突起が見えるだけの単純な形状であるが、常軌を逸脱した巨体が、その無個性を必要以上に補っていた。汚染されたドス黒い雲の遙か上空は、燦々とした陽光が輝いていた。それに反射して輝く白銀の機体は、現在の編成軍をまとめる旗艦としての威厳を十分に備えていた。

テオ・リユー・フィルクの周りを、シル・カルと云う名称の黒鉄色の戦闘艦が七隻、囲んでいる。こちらは、全長一千メートルほど、タグザムティアの戦闘艦としては平凡な数値である。地球の英字である「U」に似た形をしており、船体の横幅だけで比較するならばテオ・リユー・フィルクと対等のボリウムを有している。ただし前述したように、真ん中がざっくりと切り込まれたような形状になっている。二隻をつなぎ合わせたようにも見える。

それらは気球のように、海上に浮かぶ船のように、静かに風の中に浮いていた。ただ微かな動力炉の駆動音だけが漏れ、風に溶けていった。

星座の中に見える小宇宙のように、遙か彼方にも同様に戦艦の群が見えた。ライスカイス軍の戦艦であった。「取り決め」により、距離は一定に保たれ、決して戦艦同士で争う事はなかったが、雲の下では、空中、地上を問わず、壮絶な命の奪い合いが行われていた。テオ・リユー・フィルクの、通路にある窓から、一人の少女が遙

か下で行われている戦いを見つめていた。窓と云っても、外壁の力メラが捉えた映像を内側の壁に投影しているだけである。この船には、地球で呼ぶ感覚での「窓」は存在しない。

メルリ力はまだ小さな女の子だ。淡いブロンドの髪の毛が腰に届いている。元気に笑えばさぞかし可愛らしいのだろうが、彼女の顔は憂いに覆われ暗く沈んでいるように見えた。

「なんでみんな仲良くできないんだろうね」

討伐、制裁……理由を造り出しては戦ってばかりいる。

少女は思わず嘆息まじりに呟くと、地球のクマに似た動物のぬいぐるみを、ぎゅっと抱きしめた。

汚れた分厚い雲が船と地上との間にある。本来ならそれに阻まれ、戦いの様子を見る事など出来ない。だがコンピュータの特殊処理により、「窓」は雲の下の様子を人間の目で直接見る以上の鮮明さで映し出していた。遙か遠方まで連なる山々。湖。平野。小さな町など、様々なものを窓は映し出す。その上空で、鋼の巨人が戦っていた。刀で互いを壊し合い、銃で互いの命を奪い合い、無数の巨人が宙で死のダンスを舞っている。

ギヴェイ元帥は軍部内では位人身を極めた存在である。自らの率いる軍に次々と勝利の果実をもたらし、カリスマ的立場を不動のものとしていた。名声実力共に一流の男だ。だが、政治面に関しては微塵ほどの発言権もない。メルリ力はギヴェイ元帥の孫娘だ。正規に登録された軍人ではないし、まだ成人もしていない。自分が誰かに意図的に痛めつけられた経験などはないし、他人をそのような目に合わせたこともない。精神的にも肉体的にも極めて平穩無事に過ごして来た。野蛮な世界とは完全に無縁の場所に身を置く存在だった。

彼女は銃後の保護者を気取って戦争を讃美する他の連中と違い、徹底的な戦争反対論者だった。偉大な人間が祖父にいる事実への幼稚な反発心が起こした感情なのかも知れない。由縁はともあれ、現在には自分の精神がそう育った偶然に素直に感謝している。

延々と続くベルトウェイを移動中、二レクツル（レクツル：タグザムティアの距離単位の一つ。彼らの換算によると一レクツル＝一八九メートル）毎にある小さな窓が、戦士たちの戦いを、そしてその壮絶な死に様を映し出していく。

ベルトウェイの上を、様々な者が行き来する。メルリカがその身を乗せているのは船尾へと向かうベルトである。反対側、船首へ向かうベルトの上に、祖父の姿を見た。他の兵同様黒と銀の服を着ているが、胸には猛禽をモチーフにしたような階級章。その階級章は、タグザムティア軍にはただ一つしかないものであった。肉体はまっすぐだったが、顔を見ればかなりの老齢であることが分かる。まるでシワの中に顔が存在しているかのようだ。

ギヴェイ元帥は補佐の男と並び、護衛の兵士たちに囲まれていた。移動中ですら、何やら多忙そうな様子で、声をかける事すら出来なかった。

ギヴェイ元帥。今回の奇妙な遠征の発案者である。

4

元帥は、応接用の部屋で、椅子に座っていた。反対側には、背広を着た男たちが何人か座っている。地球人である。外交官や、色々な使節の人間などだ。

タグザムティアの人間と、地球の人間とは驚くほどに外観が似通っている。実際、外見上での差違が全くないのだ。地球の者がそれを話題にすると、

「発達していった知的生物が、このような形になることは、当然のことではないのかね？」

と、元帥は逆に不思議がっていた。

そして、話は本題へと入った。室内のボイスレコーダーが音声を記録していく。

なぜ我々の住む地球が襲われなければならないのですか。

別に襲ってはいない。

流れ弾に当たったり、町が燃やされたり、かなりの被害にあっています。住民たちが怯えています。なんの権利があって、地球を奪おうというのですか。

権利ではない。義務だ。

今、義務とおっしゃいましたね。それは一体誰のどんな義務ですか。

地球はどこにあるのかね。

どことは。……宇宙……ですか。

そう、宇宙だ。辺境ではあるが、宇宙に地球はある。地球は地球同士で勝手に汚し合うから、他に迷惑はかけないから、ほうっておいてくれ。勝手に、好きなようにさせておいてくれ。このような言い分を持つ者がいたら、どう思うかね。

……

地球は、代表となる生物の魂を早く上の次元へと昇華させねば、宇宙の害となる。

そんなことは……

実際、過去にあったではないか。都合よく忘れていいのかね。宇宙は全ての星を見ているのだよ。君たちの暦でいう、「西暦二三七八年」ある惑星の権利を巡り、二つの争う勢力が戦争を起こし、拳げ句の果てには惑星を粉微塵に破壊してしまった。「西暦二四〇二年」ある惑星上で発見された宇宙史上でも珍しい新種の生物を、狂った宗教がらみの科学者たちの抗争で、死滅に追いやった。（中略）「西暦二四八五年」宇宙空間で、地球人にとつてかつてない規模の艦隊戦が起こり、その砲撃による重力場の変動が、十二の天体を持つある星系のうちの、四つの惑星の地軸を狂わせた。これが、その星だけでなく、星系そのものにどのような恐ろしい影響を与えるか、云うまでもないだろう。

だけど……もう、わたしたちにそんな力はない。

それもまた一つの罪なのだよ。あれほどまでの恐るべき力を持ち

ながら、己を御そうとする努力をまったく行わず、結局、その力で自らを滅ぼしてしまった。自分たちを操れない者が、「進化する力」を持つことは、大いなる罪でしかないのだよ。

最初から、君たちは「動物」でいればよかったのだ。我々の手が差し伸べられるまで。

結局、地球人たちは、一言たりとも反撃の言を吐く事が出来なかった。後にまた新たな論客が送り込まれる事になるのだろうが、それもどうなる事か。……とにかく彼らは何をする事もなく地上へと戻ることになる。キュー・ジ・ヴィと呼ばれる輸送船に乗り込んだ。有人式人型戦闘兵器エクシールを運ぶ事を主な目的として建造された船である。エクシールを十機ほど搭載する事が可能だが、今はみな出撃しており、ガランドウの状態だった。だが、地球人たちは貸し切り飛行を楽しむわけにはいかなかった。広いのは格納庫だけで、部屋はすべて狭く、汚れていた。彼らは兵士が仮眠をするための小さな部屋に全員一緒に詰り込まれ、窮屈な思いをみなで共有していた。

激しい攻防が繰り返されている閃光の中を、船はゆっくりと真下へ降下していく。

「すぐそばで戦ってるじゃないか。本当に大丈夫なのかよ」

「取り決めて、大丈夫なんだとさ」

「紳士のつもりかねえ。それだったら、最初からゲーム盤で勝負をつけてくれよな」

みな口々に文句を言い始める。監視の兵が睨んでいたが、彼らなど別に怖くはなかった。あの元帥の、冷たく不気味な……そう、まるで機械のような表情に比べればどうと云う事はない。

5

ギヴェイ元帥は地球人達を地上へと運ぶ輸送船を見送った後、突然に血を吐いて倒れた。ケギル特殊補佐官が抱き起こそうとするが、

元帥はその手を振り払った。

「かまわんでもよい。お前が忠誠を誓ったのは、この肉体にはあるまい」

元帥はシワの中から口を選び出して、小さく開いた。弱々しい囁きが漏れる。

「はい。……と云うことは……しかし、まだ早いのでは」

「いや。もう、これも保たぬよ」

ケギルはまた頷いた。そうだった。それを予期していたからこそ、彼は……

6

メルリ力は軍人ではないが、さすがにあわただしく駆け回る軍人達の中にあつて、気疲れをしたのか、自室に戻るや否や柔らかい布団のしかれた寝台へと倒れ込んだ。

「はやく……帰りたいな」

母親に会いたい。と、彼女が買い与えてくれたぬいぐるみを、再びぎゅっと抱きしめた。

タグザムティア社会の地位に関しては世襲と云う制度はない。だが、ギヴェイ元帥の息子（メルリ力の父）が、次の元帥になる事は確実と云われていた。軍部での実績、人望ともに申し分のない存在であつたし、皇帝の信任も厚かつたからだ。しかし、ある戦闘宙域への移動中、兵士になりすまして潜り込んでいた敵対組織の者の攻撃により、爆死した。現在は、候補と噂されている数人が、見えないうちで醜い引つ張り合いをしている。

メルリ力は、今よりもっと小さな頃は、新米兵士のいる教練所の宿舎に入り込んで悪戯をしたり、それどころか仲良くなった兵士から銃の扱い方を習うなど、奇行が目立つ、兵士達の間での有名人だった。……ただ、その時は戦争の悲惨さを何も知らなかった。そして知っていく。学んでいく。見知った顔の、仲の良い人間たちが死んでいく。笑って出て行った者が、翌日に死体となって戻ってくる。

る。

レクスという名の彼女と一番仲が良かった男がいた。彼女が「おじさん」と云えば、まずこのレクスを指していた。彼はエクシールの操縦に関して抜群の腕前を持っており、歴戦の勇者と云っても過言ではない存在だった。普段はとても優しく、人を笑わせる冗談ばかり云っていた。メルリカは彼が大好きだった。そんな彼も、宇宙で、仲間を助けるために死んだ。

なぜ今回に限って、祖父は自分などを、このような辺境の惑星まで連れてきたのだろう。大きな枕に顎を埋め、考えていると、ブザーの音が部屋の中に響いた。メルリカはすぐさま跳ね起きた。立ち上がり、すぐそばの壁にあるボタンを押し、ドアの開閉を操作する。通路には、元帥と数人の男が立っていた。

「おじいさま」

今頃何の用だろう。メルリカは訝しいと思いつつも、笑顔をつくった。だが、もともと感情豊かとは云い難かった祖父の、いつも以上の冷たい表情に、メルリカの笑顔も凍りついた。元帥は肉体が衰弱しているのか、立っているのもやっとに見えた。足下がふらふらとして頼りない。危なくなると後ろの男たちが手を伸ばし支えた。「涙こそ出ぬがな」老人が閉ざしていた口を、不意に開いた。「わしのような者でも……良心は痛むのだよ。我が孫娘メルリカよ」

元帥の横に立っていた若い男。ケギル特殊補佐官が、右手を上げた。真直ぐにメルリカの顔へと伸びたその手には、短銃が握られていた。それは黒く無気味な光沢を放っていた。

運命の神は目を見開き立ちすくむ幼い少女にその鋭い鎌を振り下ろした。

7

それはまるで、熱湯から立ち昇る湯気のように見えた。澄んだ湖面に反射する映像に突如、石を投じたかのように、一瞬、空気に波

紋が見え、揺らめき広がった。次の瞬間には、眼前のゾ・ヴィム編隊はその大半が消滅していた。

気配を察知して逃げた機もいた。中途半端な逃げ方をした者に一番無惨な運命が訪れた。鋭利な刃物で果実を切ったかのように、機体は断面を見せていた。ある機体は、真ん中から縦にすっぱりと断たれていた。つい今まで中で操縦をしていた、人体標本のようになった人間の切断面から、熱したチーズのようにどろりと臓物がこぼれた。火花を散らしていた機体が一斉に爆発を起こした。水に浮くよりも軽く、さも当然のように空に存在していたそれらの機体は、突如として地表から伸びた重力と云う名の巨大な手に掴まれ、煙を噴きながら落下していった。

果たして複数の機体を一瞬にして破壊した兵器はどのようなものなのか。原理を大雑把に説明すると、異なるエネルギーによる二つの力場をレーザーに強引に同調させて飛ばし、力場形状差分によって分子を引き潰してしまう兵器、となる。だが熱湯に溶けて蒸気と混ざって大気に霧散していく、そんなイメージを見た者に与えるため、その兵器は「昇華子粒砲」と呼ばれている。

タグザムティア軍の、有人式人型戦闘兵器アロ・イーグは、空戦の主役とも云える存在であり、その機体を強化したレ・アロ・イーグは隊長機として乗られることが多い。レ・アロ・イーグに備えつけられた昇華子粒砲は、エネルギー装填完了まであまりにも時間がかかりすぎると云う欠点さえなければ、そして故障さえ少なければ、今ライスカイス軍のゾ・ヴィムに対して威力を示したように、空中格闘戦においてはまさに無敵の兵器であった。が、通例に漏れず、リーアック隊タグエン隊長の操るレ・アロ・イーグの昇華子粒砲も、二発目を放った時点で調子がおかしくなった。タグエンは舌打ちするものの、まったくおしみなく、昇華子粒砲を敵機へと投げつけ、砲に内蔵されていた小型の爆弾を爆発させた。昇華子粒砲のエネルギーを作り出す駆動系心臓部は、一つ一つのパーツがバリアーで護られており、それらがさらに厚い金属の装甲に覆われている。攻撃を

受けても爆発しないように強固に対策してあるのだ。だが、心臓部に直付けされた爆弾は、それらを跡形無く吹き飛ばす。制御のできない、解放されたエネルギーは、直径三十レクツルほどの真っ白な円状空間を造りだし、その中の物すべてを消失させた。

「無」となった暗黒の空間に、どっと空気が流れ込む。周囲のエクシール全てが、風に引つ張られる。それもほんの一瞬のことだ。「まったく、相変わらず豪快だねえ、おれたちの隊長さんは」

リーアック隊所属のツーが、のんびりと軽口を叩く。そのにやけた表情とは裏腹に、彼の操縦するアロ・イーグは、ゾ・ヴィムの群に斬り込み、刀を振り回し、攪乱させていく。

隊長機のそばに、同じくタゲンの部下リーアック隊所属のウエルの乗るアロ・イーグの姿。両手に構えたライフル銃が、ツーが作り出した一瞬の混乱を利用し、敵の動力部を確実に撃ち抜いていく。爆発が起きると、地球の重力の存在を突然に思い出しでもしたかのように、そのゾ・ヴィムは落下していく。

「あまり離れるなよ、ツー」

とかく勝手な行動をとりがちなツーに、ウエルは注意を促す。隊長があまりチームワークを重要視しないので、どうしても自分がその役に回らざるをえない。遙か年輩の人間を注意するのは好きじゃないが、仕方がない。

タゲザムティア軍のアロ・イーグも、ライスカイス軍のゾ・ヴィムも、酸素の薄い高度を、縦横無尽に飛び回っている。水の中の魚のように。背中のランドセルのような部分や、腹部、脚などから、炎が吹き出していたが、それはごく少量であり、素人目に見ても、それは姿勢制御のためのもので浮力を生み出すものではない事が分かる。

空を飛ぶ技術を完全に失った地球人にとって、超重量の機械を空高くに飛ばすと云うだけでも信じられない事だ。そのうえ機体からは炎がほとんど出ていないのだ。それを疑問に思った地球の使者に案内人は快く答えた。浮力そのものは重力を制御する装置で作り出

している。彼らにとっては別段秘密でも何でもない初步の科学だ。

「またせたね、タゲン」

低い女の声と共にアロ・イーグが上空より降下してくる。タゲン機の前で静止する。タゲン機操縦席の副画面に女の顔が映る。まだ若く、黒髪は長い。少し吊り上ったきつい雰囲気目の目が印象的であった。

「ノウヤン、直ったのか」

「ああ。同調プログラムのちょっとした破損だったよ。整備士のヘボさ。あんなヤツ使うから、ルキロがぶっ壊れそうなぼろいウーズイで出なけりやなくなっちまうんだ」

「心配か、ルキロが」

と、タゲンが笑う。

「まあ、妹みたいなもんだから。……あの娘、かなり癖のある操縦するし……全然学んでいない機体で、大丈夫かどうか。……まあウエルほどびくびくと心配はしてないけどね」

「お、おれは別にそんな……」

ウエルからの通信が割り込んだ。端麗だがどこか朴訥とした青年の顔が、それぞれの操縦席内副画面に映る。

「そろそろ始まる頃だぞ」

ツーは、右側の副画面の一つに、テレビ映像を映し出した。

「おい、戦闘中だぞ」

ウエルがまた口を酸っぱくする。

「まあまあ。……もうこの近くにはいないじゃんよ、敵」

画面には、ライスカイスの人間特有の、病的な（彼等の主観では）ほどに青ざめた顔が映っていた。ツーは、画面のその男に、銃を真似た指の形を作り、撃つ仕草をする。

ライスカイス側の地球のテレビ放送用電波を利用した演説である。話している内容は、タグザムティアのギヴェイ元帥が訪れた地球人使者達に伝えていた事とさほど変わらない。

「さて、もうそろそろかな……」

画面が乱れた。押し潰したように映像がひしゃげ、真っ白に光ったかと思うと、真っ暗になり何も映らなくなった。数秒後、また映像が表示されるが、幕の合間に主役は交代していた。

ブロンドの髪の毛を結い上げ、軍服を着こなしたその姿は非常に美しい、凛々しいものではあったが、どこと一言で名状のし難い違和感があった。それは、全てが奇妙だったからである。画面に映っているのは、少女になったばかりのような、幼い女の子だったのである。

ツーは絶句した。

「割り込み電波で演説するってのは聞いてたけど……。おい、みんな見てみるよ」

本来、そこに映るのは老齢にさしかかった元帥の顔であるはずだった。

「地球の皆さま、はじめまして」

少女がその小さな口を開く。声も、顔と変わらずまだ幼さから完全に脱しきれてはいない。

ツーは予期せぬ出来事にあっけにとられている。口はだらしなく半開きになっていた。タゲンもノウヤン、ウエルも同様に驚きを隠せない表情でただ画面を見つめるばかりであった。

少女は微笑んでいたが、そこからは得体の知れぬ冷たさしか感じられなかった。

「わたくしは、タグザムティア軍元帥代行メルリカ・カ・レ・ムともうします」

「にやにい！ ゲンスイダイコウだあ？」

ツーは叫んだ。自動索敵装置の状態を全開に切り替えてから、あらためてテレビ映像をメインスクリーンに映してみる。非常に鮮明に拡大されたメルリカの顔からも、やはり、どんな表情すら読みとることができなかった。整った、冷徹そうな顔がただ大きくなっただけだった。

「おい、聞いてくれ」

メルリカのよどみのない美しい声に、タゲンの野太い声が重なった。

「今入った情報だが、ギヴェイ元帥が亡くなったらしいぞ」

「うへえっ」ツーは大袈裟に体をのけぞらせながら叫んだ。彼を知らない人間には、単にふざけているようにしか見えない。「こんな辺境の惑星で、死んじやったのか。……それにしても、あのお嬢ちゃん変わりすぎだよ。本当に……レクスや、ルキ口とよく遊んでた、あのお嬢ちゃんなのか……」

第三章 メルリカ

1

大型戦艦から宇宙へ向けて射出された小さなカプセルは、一見滑稽にも見えるが、いま全体を占める雰囲気は実に肅々としたものだった。

タグザムティア軍の旗艦テオ・リユー・フィルクの外壁の上は、数千の兵士たちにより埋め尽くされていた。彼らを保護する力場の外は、激しい風が吹いている。

射出と同時にその数千人の右腕が一斉に前方へ突き出され、胸の高さに上がる。右拳を引き戻すように、左胸に当てる。敬礼の意を示す動作だ。

周囲を囲む戦闘艦シル・カル内のすべてのスクリーンが、それを映し出している。

ギヴェイ元帥の亡骸を収めたカプセルは、引力の影響を全く受けず、ただ風に揺られながら、ゆっくりと、ゆっくりと宇宙を目指して上昇していく。死亡した惑星での宇宙葬は、タグザムティア独特の習慣である。たとえ地上で死んだ者だろうと、宇宙に上げて葬るのである。戦闘で死ぬ事、そして死んだ地で眠る事、それは彼らの本懐とするところだ。だが、彼らは敵に対する様々な汚れの気持ちが強く、死んだ場所から真上、そのまま宇宙へと上げる習慣が生まれた。勿論厳かにかつ盛大に儀式が執り行われるのは上部の人間だけであり、運良く死骸の回収された一般の兵士たちは、全作戦終了後にまとめて宇宙に葬られる。

一人の少女がいる。長いブロンドの髪の毛を上げて縛り、さつぱりとまとめている。少女兵の物を間に合わせて改造したような服は、それでもかなり大きくぶかぶかとしている。顔は幼さを多分に残しているが、柔弱さは微塵も感じられず、不気味なほどに落ちて着いていた。これから軍部を支配する事になる覚悟が、そうさせて

いるのだろうか。と、側近の一人は横目で少女メルリカ・カ・レ・ムを見遣りながら考えていた。しかし、時折彼女の姿を見る事はあったが、このいきなりの変貌ぶりは異様であった。数年前まで一般兵士達に混じってふざけて遊んでいたという話ではないか。元気でとても優しい少女。会う前からそう聞いていたし、会ってからもう感じていた。魂の根底に寂しさがあるようで、思わずその笑顔を全力で守ってやりたくなる……

自分の祖父が死んだのだ。以前の彼女ならば泣き崩れていただろう。何かが彼女を強く変えたのか？ いや、彼女の顔に悲しみをこらえている様子はうかがえない。……彼女は悲しみを感じていない。いかなる感情も、そこに読みとる事が出来ない。ただ、シヨックに感覚が麻痺してしまっているだけなのだろうか。……そうに違い無い。……側近は、そう考える事で自己の感情を欺瞞させた。

何だ……今は……。側近は、それを見のがさなかった。彼女の、その変化を……

メルリカの瞳がうるみ、そして涙が頬を伝った。

驚いた。だが、もっと驚き、そして困惑しているのはメルリカ自身のほうだった。注意せねば気付かないほどの狼狽ぶりではあったが、とにかく、側近の目には、彼女が突如流した自身の涙に驚いているように見えた。何か恐ろしい秘密を知ってしまったような気がして、側近はそのことを自身の胸の中だけにしまっておくことを決心した。

2

眩しい……

薄目を開けると真っ白な光が鋭い凶器となって、網膜や脳を刺激する。

ここはどこだろう……

光に目を慣らしながら、考えた。

この重力は……少なくとも、アロ・イーグの中じゃない。

だんだんと視界がはつきりしてくる。地球人の、木材で建築した居住空間のようである。

窓から、陽光が漏れてきていた。

「気がついたみたいだね」

低い女の声。地味な服装は木の壁、調度品にとけ込んでおり、声をかけられて初めてそこにいる事に気づいた。小太りした中年の女だ。仕事の邪魔にならぬようにか、長い髪を後ろで無造作に束ねている。

「ここは……」

狭い部屋のぐるりを見回す。ドアの向こうから、見知った顔が覗いていた。身長はかなり離れた二人の少年達だ。二人は興味深々の顔付きを隠そうとせず、物陰からじっと少女の顔を見つめていた。今、赤毛の少女は部屋の壁際にいくつかある寝台の一つに寝かされていた。赤毛の少女は、またあらかめて女の顔に視線を向けた。

「あたしや、あれらの母親だよ」

女は笑う。

視覚に続き、触覚が戻って来た。何やら全身が締め付けられている感じがする。体をうまく動かせず、確認する事は出来ないが、包帯が全身のあちこちに巻いてあるようだ。以前、物資のない場所での戦闘中、このような原始的な手当を受けた事がある。鈍かった感覚がだんだんと蘇ってくると、下半身にどうにも無視出来ない不快な感触が襲ってきた。それが気になっっているらしい事に気がついたのか、女が小さな声で耳打ちする。

「あんた、今、生理中でしょ。……処置しといたから。しかし本当に驚いたね。宇宙人だって聞いてたから、どんな姿かと思ってたけど、何から何まで地球人と同じなんだから」

赤毛の少女は、自分の頬をその髪の毛よりもつと赤く染め、うつむいてしまった。

扉の向こうのエイジとタクは、何があっただのだろうと顔を見合わせている。最初のほうがよく聞き取れなかった。

「あんだ、名前は何ていうの」

女……エイジとタクの母親、キョウコ・シデが訊く。その問いの結果にエイジは非常な興味を覚えた。単にキョウコは、名前が分からないと扱い辛いと思ったただけなのだろうか。

少女は目を閉じた。数秒の沈黙の後、目を開き、続いて口を開いた。

「ルキロ・エ・ル」

ルキロエル……エイジは心に呟いた。どこの国の名前でもないなと当たり前の事を思う。彼等が聞いた話が真実であるならば、彼女は異星人なのだ。ふと気づいてみると、彼の足は部屋の中に数歩入ってしまった。もともと彼とタクとの部屋なのだが、しばらく入るなと母キョウコに云われていたのだ。慌てて後ずさりして出て行こうとしたが、キョウコにもう別に入っても問題ないといわれ、拍子抜けしたようにそのまま壁によりかかった。

「どこが姓で、どこが名なの」

再びキョウコが問う。観念したのか、少女……ルキロ・エ・ルの答えは早い。

「ルキロと呼べばいい。……あとはそれぞれ、型番と位だから」

「型番に、位だって……」

エイジが隣のタクに話している。徹底的に人間が管理されている惑星なのだろうか。

窓から空が見える。

暗雲が一面を多い、その隙間から見える空は赤い。一度慣れてしまうともう眩しさなどまったく感じない弱々しい光だった。

遠くに見える丘から、全長六、七十メートルほどの船が一隻浮上するのが見えた。

「キュー・ジ・ヴィ……いけない。回収の時間が……」

ルキロは悲鳴めいた高い叫び声を出し、慌てて上体を起こそうとするが、全身に針で突き刺すような激痛を感じた。大きな悲鳴は上からず、呼吸として口から漏れるだけだったが、その顔の表情から

苦痛の度合いを簡単に窺い知る事が出来る。

タグザムティアの輸送艦キュー・ジ・ヴィと、ライスカイスの輸送艦ガ・ガーヌが上へ下へ飛び、それぞれの陸戦用有人式人型戦闘兵器であるジーン・ウーズイとギ・グルーグとを回収していた。ここ数日間にわたった戦闘がようやく終了したのである。

「無茶だよ。全身打撲の酷い怪我してんだから。医者にはもう帰ってもらったけど、肋にもひびが入っているってさ」キョウコは骨太のごつい手でルキ口の柔らかい肩を軽く押さえつけ、横たわらせ、乱れたシーツをかけなおした。「うちの息子が迷惑かけたらいいね。……でも、そっちだって、何もしていないこの星を侵略に来たんだから、文句いわれる筋合いはないけどね」

「シンリヤク？」

ルキ口は激痛を堪えながらも、触覚ではなく聴覚からの情報に眉をひそめた。それを知ってか知らずか、キョウコの口調が少々厳しくなる。

「まあ、あたし達は別に特別いい生活してたわけでも何でもなし。頭の連中がどう変わろうと、あたしらには何が変わるもんでもないだろうし……だから、それだけなら、息子との件でどっこいどっこいでもいいんだけど……こっちは、亭主まで同じような目にあわされているんだよ。あんたらが勝手に始めた意味のない戦いのせいで……まあ、ただの一兵卒にいつてもしかたない事かも知れないけど。とにかく、あたし達があんたを許す許さないは、あんたの考え次第だよ。戦い、殺しを楽しむような人間なら、戦争を起こす者の加担者だ。一般市民を平気で殺せるような人間は許せないよ」

ルキ口はキョウコの顔を見つめ、時折口を開きかけた。だが、キョウコは無言を云わさぬ口調で、ルキ口がなかなか口をはさむことが出来ない。

「でも……」

エイジがルキ口と母に近寄る。

ルキ口の上半身は、裸の上に包帯を巻き、寝間着を引っかけただ

けだ。あらためてそれに気付いたのかルキ口はスーツや服をたくりよせて露出した肌を隠した。

「戦いが起きた以上は、勧告にしたがつて、逃げていればよかったのに、おれが余計な事をしようと考えたのが、もともとの原因だったのだし……」

「地球を汚すな」あの巨人の中で、そう叫んでいたルキ口の声が忘れられない。よそではどうなのか知らないが、自分は彼女らの側から直接の被害を受けた事はないし。と、無意識にルキ口を庇ってしまった言い訳をエイジは後からいろいろと考えていた。

「確かに何で逃げなかったのかは腹立たしいけど、もとのもとして云うのなら宇宙人が侵略に來た事が原因でしょう。貧しいけど平和に暮らしているところに、勝手に武器持って攻撃して來て。……出ていって欲しい、平和な暮らしを返せ、と抗議をするのは当然の事じゃないの。そんな人間を邪魔だからと攻撃するなんて畜生以下の最低な行為だよ」

「黙れっ」

異星人の少女は叫んだ。うまく声が出せず、少し裏返ってしまった。だが、滑稽さは微塵もなく、むしろその小さな唇から発せられる高く鋭い声に、エイジは萎縮してしまった。

ルキ口は急激に動こうとし、再び生皮をはがれるかのような激痛に全身を襲われた。呻きながらも、ゆっくりと上半身を起こした。荒く呼吸をしながら、キョウコの顔を睨む。

「地球人は愚かな種族だ。生物の大半を死滅させ、自らの母星を汚染させ、自らをも貶めた。ゼロから再開した地球人は、いずれ科学水準は戻るだろうが、精神は何も変わっていない。今度は宇宙で同じ事を繰り返すだろう。絶対的に必要なのは現段階からの優秀な者による統治。宇宙の平和のためには、地球は我々の力を知る必要がある。逆らえない事を学ぶ必要がある」

「よくそんな台詞がスラスラ出てくるね。教本じゃなくて、あんたの意見を吐いてみなよ。……あんたの星はそんなに優秀なのかい。」

誰と比較して、何がどう優秀だって云うのさ」

戦争の大義名分を、間髪おかずに冷やかされ、ルキ口は痙攣したように唇を動かした。怒涛の言葉の攻撃を浴びせてやりたいのだが、何も言葉が出てこないのだ。やがて、ゆっくりと云った。

「……少なくとも、自分らの星で……殺し合いはしない」

「だから、ひとの星に来てやるんだね。自分らは可愛いものね」

ルキ口はまた激昂しかかった。が、急に力が抜けたように、項垂れる。

「確かに、今度の戦いは……掲げる大儀の……云ってる事の論法があまりに滅裂としすぎている。それは分かっていた。……地球を統治してもなんの益もないし、ライスカイスとの戦いは昔からの事だけど、わざわざこんなところまできて行う必要はないし……」

涙を流すところまで地球人と同じなんだな……。エイジはルキ口の目に涙がにじむのを見た。ルキ口は、その視線に気づき慌てて手で目元を覆った。

今までのきつい眼差しは負傷しこのような境遇になった故の防御反応だったのか……もう、彼女の目には攻撃的な光は宿ってはいなかった。

3

ギヴェイの遺言により、彼の孫娘であるメルリカは地球に滞在している間、元帥の代行を務める事になった。補佐付きとはいえ、いつまでも務められるはずもなく、母星に帰った後にあらためて次の元帥が選ばれる事になる。昔の地球には王族など能力の有無に関わらず世襲により子孫がその地位を継ぐことが出来る制度があったらしいが、タグザムティアには有史以来そのような法的な制度はないせいぜい自営業を息子に継がせる程度だ。それだけに、亡くなった元帥の孫というだけの理由で幼い少女が代行を務めるなど、たとえ一日だけであったとしても、本来起こりえないことである。だが不思議なことにその点に疑問を投げるような報道記事は、現在も未来

もまったく出てくる事はなかったのである。

取り決めにより今回の戦闘地域は昔大国のあったこの大陸となった。しかし、メルリカ元帥代理は地球全土に探査隊を派遣していた。輝く未来のためにも、惑星の探索は有益だ。今回の遠征は戦争が目的で、しかもライスカイスとの取り決めにより行動可能な範囲が限定されている。だがそれは軍事力を持つ者に対しての取り決めであり、武装さえしていなければ軍に随行してきた民間探査艇とでもしておけば、どうとでも通る。だが今回は、普段とは明らかに異なる雰囲気周囲の人間に感じさせていた。指揮する者が幼い少女であることを差し引いても、やはり何かが奇妙だ。彼らの疑問は、次の会話を耳に入れていたならばさらに深まった事だろうが、そこは密室で当事者以外は誰もその声を聞くことは出来なかった。

「……でも、もっとも重要なのは、今いるこの大陸。それは間違いない」

狭い部屋の中、メルリカは両手で頭を抱え、目を閉じていた。

「見えますか」

傍にケギル特殊補佐官が立ち、自分より遥かに背の小さな少女を見下ろしていた

「映像の断片がね。うまく処理されている。残されているのはこの断片と、わずかな既存情報だけ。複雑なパズルのようだけでも、わたしはそれらをまず一つ解き、この星である事を突き止めた、この大陸であることを突き止めた」

探査隊のもたらした地球に関しての情報によると、ここ数百年において歴史は完全に失われており、口伝として諸処に残されているに過ぎない。蒐集編纂する気概のある者も、現れてはいないようだ。技術力もかなり低下している。技術不足を補おうにも、資源が絶対的に不足している。材木は豊富だが、地下の鉱脈などはすでに掘りつくされて枯渇している。科学を研究しようにも、自然から資源が得られぬ状態だし、技術向上により将来恩恵をこうむる事になるはずの市民たちからも、何も協力を得る事が出来ない。それら

の悪循環により技術レベルはさらなる低下を招いていく。

「おかげで誰にも知られていないのは助かりましたが、それは彼らの情報操作が行き届いていた結果でしような」

「だと思っけれど……でも、何のために」

「さて。今の我々の戦い同様、ゲームを挑んで来ておるのかも知れませんが。情報は封じて、隠しておいてやる。ただし早急にパズルを解かねば、公開してしまうぞ、と。繰り返しますが、誰にも知られていないのは幸いでしたが、それだけに自らの手で探し出さねばなりません」

「最初からそう考えていたから、今回の地球行きを考えたのでしよう？ わたしたちは」

「ええ」

第四章 ヘンジャナイ

1

ルキ口は木の筒を口にくわえ、反対側の先端を竈の中に入れると、大きく息を吹いた。竈の中の木片が燃え上がり、ちりちりとはぜる音を立てる。木炭を作っているのだ。古来より人類に利用されてきた燃料の一つだ。エイジの話だと石油、太陽熱、水力、木炭などの燃料源が等しく重要視されているらしい。ルキ口の間接感覚では、どれもエネルギーとしては非力で役に立たないものばかりだ。ただ、市民の生活を見て、この程度の燃料で十分に間に合うのだらうなとも思う。よくよく考えてみれば、低レベルの技術と云っても、何一つ自分では作り出せない物、理解出来ない物ばかりだ。科学技術は歴史の積み重ねであり、科学技術の高さは個人の知識や能力の高さを示すものではない。このような場所で、あらためてそのような事に気づかされる等、思ってもいなかった。

ルキ口は右腕の袖で額を流れる汗をぬぐった。竈の中は千度を超える高温だ。汗がいくらでも出てくる。顔は煤にまみれており、透けるようにさらさらとして綺麗な赤色だった髪の毛も、光沢がなくなり、ところどころ焦げ縮れてしまっている。キョウコのお古の作業服を着させてもらっている。綻びを繕った後が随所に見られる。二人の体格差がかなりあるため、服の布地がかなり余って垂れている。動きにくそうな部分は、縛ってしまっている。

毎日、くたくたになるまで働く。適度な疲労は心地よい眠りや健康をもたらすし、何よりルキ口にとっては体を動かす事が楽しくてならなかった。戦闘訓練では嫌と云うほどに格闘の練習をさせられたが、実際の任務は常にエクシールの暗い操縦席の中。すっかり慣れてはいたが、実際にこうして外で仕事してみると、エクシールが精神に伝えてくる肉体感触よりも、直接自分が風に触れている感覚の方が数段気持ちが良い。

炭焼きはエイジの父トウジの仕事で、ルキロは彼の体調が戻るまでここで働く事になっている。あまりに回復が長引くようであれば、一人地球に取り残されるのも嫌なので約束を破棄せざるを得ないが、トウジの順調な回復ぶりを見ると、とりあえずは心配なさそうだ。

ルキロはキョウコと口論をしたあの日、タグザムティア側、自分達側の非を認めると、少々の照れを残しながらも潔く謝った。勿論タグザムティアの正義は微塵も疑ってはいない。しかしながら、他者の命を奪っていくのが戦争だと云うのに、この星が戦地となった理由を矛盾なく説明出来ない事は如何なものか。説明責任を果たしていない点に関しては戦争を起こした側に非があるように思う。

怪我で数日はまともに動けまい。「地球人を見下している傲慢な気持ち」を持ったまま彼らの世話になるのはとても辛い事だったが、謝ってみると拍子抜けする程に気分がすっと軽くなった。戦地での緊張がほぐれ、地球人と打ち解けてくると、ルキロは実に明るく活発な仕草を見せた。彼女はエイジ達を驚かす程に早い回復を見せ、わずか三日後にはもう不自由なく動けるようになっていた。次に開始される戦闘の終了時に、自分も回収してもらおう、エクシールが大破してしまったので地球人から身を隠して一人で救助を待っていた、とでも云っておけばいい。

回収される日までは、トウジの仕事を手伝うことにした。熱線を間近に受けたトウジは、意識こそはつきりしているものの、まだ自由に動ける状態ではない。自分がやったわけではないが、やはり知った顔になってしまうと、巻き込んだ責任を感じてしまう。エイジ、キョウコ、それと椅子に座った状態のトウジに教えて貰いながら、ルキロは木々の伐採、乾燥作業、薪割等を覚えていった。その華奢そうな小さな体の、どこにそんな体力があるのかと皆を驚かせる程に、仕事に家事にと実によく働いた。

「ルキロ、休憩だよ。ご飯にしよう」

エイジが、斧で割ったばかりの薪を竈のそばに置く。煤で真っ黒

になったルキ口の顔を見て声を出して笑った。ルキ口は立ち上がると頬を少し膨らませてエイジの頭を小突いた。

「もつくとくただよ。……それじゃ、行こうか。今日のお昼はね、わたしも少し手伝ったんだよ」

淡く赤い陽光に、少女の屈託のない笑顔が照らされる。

「だからさつき、母さんと何かしてたのか。果たしてどんなもんが出て来るのか、心配だなあ」

「ひどいなあ。……この星って、わたしの知ってる野菜と形も味も似ているのが沢山あったから、それを使って得意料理を作ったんだから大丈夫だよ」

「ごめん。植物や動物ってさ、やっぱりことまったく違うの？」

「同じようなもんだよ。タグザムティアに限らず、知的生命体のいる星の自然の風景はね。宇宙の塵に同じような条件が加わって恒星惑星が出来て、恒星からの距離が同じような惑星に生物が誕生して行くわけだから、当然でしょ。離れてはいても全て同じ物質空間での出来事なんだから……って学校の先生が云ってた」

「そんなもんなのか。……あともう一つ聞きたいんだけど」探求心旺盛な彼はルキ口に質問ばかりしている。「宇宙船。凄い遠くから来たわけだろ。やっぱり、あれ、ワープ航法やら何やらで一瞬で来ちゃうの？ A点とB点をくつつけてっ……て」

ルキ口は首を横に振る。

「じゃ、何だろ。別の世界を通ってくる。……分かった、魔法だ」

「正解は、ただ凄い速度を出すだけ、だよ。他にどういう技術があるのか知らないけど、タグザムティアでは星間移動にはそうした技術を使っている」

「えっ、だって、それだと、光以上の速度は無理じゃない」

「光は確かに光以上にはなれないけど、宇宙船は光じゃないからね」

「どういう事？」

「例えば……端から端まで光速で何年もかかるとんでもなく長い棒があるとするね。その棒の先を、指でちゃんと押す」

少女は身ぶり手ぶりを交える。

「ふむ」

生徒は腕を組んで眉間に皺を寄せている。

「さて、その反対側の端が動くのは、指でちゃんと押したのと同時にでしょうか。それとも、何年もかかってしまうのでしょうか」

「わからん。……同時……な気がする」

「その巨大な棒の上で、同じような仕掛けを用意して、また同じ事をして、そのまた上で……」

「なんか、限りなく速度を出せそうな気がしてきた」

「まあ、そんな事は絶対に不可能なだけだね」

ルキ口は笑った。

「なんだよ、そりゃ」

「わたしにも、よくわかんないんだよ。単なる軍の一兵卒で、技術者じゃないんだから。ただ、基本の基本はそういう事なんだって。

……あとはね、重力場の隙間をぬって進むって事かな」

「宇宙にも重力ってあるんだ」

「引力とは違うけど、星から離れたところにも様々な力は働いているよ」

「考えてみれば当たり前だな、潮の満ち干きなんかそうだもんな…

…あ、こっちは引力か」

「もとは一緒でしょ。重力は惑星規模だと単なる引力として働くし、星雲規模だと……なんて云ったか忘れたけど、何らかの働きがあつて、超高速移動の際には、それが単なる障壁になつてしまふ。だから、それを取り除くための技術が必要なんだよ。なんだか自分で何を云ってんだか分かんなくなってきた」

「お前ら、問答しとる間に、スープ冷めちゃうぞ」

窓からエイジの父親が顔を出していた。

「トウジさん、一人で立ち上がって、大丈夫なの」

ルキ口が近寄り、庇うように手をさし伸ばす。

「お、心配してくれるのか、ルキ口ちゃん。嬉しいねえ」

ヒゲ面の大男のくせに、とても軽い口調だ。意識が戻って、初めてルキロを見た時からもうこのような態度だった。だから、この家でルキロになつかれるのも一番早かった。

2

エイジにとつてささやかな自慢なのが、彼の家には自動車がある。軽トラックだ。燃料が高価なのが難点だが、とにかく今日は自由にトラックを動かせる日だ。作った炭を荷台に乗せ、麓の町に行き、取引相手にそれを渡すのだ。空いた荷台に買い込んだ食料や雑貨を詰め込んで帰って来る予定だ。車はかつて少しだけ運転させてもらった事はあるが、自分だけで全て行うのは初めてだ。父がまだ不自由な体なので仕方がない。いつもは助手席に乗っていたが、今日そこに座り同道するのはルキロだった。

「どうした、エイジ」

ルキロを前にして無言で突っ立っているエイジを見て、トウジが声をかける。

「い、いや、何でもないよ」

ルキロはよそ行きの軽装だ。これもまたキョウコから貰った簡素な服だが、作業用のドロまみれの格好しか見ていなかっただけに、エイジにはとても輝いてみえた。それに、ルキロはもともと顔の造作が小さな花のように可愛らしい。女性にほとんど免疫のないエイジが魅了されてしまうのも無理からぬ事ではあった。

「惚れたな」

トウジがぼそりと云う。まさにドンピシャリである。

「そんなんじゃないよ」

「前つきあつてた娘はどうしたんだ」

「あれだつて、そんなんじゃない。……おれが一方的にいいなつて思ってただけで……しかも、彼氏がいたんだよ」

「そーかそーか。それじゃ、ルキロちゃん地球に引き止めて、求婚でもしろ」

「なんでそうなるんだよ。云ってること、支離滅裂だぞ。全く意味がわかんねえ」

脱力感がエイジを襲う。

「だってすげー役に立つし。お前なんかと違って、すげえ楽しそうに働くじゃん」

「確かに……楽しそうに働くよなあ」

一週間とたたぬうちにエイジの頭の中の大半を彼女が存在が占めてしまったのは、その躍動感のある動きや笑顔が原因のようだった。「二人で何こそ話してんの。あやしー」

ルキロはトラックの横に立ち、二人に疑惑の眼差しを向けていたが、すぐその表情は笑みに変わった。助手席側のドアを開け、一足先に乗る込む。エイジもすぐにドアを開ける。

「なんでもない。仕事の話だよ。さあ、行こうか」

エンジンをかけると同時にトラックは激しく揺れた。マフラーからはもうもうと黒い煙が吹き出た。乗っている二人の体も激しく振動し、舌を嚙んでしまいそう。トラックが走り出すと、その路面の悪さも手伝って揺れはさらに酷くなり、さながら暴れ馬に乗っているようだった。

「うわあ、何これは。揺れるなあ」

「自動車はこういうもんなの。昔は違ってたんだろうけど。タイヤが無かったらしいし」

「それが普通じゃないの？ まあ何事も経験だ」

「ねえ、ルキロ。本当に、もうすぐ帰っちゃうの」

「何、急にそんな事。……いつまでも、ここにいたって仕方ないでしょ。もうじきにまた戦いが始まるはずだから、その回収時にね。こんなところ密告でもされたら処罰もんだけど、そしたら地球人の捕虜になってたってウソでもつくよ」

慣れない激しい揺れと戦いながらも少女の表情や口調はのんびりと楽し気だった。何やら手に紙切れのような物を持ち、見つめていた。紙なのか布なのか、または全く別の物質なのかは分からないが、

あきらかに写真のようであった。人間の姿が写っている。エイジは訊ねた。ルキロはそれをエイジの目の高さに上げ、運転中でも見やすいようにしてあげる。軍服らしい格好の数人の男女の姿が写っていた。

「楽しそうな写真だね」

ルキロが両側の男二人と肩を組んではしゃいでいる。その前には肌の黒い大柄な男と、ライフルのような長銃を持った男がしゃがんでいる。写真の端には、そんな撮影に加わりたくないと思われているような、しかしどこことなく楽し気な様子の長身の女。

「ルキロのいた小隊？」

「リーアック隊って云うんだ」

「へえ、どんなチームなの」

「空中戦適応能力の高い者を集めた少数精鋭の部隊だよ。アロ・イーグっていう、空中戦闘用のエクシユールで戦うんだ。宇宙戦ではまた別のエクシユールを使ったりもするね。だから、本当はウーズイは苦手なんだ」

「エクシユールって何？」

「あれ、教えてなかったつけ。エイジって何でもかんでも質問してくるから、わたしも何を教えたか覚えてらんないよ。エクシユールはね、有人式人型戦闘兵器って事。ザウエ・ジオ・ネギユ・フファヴィを縮めた言葉。おんなじ人型でも、今戦っているライスカイスでは、エクシユールじゃなくてデイトって呼んでいるみたいだけだね。まあ、星が違うし、別の兵器なんだから当然なんだけど」

「ふん。あれ、何でそのザウなんとかってのが、縮めてエクシユールになるんだ」

「あとで綴り書いて説明してあげるよ」

「いや、いいよ。ますますわからなくなりそうだ。で、ルキロが乗ってた、そのエクシユールっての、緑色の、あれがアロ・イーグなのか」

「あれはジーン・ウーズイ。陸戦用」

「そついや云つてたな、ウーズイって。でも空中戦部隊なんだから、陸戦用なんかに」

「冗談にもならない話なんだけどね。わたし用にカスタマイズしてあったアロ・イーグの調子が、急に悪くなってしまったんだ……おかげでホントに酷い目にあつた」

「酷い目って、何機もを同時に相手して、凄い戦いをしてたじゃないか」

「えへへ。リーアック隊は優秀な人材の集まりなんですよ。……でも、わたしなんかまだまだの下っ端なんだけどね、ほんと凄いいんだから、他のみんなは」

またあの生活に戻る。風に髪をなびかせながら話すルキ口の顔は幸せそうだった。だが、不意にその表情にかげりが見えた。再び写真に目をやった。ルキ口と肩を組んでいる男の一人レクス、彼はルキ口の命を助けるために自らの命を犠牲にした。彼との記憶を忘れるわけではないが、この悲しみだけはこの風に流してしまいたかった。

……彼が自分の命と引き替えにしようとする価値などが、自分にあつたのだろうか。レクスが喜んでくれるようにしっかりと生きていこう、と心を決めたはずだったのに……地球では自分の馬鹿さ加減を思い知らされて……

「ルキ口、何だか、表情暗いよ。悲しい事でも思い出したの」

「悲しい事？ 違う……悲しい事なんかじゃないよ」

そう、思い出してみれば、レクスとの思い出は楽しい事ばかりだった。ルキ口は今度はレクスとの過去を語り始めた。ルキ口の顔に笑みが戻った。

「……そしたら、レクスだったら、どこに隠れてたと思う？ 砂の中に潜ってたんだけど、禿頭だから太陽でピカピカ光っててさあ……」
ルキ口は一人で腹をかかえて可笑しそうに話している。エイジはルキ口のその微笑みに微笑んだ。

「……そう云えば、メルリカに最近全然会ってないなあ」

「今話してた、元帥の孫娘とかつて」

「うん。……レクスが死んでから……わたしを避けだして……というか、自分の家抜け出して出かける事も全くなってしまっただみ
たい。戦争に関係する人間がみんな怖くなってしまったんだろうね
それが今回はこっちに来ているって聞いて、どういう心境の変化だ
ろうって思ってた。もしかしたら、こっそりと会いに来てくれるん
じゃないかって、ちょっと期待してたんだけど」

「来なかったのか。……あ、そう云えば、そのメルリカって名前、
聞き覚えがあるぞ」

「え、どうして。何でエイジがあの子の事知ってるの」

「友達の家が金持ちで、なんとテレビを持っていてのさ。そいつか
ら聞いたんだ。地球のテレビの電波使って、地球は管理されねばな
らない云々とか演説してたんだよ。……元帥が死んだからってんで

……」

「亡くなった？ ギヴェイ元帥が」

「代理で、そのメルリカって娘が喋ってたらしいよ」

「……そうか。それじゃ、抜け出すどこじゃないか。……でも軍人
でも何でもなくて、ただ祖父に同行して来ただけなのに、代行を務
めるなんて妙だな。……メルリカ、おどした様子だったんじゃない？
無理矢理喋らされて」

「見てないからよく分からないけど、堂々としていたらしいよ」

「え？ 変だな。あのメルリカが」

ベツニヘンジャナイヨ

「何？ 今の声」

まるで鼓膜を通さず、音声を感じる脳組織に直接刺激を送られた
かのよう。それほどはつきりと、その感覚は音として、声としてル
キ口に認識された。それなのに、それがどんな声なのか、男か女か、
人間が発したものかも全く分からない。ただ、愉快か不愉快かと問
われれば、間違いなく不愉快の部類に属する声であった。

「え、声なんか聞こえないぜ」

やはりエイジには聞こえていないんだ。何かがいる。見られている？ どこに……。わたしの中？ わたしの中に何かが……

ルキ口は頭を抱えた。残響がいつまでも消えない。逆にどんどん大きくなっていく。たまらない不快感。頭の中に獣が入り込んで、頭蓋の内側から爪を立てている……

「大丈夫か？ 頭が痛いのか？」

運転中のエイジが、心配そうにルキ口の顔を覗き込む。

「平気。何ともないよ。……ただ、ちよつと頭痛が……」

またルキ口は鋭い悲鳴をあげた。首の後ろに鋭い痛みを感じた。キリを深々と突き刺され、挟られたかのような堪え難い激痛。ルキ口はまるで発狂したかのように絶叫をし、暴れはじめた。

エイジは慌ててトラックを停止させた。

「ルキ口」

エイジの声に反応するかのようにはルキ口が動いた。エイジの方に身を乗り出し、彼の足元へと手を伸ばした。そこには一度も使った事の無い護身用の銃が取り付けられていた。ルキ口はその銃を素早く抜き取ると、自分の頭に当てた。何が起きているのかさっぱり分からないエイジであったが、ほとんど反射的な行動で、その銃身を横から叩いて、銃口をルキ口の頭からそらした。ルキ口は躊躇なく引き金を引いたが、目的を遂行するには一瞬だけ遅かった。彼女を貫いたのは鉛弾が空気を切り裂く際に生じた衝撃だけだった。

エイジの叫びも彼女は全く正気に戻る様子を見せず狂乱した表情のまま、また銃を自分に向けようとする。軍人として鍛えているせいなのか、それとも何か特別な精神状態となっているためか、とにかくルキ口の腕力は非常に強く、とても銃をもぎとる事が出来ないならば、とエイジは引き金に添えられたルキ口の人さし指を押さえ、銃を空に向けて撃った。

すぐに全弾を撃ち尽くした。エイジが安心したのもつかの間、ルキ口は銃を捨てて、獣のように吼えながら、彼の首に手をかけて、

力を込めてきた。ルキ口の小さく柔らかな手が自身の筋力により壊れてしまうのではないか。それほどに凄まじい力が躊躇もなくエイジの首にかけられようとしていた。だが、エイジは首の肉に完全に指がめり込む前に強引に身をよじってルキ口の手を振りほどいた、するとルキ口は、攻撃的な表情だったのが今度は逆に怯えたような表情となりエイジから逃げようとした。トラックのドアを上手く開けられず、窓から這い出た。バランスを崩し、受け身も取らずに不自然な体制のまま地面に落ちる。すぐさま起き上がると、脚の筋でも傷めたのかびっこをひきながら森の中へ入って行こうとする。

エイジはルキ口を追おうと、車から降りた。だが追うまでもなく、ルキ口は突如倒れ、全く動かなくなった。エイジは恐る恐る近寄ってみる。どうやら気を失っているようだった。恐怖と苦痛とに歪んだ形相は、少しだけやわらいだが、悪夢でも見ているのが時折表情が痙攣する。彼女を抱き上げたエイジは、生命には別状なさそうなのを確認し、少しだけ安堵の表情を浮かべた。

「大丈夫だから」

そして、力強く抱きしめた。

3

タグザムティアの超大な旗艦であるテオ・リユー・フィルクを、七隻の戦艦シル・カルが護るように囲んでいる。護るようにと云っても、数十キロの向こう上空にいるライスカイス軍船団との間にこれといった緊張もなく、なれ合いの戦争を小馬鹿にしている者すら内部に多かった。ましてや今回はその色が強いためなおさらである。シル・カルの外観はどの機体も違いはないが、内部人員の構成割合が若干異なっており、差別化が図られている。ある一隻は、通信兵の割合が他と比べて高かった。演劇を行うホールのような、広大な空間の中、千五百人近くの通信兵がびっしりとつまっている。その空間の七割近くを女性が占めている。暗号解読、変換、送信、傍受、そしてそれらを行うプログラムの開発検証。彼等彼女等の仕事

である。

レクン・ニュ・ヤという短い黒髪の少女も、そんな通信兵の一人だ。

今回の戦いは、人々が考えているように、まさにルールに乗っ取ったゲームであり、諜報戦に必死になる意味はない。せいぜい、元帥代行が飛ばした探査機、それからの信号を残さず拾っておけばいい。仕事の無意味さに、だれた空気が場に充満していた。

レクンは、そんな中にあつて一人真面目な表情で、顔にかけたゴーグルディスプレイの情報を睨んでいた。手元のツマミを回す。耳に当てているゴーグル脇のスピーカーから、ノイズのような音が聞こえており、ツマミを回すことによりそれが変化していく。だが音の高さが変化するだけで、ただの雑音に変わりはなかった。彼女はある信号を必死で探していた。その信号が、絶対に発信されていない事を願いながら。

彼女の背中に男の声が投げかけられた。レクンはスピーカーからの音に集中しており、二度目の呼び掛けで初めて気付き、びくりと肩を震わせた。振り返り、ゴーグルを外した。

長身、赤茶けた髪の毛の青年が立っていた。リーアック隊の一人、ウエルである。

突然のウエルの訪れに、レクンは明らかに動揺していた。何も言葉が浮かばない。ウエルと見つめ合った。ウエルの表情が少し変化する。普段のレクンならば、ウエルの顔を見た途端、元気に話し掛けてくるのに……

「ルキロから、まだ連絡はないのかな」

ウエルの言葉に、またレクンは身を震わせた。怯えのような、怒りのような……悲しみのような、複雑な表情を浮かべた少女の姿がそこにあった。

「どうした。何かあったのか」

レクンとウエルとはもともと全然知らない間柄だったが、レクンがやたらと話し掛けてくるため、いつしかウエルも通信兵に用があ

る時はレクンに声をかけるようになっていた。

「……なんでも……ないです」

レクンの声はどこか力ない。

「そうか。で、ルキロは」

「まだ、何も。……あの……そんなに、あの娘が気になりますか」

「当たり前だろ。……まあ、親が決めた事ではあるけど。それに、同じ隊の仲間だろう」

「……」

「君は彼女と同期だったよね。そういえば、ぼくは彼女の子供の頃とか全然知らないなあ。どんな娘だったの」

「どんなくて……。あの、いま忙しいですから、ちょっと……」

「あ、そう。邪魔したね。じゃあまた」

「すみません」

レクンは頭を下げた。

「ルキロからの連絡、まだないってさ」

すぐそばで腕を組んで待っていたノウヤンに歩み寄り、話し掛けた。

「聞こえてたよ」

にべもない反応。

ノウヤンは長身の女性で、黒の髪が腰まで届いている。地なのかどうか、少し怒ったような表情を浮かべている。

「しかし、レクン、なんか様子が変だったなあ。いててて……鼻をつまむな」

「鈍感だねえ。この女心の分かん坊やめ」

「な、何がだよ」

「もうレクンが可愛そうだから、あまり近寄らないほうがいいよ」
「？」

「そうだよ、カイ、ぼくが思うのはね……」

タ・ト・カイはライスカイスの人間である。ライスカイスは単純な空間距離で地球から数千光年も離れた惑星であり、タグザムティアと同星系に属している。

「……違う違う。……それだともそもそ君の……」

カイの生まれ育った居住区域は、成人男性の九割以上を軍人職が占めている。軍人、または軍人となるべき人間のための生活エリアであり、彼等の生活のためにその他一部の職が存在するにすぎない。基本的にライスカイスの人間は、感情に左右される事なく仕事をこなす。他星に自らを輸出する事業が成り立っているほどである。だが、生まれてくる子供の脳に欠陥が見つかる割合が非常に高い。大半は軽度なもので生まれたその場で治療されるが、それすら不可能な場合は人間扱いすらされずに処分される。

「あー。……そうじゃないんだがなあ」

まれに、生まれた時は健常であった者が、大きくなってから発症する例もある。さすがに簡単に処分というわけにはいかず、よほど重度の障害でなければ、放っておかれるし、就労する事も可能ではあるが、あくまで本来は存在すべきでない者、「異端」として扱われた。いま、カイの目の前にいるトキ・ワ・キーレンもその「異端」の一人である。彼等の種族は基本的には男女ともにほっそりとした長身で、地球人などの価値観からすると驚くほどにみな容姿端麗なのだが、キーレンは鼻が赤く大きく、唇は異様にぶ厚く、肉体はかなり肥満している。腕は太いが詰まっているのは筋肉ではなくただの脂肪で、一步を踏む度に腹の肉と一緒にだらしく揺れる。運動能力も、反射神経も鈍く、ディオを操縦しての戦闘どころか、援護の砲撃手としての役割すらもこなせそうと思われない。

彼は自分を異端と認識しているのか、やたらと感情と云うものを気にする。理屈っぽく、議論が大好きだ。もつとも、議論とは返してくる相手がいるから成り立つものであり、もっぱら彼は押し付けの講演専門だった。

「友よ、そもそも心とはなんだ」

キーレンは大袈裟に両手を広げてみせる。

「心は心だろう。他にどう云える」

カイはにべもない反応を見せる。

「心があると云う事はだね、つまり生きているって事さ」

「当たり前だ」

「なぜ君たちは飛び跳ねて喜んだり、泣いたり出来ないのかなあ」

「そんな無意味な事は、下等な生物だけにさせておけばいい」

「違うんだなあ。笑ったり泣いたりは高等な生物でないとできないよ」

「科学的に高等な反応だろうと下等な反応だろうと、くだらん行為に違いはない」

「そう云うのを否定しちゃったらさ、生きている意味ないじゃない。ただ楽に生きたいんだったらさ、死んでいれば、楽だよ。ぼくはまっぴらだけどね」

と云うとキーレンは、ひゃっひゃつと下品に笑った。

「もういいだろう。おれは行くぞ。グルーグの調整がある」

彼等は幼少の頃、同じ居住塔で暮らしていた幼馴染みである。だから、キーレンはカイによく話し掛けてくる。カイも渋々と相手をしていたが、最近苦痛になってきた。

カイが立ち去ったその後も、キーレンは一人で話をしていた。芝居のように大袈裟な口調、手ぶりで。

「聞くがよい、市民よ！」

壁面の真つ黒なスクリーンに、緑色で数行の文字があらわれた。

「……なになに、グド監査官が呼んでいる？ ……彼は最近よくぼくに話し掛けてくるなあ。ぼく思想に胸うたれたのかしら。ひゃっひゃつ」

ついに共感者を得たりと勝手な妄想の世界に浸りながら、キーレンは飛び跳ねるように部屋を出た。だが……そのキーレンは二度と戻って来る事はなかったのである。

「……キロ……ルキロ……」

深い海の底から、その声が水面に波紋を作るのが見えた。ルキロの意識はその波紋を指し浮上を始めた。

「……った、目が覚めたよ、ドクター」

ルキロは薄暗い部屋の、汚れた堅いベッドに寝かされていた。服装は出てきた時のままだが、袖がまくられ、腕には点滴の針が刺さっていた。心配そうに見つめるエイジのそばに、見知らぬ、眼鏡をかけた中年の男が立っていた。男は、いたるところ薄茶に変色した古びた白衣を着ている。

「エイジ……ここはどこなの。なんでわたしはこんなところにいるの。……この人は？」

ルキロは状態を起こすと、不安そうにあたりを見回した。

「ここは麓の町だよ。こちらはよく世話になるお医者さんでリーゼムさん」

「リーゼムです」

長身の、がっちりとした体躯に相応しい低い声だった。目元の雰囲気は笑っているわけでもないのに柔らかく、威厳と愛嬌とを兼ね備えた顔の造作であった。

「前にルキロが怪我で意識を失ってた時も、リーゼムさんが来てくれて、ルキロや父さんの事を診てもらってたんだよ」

「そうだったんだ」ルキロはリーゼムの顔に視線を向けて、「ルキロです。気付かない間に、何度もお世話になってしまって……」

「ただ趣味でやってるだけなんだから、別に気にしないでいいよ」

「おい、君が云う台詞じゃないよ、エイジ君。……それで、具合はどうかな、お嬢さん」

エイジの茶々をやりわりかわすと、リーゼムはあらためて赤毛の少女へと視線を向ける。

「どうって、わたし、自分がどうなったのか、全然……ただ、なん

だろ……なんだかとてもすっきりした気分。……わたしに、何をしたの？」

医者は問いかけに即答しなかった。

「もうしばらく横になっていたまえ。もっとよくなったら、隣の部屋で話そう」

ルキロはその言葉に従い、横たわった。目覚めたばかりだというのは、目を閉じると、すぐに睡魔が襲ってきた。ルキロはそれに逆らわなかった。

6

「コンピュータの暴走、だと思っただが」

リーゼムは淡々と推測を述べる。

「コンピュータの……暴走。そんな聞いた事がない」

ルキロは不安と驚きの表情を隠す事ができなかった。

「何？ コンピュータって？ ルキロと何か関係が……え、まさか」

エイジは記憶の糸を手繰り、驚愕した。

「地球でも昔はそうだっただろう。歴史研究家のエイジ君」

「あの、体の中に埋められた……何だっけ」

「樹脂コンピュータと呼ばれる物さ。最初は、マイクロチップを拒否反応を示さぬように本人の細胞と同じ情報でコーティングして埋め込んでいた。最終的には、コンピュータそのものがある特殊な樹脂で作ってしまった。従来のコンピュータが『石』であった事を考えれば、『樹脂』であつてもおかしくはない。そう考えたある技術者が生み出したものだ。それは精神、肉体に様々な影響を及ぼす。当初は人を治療するための純然たる医療目的に利用されていたが、結局軍人のオモチャにされ、人々の怒りに触れ、消滅した」

「そっぴや聞いた事がある。……それと、同じ物が」

エイジは小さく呟く。

「ああ。しかし驚いた。その樹脂を体に完全に吸収させる……つまり、消去してしまうと云う薬があるんだが、ちよつと彼女には悪い

がその薬を注射してみたんだ」

「人体実験かよ、リーゼムさん」

「大丈夫大丈夫。体内の成分分泌率を少し変えるだけの薬だから。あくまで異物除去を行うのは自分自身の肉体だ。……で、そうしたら、薬の効果はテキメンだ。悪夢から解放されたのか、心拍数もすぐ正常値になったよ」

「でも、そんな無茶して……体は大丈夫なの、ルキロ。……ルキロ？」

さきほどの異変が、体内に埋め込まれていた樹脂コンピュータの為だと分かってても、まだ、ルキロの表情から困惑の文字は消えなかった。

「平気だよ。……何ともない。……でも……薬で素子がなくなったのなら……何で……わたし……言葉が、わかるの？ どうして二人とも、わたし達と同じ言語をしゃべっているの？」

7

「なんと、樹脂コンピュータが翻訳装置のような役割もしていたとは。だが、結局そんなものは必要なかった。……どっちがどっちの真似しているのか知らないけど、偶然とは考えにくいな」

ドクターリーゼムが腕組みする。

「昔、なんらかの接触があった」

現在の状況から回答を推測すると、どうしても非個人的なものにしかない。エイジは、ルキロが素子と呼んだ樹脂コンピュータ、それによる自身への影響がどう云うものなのか想像してみる。翻訳と云うのは、吹き替えのように誰かの声が重なって聞こえてくるのだろうか、それとも声ではなく五感として捉えられない情報を直接脳が受け取るのだろうか。

「まあ、それはそうだろうな、エイジ君。……非常に安っぽいドラマみたいだが」

「それが、地球がこんなに退廃してしまった事に関係あるかも知れ

ないね」

「ちよつと話が飛びすぎるが、何かしら関係があるのかも知れないな。……それとだ」リーゼムは、ルキ口に視線をやる。「今回の件で、地球への先発隊がすでにいろいろ調査しているわけだろう」

「勿論。地球に向かう途中、収集したデータをうんと勉強させられた。地理、気候、人種、文化、歴史」

ルキ口は答えた。

「今現在の事情を探るために、先発隊が派遣されたわけだが、我々も知らないような、ずっと昔の地球の歴史も、君たちは知っているんだろう」

「航行可能な宙域は、ほとんど監視しているはずだから、ある程度は……」

「それなら、言語が同じ事を知らないわけがあるか？」

その言葉はルキ口の胸を鋭く抉った。

確かにおかしな話だ。最終的に首の素子が簡易的な翻訳をしてくれるとは云え、どの言語体系に属するのか、またどう云った文字を書くのか、その程度の講義は必ず行われる。今回、それが一切なかった。

いったい誰が何を隠しているのだろうか。

ルキ口の脳裏にさらにふとした疑問がわいた。

「……地球に、エクシユールみたいな機械はないの？」

「エクシユールとは？」

「あの機械の巨人だよ。緑色の方に、ルキ口は乗ってたんだ」

エイジが補足する。

「見たことも聞いたこともないな。地球では戦争にそのような兵器が使われた事は一度もないはず。でも、地球にはかなり塗りつぶされた歴史があるから、何とも云えないがね。樹脂コンピュータに代表されるような情報処理技術の高速化や大容量化に関しては格段の進歩をとげた事は間違いない事実だが」

「近くに、軍事用研究施設で有名なところはないの？」

ルキロは、この大陸が戦闘の舞台となっている事も、偶然ではないと考えていた。

「変な事に興味を持つんだな。近くには無いけど、この大陸内ならば……ええと、その昔、カナダと呼ばれる国があつて……現在では完全に荒廃してしまっているが昔はそこに、凄い都市が存在していたんだ」

「どんな」とエイジも興味深そうに尋ねる。

「単純に云うと、研究のためだけの都市だ。様々な科学技術が生み出されていく都市。西暦二千年代において世界の医学や科学は、常にそこを中心として発展していったそう。民間だったのかどうか知らないけど、主な兵器もそのあたりでかなり開発されていたと聞く。わたしが知っているのは、そのくらいだな」

「その都市は、どの辺にあるの？ どう行けばいいの？」

ドクターは地図を見せてくれた。手帳に印刷された小さな世界地図で、かなり汚れており、文字は完全に読めなくなっていた。彼は地図の一点を指さした。ルキロとエイジは覗き込んだ。

「ここが現在地だ。地図上では……ここから……ここ、北西にまっすぐ……山間や荒地の地形を無視して直線ならば約二千五百キロ」

第五章 北西二千五百キロ

1

ルキ口は初めて目にする「地球の青い空」に驚きを隠す事が出来なかった。エイジがトラック修理の部品を買いに行っている間、近くの岩に腰を降ろし、何もする事なくついうとうととしていたが、ふと気付くと頭上一杯に青い空が広がっていた。常にどんよりと灰色の雲に覆い尽くされ、そこから覗く空の色も弱々しい赤い色だったのが、一体どうなっているのだろう。

「うわあ」とそれだけ云うともう紡ぎ出す言葉を口が忘れてしまい、役目を失ったその口はただ開いたまま素頓狂な顔のまま、天を見上げているばかりであった。

曲がりくねった狭い道の途中で、急にトラックの調子が悪くなり、動かなくなった。前々からおかしいと思っていた部品が原因だったようで、エイジは徒歩でその部品を買いに出かけた。道は緩やかな傾斜になっており、眼下には街の景観が広がっている。そこはエイジたちがよく訪れる「麓の町」ではなかった。すでに彼等の「町」は南東遙か数百キロの彼方にあつた。

「その都市へ行ってみよう」と云い出したのはエイジだった。自分自身の好奇心もあったが、それ以上に、ルキ口の心を助う手伝いがしたかった。トウジは気が抜けるほどにあっさりと、承諾してくれた。「仕事が手につかないほど気になる事があるんなら、とつと行つて、とつと帰つて来いや。そのかわり、あとで倍働いてもらうぞ」と。

自分達にあのような恐ろしい運命が待ち構えている事など、当然今のエイジ達を知るはずもなかった。

買い物に行っていたエイジが、いつの間にか戻つて来ており、ルキ口の顔を見てくすくすと声を漏らしていた。ルキ口はちよっぴり恥ずかし気な色を見せ、軽く笑う。

「部品買ってきたよ、すぐに修理するから」

「うん。わたし全然わからないから。でも何か手伝える事があれば云ってね」

「ありがとう。ま、おれ一人で大丈夫だよ」

「……ねえ、エイジ、この空の色って……」

「本来地球が持つていなければならない、本当の空の色だよ。何かの風の具合で、低空の汚れた空気が飛ばされる時がある。目に見える大きな汚れが消えて、光の屈折率が変わるから一見綺麗に思えるだけで、危険な菌を沢山含んだ空気に変わりはないんだけど」

「でも、ほんとに綺麗な色だよ、青い空なんて。そうか、昔はこの見た目と同じように、実際も澄んだ空気だったんだ」ルキ口の楽しそうな顔が、次第に寂し気なものになっていく。「……でもそんな環境で生きる権利を地球人は自ら放棄してしまったんだね」

「そうだね。でも人類が驕慢な心を抱いたりしなければ、いつかはもとに戻るよ」

「驕慢な心を抱いたりしなければ……」

ルキ口は少年の言葉を反芻してみる。

「ルキ口の星はどんな空なの」

「ここのいつもの空とあまり変わらない。赤くてばかりでつかいけど弱々しい太陽が輝いている。わたしが幼い頃にいた居住区は、夜になっても太陽の頭が出ていて陽が暮れないんだ」

「ふーん。どんなとこなんだろう。こと全く違う生活なんだろう」ルキ口は頷く。勿論彼女が地球で経験した短い記憶との比較ではないが。

どちらからともなく黙ってしまい、二人はずっと空を見上げていた。風向きが変わり、段々とまた赤い空へと戻っていった。

「ルキ口」

寂寞を破ったのはエイジの声だった

「ルキ口っていま何歳？」

「……どうしたの、いきなり変な事を聞いて」

「いや、ちょっと気になってさ。別に、答えたくなければいいんだけど」

「二二だよ」

「にじゅうに？ えっらく若く見えるんだなあ。星が違うからしょうがないのかも知れないけど。……なんだあ。凄い離れているなあ、ちえっ」

「何よ、その顔は。……それじゃ、エイジはいくつなの？」

「十六」

「じゅうろく？ え、まだ子供じゃない」

「失敬な」とエイジは懺然とする。

「違う違う……十六なのに、体が大きいから……メルリカよりちょっと上なだけなのに随分と……」

「普通だけだなあ……待てよ、あの少女よりちよつと上？ ……ル

キ口、地球時間とはまた違うんじゃないか？」

「あ、そうか。そうだね。他の星の人間と、年齢の話なんかした事ないからすっかり忘れてた」

資料で学習していた地球の時間を計算し、暗算で自分の地球での年齢を割り出してみる。

「……十七年と……六十二日」

「十七。……そっか。一歳上なだけか。おれも来月で十七だから、ほとんど変わらないね」

「だからさ、さっきからなに年齢なんか気にしているの。変だな、地球人て」

「ルキ口、好きな人いるか」

「ちよつと何？ 調子狂うな、もつ。……リーアックのみんなもあとエイジ達も好きだよ……」

「その好きじゃなくて。なんていえばいいんだ……愛してる奴はいるの」

「だから、みんな愛してるって」

「うわあ、言葉の感覚が全く違うのか。……じゃあ、け、結婚した

「い奴はいるの？」

「いるよ」

即答。

エイジの内部で何かがガラガラと音を立てて崩れていく。

がつくりとうなだれながら、なんだかんだとさらに質問を続ける。

「結婚……したいだけ？　かたおも……ルキ口がしたいと思ってるだけとか」

「タグザムティアに帰ったら、結婚する予定だよ」

「ええ、いったい誰とさ、っておれが知ってるわけないか。ほ、ほんとにほんとなのかよ」

「わたしは物心ついた頃にはもう親がいなくて、その人の家で育てられたんだけど。その両親の考えでね。……でも、わたしもその人の事、思っているし」

「そうだったのか……畜生め」

「本当にヘンだよ、エイジ。どうしちゃったの？」

「そんな、いたぶるような台詞はやめておくれ」

「だから、何がなの？　はつきり云ってくれないと、全然分らないじゃない。……地球人てみんなこんなのかな、それともエイジがとびきり変わっているのかな」

エイジはため息を吐いた。

異星人だから仕方ないのか。

それとも、ルキ口は自分の星でもぶつちぎりトップレベルの鈍感娘なのでは。……そうに違いない。

遠くに、犬と遊ぶ子供の姿が見えた。ルキ口はそんな光景を楽しそうに見ている。

「ルキ口……」

エイジの口調が突然あらたまった。

「なあに」

振り向くと、エイジの顔がすぐ間近にあった。

「そんな近くに寄って、どうし……」

小さく開いたルキ口の唇を、ゆつくりとエイジの唇がふさいだ。
ルキ口の目が大きく見開かれた。そして、力抜けたように細められ……沈黙が訪れ……全てが静止した世界のまま、少し時が流れる。再び目が大きく開くと同時に、鋭い叫び声が雷鳴のように静寂を破った。

「馬鹿！」

ルキ口の右拳による一撃がエイジの頬に炸裂。エイジの肉体を刹那に襲う一種の反重力作用に、彼の肉体は軽々と宙へ舞った。空中で不自然な体勢となったところで、重力が正常に働き始めた。エイジは後頭部を地面に強打した。強烈過ぎる激痛に呻き声をあげる事すら出来なかった。

あまりの痛がりように、ルキ口も少し気の毒に思わないでもなかったが、彼女の心の中は、それ以上に彼への怒りの占める割合のほうが大きかった。ルキ口の真つ赤な髪の毛と同じくらい、その顔も真つ赤になっていた。彼女らの習慣では、婚前では軽い口づけすら許されていないのだ。あくまでもそのような風習が美德とされていると云うだけで、誰もが守っているわけではないのだろうか。

2

「ルキ口、まだ怒ってる？」

車の修理は無事終了したものの、揺れの酷さは相変わらず。ルキ口の顔色も相変わらずだった。

「怒ってる」

ルキ口はずっと窓の外に視線をやったまま。エイジの方などこれっぽっちも見向きもしない。

「どうすりゃ許してくれんのさ」

「今考えてる」

エイジはカーラジオのスイッチを入れた。特権階級だけが持てるテレビと異なりラジオは大衆に広く普及している。ただ番組の内容が気のきいた音楽ではなく、今回の侵略に対して地球側の提示した

条件等のやりとりに関するものだった。エイジはすぐにスイッチを切ってしまった。つまらない番組というのもあるが、それだけではない。何か、妙な音を聞いた気がしたからだ。

「ねえ、ルキ口、何か変な音がしないか」

「わたしの隣から変な声は聞こえるけどね」

「そういうイジワル云うなよ。……ほんとに変な音が聞こえたんだってば」

「別に何も聞こえないよ」

「気のせいだったのかなあ」

突然背後で何かを引っ掻くような大きな音がした。

「やっぱり気のせいじゃない！」

もう原価償却のとくにすんだ、壊れかけたエンジンのたてる不快で大きな音にも消される事なく、今度はルキ口にもはつきりと聞き取る事が出来た。引っ掻くような音から、何かを激しく叩く音へと変わった。その叩きかたは次第に激しさを増していく。

荷台に誰かが乗っているのだ。エイジはトラックをとめ、後ろへと回った。荷台には誰の姿も見えなかった。エイジは上へとあがり、荷物を一つ一つ点検し始めた。仕事に使う道具は降ろしてこなかったので、食料、衣料の替えなどを含め、荷物はかなり多い。だがしらみつぶしに調べる必要などはなかった。衣料品の入ったトランクが横になっている。それが細かに揺れだし、引っ掻く音がその中から聞こえてきた。エイジは恐る恐るトランクを開けた。いや、留め金を外した途端、それは弾けるような勢いで勝手に開いた。

「ひどいや、兄ちゃん」

小さな男の子が飛び出し、それだけ叫ぶと、喘ぐように大きく息をしはじめた。

「タク。……お前、何やってんだ」

体の力が抜ける。

「……これくらい離れていれば、もう戻される事もないと思って、トランクから出ようとしたら、開かないんだもん。だんだん苦しく

なつてくるしさあ」

「留め金外れてりや閉めるわい。スカスカのぼろトランクでなければ、お前今頃、天国をドライブしてたぞ」

「ごめんね。……でももう、ここまで来れば、帰らなくてもいいよね。歩いて帰れるはずないし」

「いや。家に戻ってもらう。道が遠かろうと何だろうと、たとえ地球の裏側だろうと」

「ええー」

「それが嫌なら、一つ云う事を聞くか」

「聞くよ」

「……しばらくの間、ルキ口の御機嫌取りをしろ」

「何かやらかしたの？」

「うん」

3

次の町でも物資の補給に立ち止まった。食料は沢山あったはずなのだが、三人目の出現で完全に予定が狂った。エイジ発案ルキ口の御機嫌取り作戦が予想以上に効果をあげ、縮こまっていたタクが逆に調子に乗って、美味しい食事を要求しだした事が大きな理由であった。

町の中央の広場は広く、ささやかだが様々な出店があり、見ていて飽きない。

ルキ口とタクはベンチに腰をかけ、話をしていた。

「へえ、来年から？ 町の学校？ 行けるんだ。よかったね」

「うん。……兄ちゃんが、父ちゃんに云ってくれたんだ。仕事の手伝いをもっともっとたくさんするから、タクを学校に行かせてやってくれるって」

「エイジが……」

「兄ちゃんさ、今どき珍しくすつごく勉強が好きなんだ。いろいろな事を知るのが、楽しくて仕方ないみたい。小さい頃、今の時代は

学問なんてお金になんかならないんだぞ、ってどんなに父ちゃんに云われても、それでもいいから学者になるんだって云い続けてたんだって」

「で、なれたの」

「なつてない。兄ちゃんまだ十六だよ」

「あ、そうか」

「……結局さあ、学校にも行けなかったし……たまに友達の家で本を読んだところでそれで学者になれるわけもないし……体も大きくなって、家の仕事も覚えていって……だから、ますます時間がなくなつていって……」

ルキ口は空を見上げた。ついちよつと前まで、空一面に広がつていた青々としたカーテンは、今やまた再び本来の淀んだ赤い色に変わろうとしていた。

「結局、それつきりになつちゃつて……だから、余計にぼくには学校へ行つて欲しいらしいんだ。別にぼくは学者になるわけじゃないのにね」

ゆつくりと、空から地上へ視線を落とす。すると、向こうから両手にカゴを持ったエイジが歩いてきた。

「食料たくさん買い込んできたぞー」

「エイジ……」

ルキ口はベンチから立ち上がる。エイジのほうに歩み寄る。

「なに……」

エイジの両肩に手を置いて、一言、

「許す」

しばらくの間、エイジはポカンとした間抜けな表情をしていた。やがて、ゆつくりと丁寧に荷物を地面に置くと、途端に激しく踊りだし喜び始めた。

「やったぞ、タク。お前のおかげだ。今日の食事おれの分も全部やるよ」

タクを抱き締めて喜んでいるエイジを見て、ルキ口も声をあげて

笑った。

「ほんとに、変なのー」

「でも燃料は高かったから買わなかった。次の町に行ってからにしよう」

「不便だね。燃料とか補給とかって」

「どうして？ ルキロたちの乗り物は燃料いらないの？」

「補給は必要ないよ。内部で作られるから。激しい運動させたり大出力の兵器使ったりしない限りは、その場で次々作られるので十分に間に合う」

「ふーん。地球にも、リトルバン発電機とか呼ばれる無尽蔵にエネルギーが作り出される電池があつたらしいけど……」

「へえ。……でも」ちよつと間をおいて、「本当にいいの？ 二人とも。こんなところまで……」

「大丈夫。おれが好きで始めた事だし、親父にだつて断つてきているんだから。タクが来てしまった事に関しては、帰つたらぶつとばされる事はカクゴしなきゃならないけどね」

「まー、ぼくが兄ちゃんと一緒に謝つてあげるからさ」

「お前が謝るのは当たり前だ。偉そうに云うな……どうしたの、ルキロ」

すでに空から青色は完全に消え去っている。赤い空を、どんよりとした黒い雲が覆い隠している。ルキロはそんな上空を見上げていた。何やら不自然な薄暗さを感じ、エイジたちも空を見上げた。雲の下に巨大な船が見えた。その下に小さな（その巨大な船に比べてだが）船が何隻か浮いており、その船の周囲を無数の黒い影が舞っている。

「始まつた……」

「始まつたつて……まさか、タグザムティアとライスカイスの二度目の……」

真上にある戦艦はライスカイスのゴ・スィッグ。その中から、輸送艦ガ・ガーヌや、人型兵器であるディオの姿が見える。輸送艦は

おそらく陸戦用デリオであるギ・グルーグを搭載しているのだろう。地上を目指しゆっくりと下降してくる。

空中を青い光の筋が走った。その線の先を追うと、何やら人の形のシルエットが見えた。

ルキロはアロ・イーグの姿を確認した。その周囲、後方に注意を向けた。雲の隙間から見え隠れするタグザムティアの戦闘艦シル・カルの姿があった。輸送艦ガ・ガーヌは、その真下の山林や渓谷へと降りてゆく。

爆発が起き、地響きを感じた。このすぐ近くだ。建物の向こうにジーン・ウーズイの上半身が見えた。ルキロ達のいる広場に、ギ・グルーグが背を向け、飛び込んで来た。

町の人々は一瞬の混乱の後、一斉に逃げ出し始めた。店を出していた者たちも、それを捨てて避難を始めた。ギ・グルーグの出できた通りから、さらにジーン・ウーズイが一機、また一機とあらわれた。数の上で完璧に劣勢となっているギ・グルーグは、起死回生の策でも考えたか、巨体にみあわぬ高い跳躍をみせた。ジーン・ウーズイの群へと飛び込もうとする。だが、ジーン・ウーズイは一機たりとも遅れる事なく、銃をギ・グルーグへと向けた。黄色く輝く光の一閃。ギ・グルーグへの攻撃は操縦者の乗っている胸部を集中した。ギ・グルーグは空中で爆発した。

その爆音が人々の恐怖をさらにあおった。口々に意味の滅裂した叫びを発しながら逃げていく。逃げずに頑張り家族を探し求める者もいた。大混乱の中、さらに光線が走り、建物が破壊され、燃え始める。戦いに適度な空間を発見したからか、それともコロシアムの勇者になったつもりなのか、次々と円形の広場にギ・グルーグとジーン・ウーズイの姿があらわれ始めた。

ほんのわずかの時間で、ここ一帯は炎の燃えさかる大戦場となった。

「なんで、こんなところで戦うんだ。ムチャクチャだ」

エイジはばやきながらもタクの手を引いて走った。路地に入った

場所に駐車してあつた車に乗り、キーを差し込む。タクが、続いてルキ口が乗り込んだ。

「わざとしているわけじゃないんだろうけど、迷惑を全然意識していない事は確かだね」

ルキ口は複雑な表情を浮かべている。

「歩いてて蟻を踏みつぶすようなもんか。でも、変だよ。だって、地球を支配したいんだろ。なんでこんな神経逆撫でするような事するんだ。町を、ちよつと避けられただけじゃないか。……そもそも、みんなが何度も云つてる事だけど、なんだって地球で戦うんだ。……くそつ、エンジンがうまくからない。ポンコツめ」

「命令系統が統一されていないのか……それとも、すべて誰かの考えなのか。……とにかく、この戦いには意味なんてないんだよ。地球の人たちみんな云つてるよね、ゲームの戦争だ、と。本当にこれは、誰かにとつて文字通りのゲームなんだ」

「誰にとつてさ」

「分からない。地球の支配と云う表向きの発言、一部の者は真剣に考えているのかも知れない。その人間がこの戦いを考えたのなら、少しは納得がいくんだけど。過去に色々とやらかしているから辺境にもかかわらず地球は知られているんだよ。地球人肅正を考えているのなら、先に恐怖、混乱を与えておくのは統治という戦略上全くの無意味じゃない。でも、そんな連中じゃなくて、もつと上に……誰かいそつな気がする。でもそれが、どこの誰なのか……」

聴覚が捉える情報のほとんどを、炎の燃える音が支配していた。渦をまくように低く、聞いているだけで体が燃えそうになる。その音に、女の大きな悲鳴が加わった。ルキ口たちのすぐ近くのビルにも炎は魔手を伸ばしていた。その前に若い女が一人、おろおろと建物を見上げている。上階の窓から二人の子供が助けを求めている。

入り口は完全に炎に阻まれており、助けに入る事が出来なかった。「エンジンがかつたら、先に行つて待つていて。すぐ追いつくから」ルキ口は車を降りた。

「おい、ルキ口」

「ここは危ない。早く行つて！」

ルキ口は走り出す。

女のもとに駆け寄ると、

「二人はわたしが助けるから、安全なところに逃げて」

壁の前に立ち、真上へと跳躍した。驚くべき跳躍力で、楽々と二階の窓の枠に手をかけた。熱気に手が焦げそうで、苦痛に顔を歪める。様々な重力下での戦闘を想定したトレーニングの成果は地球の重力に対しても有効だった。体を引き上げ、その勢いでさらに跳ぶ。身を縮め、回転しながら建物内に入り込んだ。階段の踊り場に着地した。

自分は何をしているのだろう。炎の熱気を肌に感じ、炎の音をその耳にしながら、ルキ口は冷静に考えていた。どうも自分は地球人に対して何かの特殊な思いを持っているようだ。エイジ達に助けられた、仲良くなった、という事とは異なる気持ちのようだ。だがそれが何なのか、自分でもわからない。何なのかわからないままに、とにかくそれは重く、辛く感じるものだった。こんな事をしていく中で、少しでも軽くなっていくのだろうか。

ルキ口は階段をかけのぼっていく。

自分は何をしているのだろう。再び自問した。そしてその心のもやもやを吹き飛ばすように、強引に素早く答えを導き出す。やりたことからやっているのだ。子供たちが危険だから……助けたいからこの階段を登っているのだ。地球もタグザムティアもない。

4

「熱い、熱いよ、お兄ちゃん」

ビルの一室。ユカは兄、コージに抱き着いた。恐怖による震えが肌を通して伝わってくる。

階下は炎に包まれており、もう降りる事はできない。運動能力の優れた大人ならば何とか飛び越えられるかも知れないが、まだ幼い

コージとユカにはとても無理な事だった。

「ごめんな、ユカ、ほんとにごめんな」

コージは妹の頭に腕を回し、ぎゅっと抱き締めた。

「お兄ちゃん、高いところのほうがシンリヤクシャがよく見えるからなんて、引き返して来るんだもん」

コージの胸の中の、妹の声は弱々しかった。すでに体力、精神力を消耗し尽くしていた。

「ごめん。……ほんとうはな、これを取りに来たんだ」

コージは、つい握りしめてくしゃくしゃにしまった写真を広げた。

「お父ちゃんの……」

家族四人が写っている写真であった。お世辞にも美男とは云えず、体型も少々肥満気味の、しかし優し気な顔の男が、まだ赤ん坊のユカを抱いている。

「これしか、写真ないんだ。これがないと、家族三人になっちゃうんだ。いやだろ、そんなの」

妹は頷いた。

「そうだ……あと、あれがあるよ」

ユカは弱々しい足取りで兄から離れると、窓際にある机の一番上の引き出しを開けた。丸まった紙切れを取り出し、広げた。様々な色の鉛筆で、何やら人の顔らしき絵が描いてある。輪郭は非常に歪んでおり、目や口なども顔からはみ出していた。

「兄ちゃんが、ちっちゃい時に描いた、お父ちゃんの絵」

ユカは嬉しそうに微笑んだ。その時……。室内をまばゆい閃光が襲うのとほとんど同時に……。爆音と同時に……。ユカのいた側の壁が吹き飛んだ。衝撃はコージの体をも襲った。体がねじまげられ、無数の見えない手に突き飛ばされる。薄れていく意識の中、ユカの叫びを聞いた。反対側の壁に叩き付けられ、完全に意識を失った。闇に包まれた。だが、その痛みにより、すぐに意識は回復した。……まだ夢の中にいるのだろうか、視界は暗澹としていた。……むせ

た……煙が充満していたのだ。

「ユカ！」

叫んだ。

視界のろくにきかぬ中、一步踏み出した途端、何か柔らかい物に躓きそうになった。ユカの体だった。ぐったりとして、動かない。口と耳から血を流していた。コージはその体を抱き起こし、名前を連呼しながら激しく揺さぶった。だが、何度名前を呼んでも返事はなかった。それでもコージは名前を呼び、体を揺り動かすという以外に出来る事を知らなかった。

煙に咳き込む女の声。だが、それはユカの声ではなかった。ドアが開いた。そこには、ルキロが立っていた。

「コージ」

母親はコージの姿を見て、驚きと歓喜の入り交じった表情で叫んだ。子供達が手を振って助けを求めていた部屋に流れ弾が直撃したのを見た時は、ショックのあまり気を失いかけた。だから、赤毛の少女の後ろに、自分の息子の姿を認めた時は、あまりの嬉しさにどんな表情を浮かべればよいか分からないほどであった。だが……少女に抱かれた我が娘を見て、その表情は凍りついた。

「ユカ……まさか……」

「ごめんなさい。わたしが着いた時には……もう……」

赤毛の少女はうつむいたまま、どこに視線をもっていけばいいのが困っていた。

母親はユカの体を受け取り、抱きしめる。もしやと云う思い、希望が完全に崩れ去った。目に涙を浮かべながら、ルキロに御辞儀をした。またユカに視線を落とすと、力なく呟いた。

「神様……わたし達が、何をしたというんですか」

ルキロは黙って立っているしかなかった。

彼等は、侵略者達が互いに潰し合うのを待っていたのだろうか。その小規模な白兵戦が終了し、勝者側ジーン・ウーズイの姿が数体だけとなった時、それは始まったのだった。

一体のジーン・ウーズイの頭部が小さな爆発を起こし、カメラアイを覆う硬質ガラスが砕け散った。

操縦席内のスクリーン映像は、ヒビが入ったように不自然に分割されていた。その映像に映っている人々は、ウーズイに対しあからさまな敵意をむき出しにしていた。対戦車砲等で武装した地球人達だった。三十人ほどの大人数で、この場ではあまり役立ちそうもない迫撃砲や、さらに役に立たなそうな機銃を持っている者もいた。服装はまちまちで全く統一感がなく、中にはヘルメット替わりに頭にナベをかぶっている者までいた。

町の自警団が攻撃を開始したのである。彼等全員の火器が一斉に火を吹いた。だが対戦車砲の直撃をもつてしても、ジーン・ウーズイの装甲にかすり傷程度の損傷しか与える事が出来なかった。指揮者の命令により、頭部のカメラにターゲットが変更された。人間の目の位置にあたる部分だ。だが、その攻撃のほとんどは、カメラどころか頭部にすら擦りもしない。まったく訓練されていない者の技術だった。……結果的には、それを自覚していたからこそ、彼等の大半は命が助かったのだが。

反撃を受ける前に、彼等はずっと逃げ出し始めた。予定していたようにバラバラに霧散し、それぞれ細い路地、ビルの中などに入って行った。だが……ジーン・ウーズイは彼等を追った。路地に人影を見るや発砲し、彼等の入っていたビルに乱射した。光のシャワーが地面に降り注いだ。ビルの壁を突き破り、腕を突っ込み、手当たりしだい中の人間を捕まえ、捻り潰した。ビルごと破壊し尽くす破壊力である。その中には、あきらかに関係ないと分かる女や子供も混ざっていた。血や脳漿で薄汚れた悪魔の手は、さらに次の獲物を求めて動いた。手を上げて投降してきた者もいるが、光に包まれた次の瞬間にはその者の肉体は空気に溶けて、風に流れていった。

ルキロはコージとその母と一緒に、小高い丘の向こう目指して進んでいた。

ルキロはまたユカの軀を抱きかかえている。丘の向こうにコージ達の父親が埋まっている墓地があるとのこと。そこに向かっていた。背後に激しい戦闘の音を聞いていた。両軍の戦いだ。彼等の戦いの結果などにルキロの興味はなかった。自分の星へ早く帰りたい気持ちに変わりはなかったが、こんな戦いにはもう加わりたくなかった。命令だから、軍人だから、という理由で魂さえも投げうたなければならぬのなら、軍人でないたくない。

音がとまった。戦闘が終了したのだ。だが、続いて風が運んできた音は、なにやら異質な匂いを含んでいた。この音は、エクシールとディオの戦いではなかった。

ルキロは振り返った。そして彼女は眼下に展開する光景を見るのである。町は光に、続いて炎に包まれた。光、炎、風、震動、それら全てが一斉に、人々の魂を餌食に求めて触手を伸ばし出した。さきほどのエクシールとディオによる戦闘の激しさなど非ではなかった。町全体が炎上し始め、建物が次々と崩れていく。人々の断末魔の絶叫が届いてきた。

コージも足を止め、自分の暮らしてきた町の運命を目に焼きつけていた。

ルキロの体は震え始めた。それでも目を逸らさず、両軍の残虐な行為をじつと見ていた。地球人達が死んでいく姿をじつと見ていた。全身の震えがさらに激しくなる。特に脚の震えが酷く、立っているのもやっとなほどだ。かつて味わったことのない絶望的な感覚。ルキロは耐えた。辛かったが、目を逸らしてはいけないと思った。これが、自分たちの種族なのだ。

「タグザムティアは宇宙の誇り」

かつてエクシールの教官が云っていた台詞を小さく呟いた。口に出す事で、そんな言葉を自分の中から捨ててしまう事が出来るの

なら、いくらでも絶叫していただろう。
眼下の映像を網膜に、そして記憶に焼きつける。絶対に……忘れない。ルキ口は思った。

6

それは暗闇であつた。正確には暗闇という概念すらもない。ただひたすら「無」である。「無」を示す、「00」のデータが連なるだけの、そこは宇宙であつた。

ときおり青白い光が輝くが、眠りにでもつくかのように、一瞬にして消失する。「無」に戻る。延々と、ただそれだけを繰り返していた。あちらで輝いたかと思うと、今度はこちらで、といつまでも繰り返していた。また一つ輝いた。だが、今度はその光は、なかなか消えなかった。いつまでも輝いていた。

「……」

なにやら、意志を持っているものようであつた。

「……」

もう一つ、青白い光が輝いた。

もう一つ。もう一つ、

一瞬にして、そこは星の海とかした。

「来ているようだな」

「来ているな」

「近いかな」

「近いな」

「我らの蒔いた種か」

「そうだ。我らの蒔いた種だ」

「そして、あれが……」

「ああ。一つ……いや、二つか、戻って来ている」

「見つけられはせぬだろうか」

「さて。とにかく、この場所はあるのメモリーからは外しておいたがな」

意外と近くにいるかも知れない。

だが、エイジたちの姿を見つける事はできなかった。かわりに発見したのは、こちらに向かって飛んでくる四機のアロ・イーグの姿だった。

「また戦いか……」

ルキロはため息を吐いた。近くにアロ・イーグの敵となるだろうギ・グルグの姿を探した。巻き添えをくってはたまらない。しかしどうやら、この周囲にはいないようだ。ルキロは、近付きそして遠のいていくであろうエクシールの飛行の軌跡を黙って見つめていた。

何かおかしい……

アロ・イーグは近付いてくる。そしてルキロは理解した。四機のうち一機は隊長機であるレ・アロ・イーグ。一機は腰の両側に刀を釣り下げていた。一機は背中に長大なライフル銃を運び、一機は装甲をほとんど取り外した超高速仕様。普通の編隊は統一された機体のカスタマイズが行われているはずなのに……今ルキロが目になっている編隊は、あまりにもそれぞれが個性を主張し過ぎている。そんな連中を、ルキロは「他に」知らない。四機のスピードが落ち、下降を始めた。ルキロを取り囲むように、着地した。

「リーアック隊……」

ルキロは確認するかのように、小さな声を出した。機体の左腕に、青い稲妻のようなマークが見えた。もう、間違いはなかった。しかし、この空気はなんだろう。ずっと、戻りたいと思っていたはずなのに、また、彼等に会いたいと思っていたはずなのに、嬉しいはずなのに……この張り詰めたような空気はなんなのだろう。……どこから来る？ この緊張は……

「ルキロ……」

隊長タゲンの野太い声が、拡声器から聞こえてきた。懐かしい声だった。

「本当にルキロだったのか」

タゲン同様に懐かしく……そして、今もつともルキ口が聞きたかった声……

「ウエル……。なんで、ここが……」

「さっきここで、戦いがあつただろう。ウーズイのマイクが拾った君の声らしい音を……たまたま通信兵のレクンが聞いていて、教えてくれたんだ」

そう云うウエルの声は暗く沈んでおり、少しも喜びが感じられなかった。

いつの間に寄ってきていた四機のジーン・ウーズイがそれぞれアロ・イーグの間に立つ。

銃を地面へ……ルキ口へと向けた。

「突然の命令だったんでな……正直、おれもうろたえている」

タゲンの震える声には怒りや動揺が込められていた。

「チームの人間が見つかったらしいから、そちらに向かう、って云ったんだよ。……そしたら、すぐに上から命令が来た。……捕らえる、と」

「捕える……って」

ルキ口の目は驚きに見開かれる。

「お前首の……除去したろ。……敵対行動になるんだとさ。それともう一つ、逃亡罪だ」

「……違う！ 逃亡なんか、していない」

ルキ口は叫ぶ。

「おれに云い訳をしても仕方ない。おれはお前を捕らえろと命令されただけだ。……逆らったら、おれたちまで罪人だ」

逃亡罪と反逆罪……重罪である。それぞれの罪だけでも、捕えられて自由の身になれた者などルキ口は聞いた事がない。噂でしかないが、大半は死刑かそれに匹敵する重罰と聞いた。ルキ口は自分がそこまで罪に問われるような事をしたとは思っていないし、申し開きようなどはいくらでもある。だがルキ口には、そんな事よりも、今やっておきたい事があった。

八方を塞がれ、どこにも逃げ場はなかった。ルキ口は歯噛みした。そして次の瞬間、それは起きた。……ルキ口の精神を絶望の底に叩き込んだ、信じられない事が。稲妻のような、青く激しい閃光を感じた。同時に浮遊感を覚えた。足下の瓦礫が突然に消失したのだ。自分の体がゆっくりと落ちていったのは、反重力が働いたためではない。彼女の中で、一瞬、時が静止してしまったからだ。できたばかりの五十センチほどのくぼみにはまり、ルキ口は尻餅をついた。

「ウエル……まさか……」

ウエルの乗っているはずのアロ・イーグが、銃をルキ口に向けて構えていた。ライフルは背中に戻したまま。どのアロ・イーグの腰にも装着されている短銃だ。再び稲妻が光った。立て続けにそれは撃たれた。ルキ口の頭上をかすめ、両脇の瓦礫がえぐられた。激しい熱波がルキ口を襲うが、彼女の神経細胞は情報伝達という本来果たすべき義務をすっかり怠っていた。

地球人の少女をいたぶっている狂人とも考えたのだろうか。町の自警団の生き残りが、自分が瓦礫の下に埋もれている事を利用して見えない位置からウエル機に向けて、対戦車砲を放った。左肩に被弾し、アロ・イーグはよろけた。すべてのエクシールの顔がそちらを向いた。と同時に全てのエクシールは背中から激しい砲撃にさらされる事になった。対戦車砲、迫撃砲、様々な火器が、様々な音を立て、四方八方からエクシールに炸裂する。煙幕弾が投げ込まれ、視界がきかなくなる。さらに、重火器による攻撃は熾烈になつていく。それでも、エクシールの装甲に傷をつける事はできなかった。だが、それはそれでいい。煙が晴れた時、そこにルキ口の姿はなかったのである。

「逃げられたか」

ウエルが淡々と、かつ演技めいた不器用な口調で云う。

「逃がしたんじゃないの」

ノウヤンがうそづく。

「……ウエル、どうして発砲したんだ」

タゲンがただす。

「どうせ……また、見せしめのために、と処罰されるんじゃないんですか。前も、いたじゃないですか。……だから……それならば、せめて自分の手で、と思ひまして」

「まったく。おい、お前ら」タゲンはジーン・ウーズイに乗っている者たちへ、通信を入れる。「見たな。命令通りルキロを捕らえようとしたが、地球人の邪魔が入り取り逃がした。ルキロを同胞と勘違いしたのか、本当にルキロが我々を裏切ったのか、それはおれ達にやわからん」

ツーは胸部扉を開けた。外へ身を乗り出して、自分の機体の様子を自分の目で確認した。

「くうっ。あの地球人どもめ、擦り傷一つ負っちゃあいけないけど、さんざん小汚くしてくれたよ。せつかくの勇姿が台無しだぜ。……でも、まあ肩の稲妻が薄汚れて目立たなくなってるのはいいけどね。おれ、あれ嫌いなんだよな、だっせーったら」

ツーの体を白い光が覆い包んでいた。

彼の肉体は川に砂を流すように、光の中で崩れていった。分子レベルで破壊されていく。

光はそのまま操縦席を通り抜け、アロ・イーグの背中から突き抜けた。数瞬の間をおき機体が爆発した。アロ・イーグは地にくずおれ、さらなる爆発を起こし、四肢が吹き飛んだ。真っ黒な煙を吹き上げ、炎上する。燃えるアロ・イーグの炎の熱に揺らめいて見える……六機のギ・グルーグの影。

8

「くそ。ツーの馬鹿がつ。ぼけつとしてやがつて。……敵討ちだ。全員浮上」

レ・アロ・イーグに続き、残る二機も浮き上がった。四機のジーン・ウーズイによる部隊は、白兵戦が得意なのか、全機抜刀し、ギ・

グルーグに走りよった。六機のギ・グルーグのうち、三機がそれに応戦する構えをとり刀を抜き、残る三機はレーザー銃を宙に向けてアロ・イーグを狙った。ギ・グルーグのレーザー銃が放つ閃光の間を縫うように、縦横無尽に飛行するアロ・イーグ。時折レーザーがかすめる事もあるが、特殊コーティングされた装甲の表面を薄く剥ぐ程度である。ノウヤン機の頭部カメラへの一撃が一機の視界を暗闇とし、続いてウェル機のライフルの一撃が操縦席を貫く。エクシユールとディオはよほど個性的な仕様にカスタマイズしない限りは、装甲の厚みはさほど変わらない。装甲と、コーティングされている特殊塗料、それとレーザーなどをはじく効果のある微粒子で機体を覆っている。狙う角度、タイミングにより、一撃で装甲を突き破る事も可能だが、当然、そうはさせじと互いに邪魔をし合う。そんな戦いの中、ノウヤンとウェルのコンビネーションによる攻撃は、確実に敵の装甲を貫いていった。冷静であつた。仲間の死は、生きていなくては悲しめない。ジーン・ウーズイは四機中の二機が失われている。だが、すでに三機のうちの二機をしとめており、今は残る一機と交戦中だ。アロ・イーグが相手している機体も、あと一機。刀を持ったタゲンのレ・アロ・イーグが、空中から素早い下降で襲い掛かり、ギ・グルーグの前で不意にコマのように回転した。ギ・グルーグの首が飛び、さらに次の回転で、胴部を両断されていた。刀に人の赤い血がうつすらとこびりついていていた。

残る一機のディオに、エクシユールすべての攻撃が集中した。ギ・グルーグはたちまちのうちに、頭部が消失し、肩が碎け、脚がもげ、腕が飛び、戦闘不能の状態となつた。

バランスを崩し、倒れそうになつたその瞬間、胸部ハッチが開き、ヘルメットをかぶつた黒いスーツの人影が飛び出した。七メートル以上の高さをものともせず、地面に着地した。それと、走り出す動作とがほぼ同時だつた。銃の狙いが定まらぬように右に左に動きながら、走っていく。あつという間に、瓦礫まみれの狭い路地に入つてしまつた。

タゲンは「畜生め！」と叫び、コンソールを力一杯叩いた。

9

カイはヘルメットをぬいだ。

グルーグを乗り捨て、何分も全力疾走したというのに全く息が切れていない。

半分瓦礫に埋もれたディオを発見する。ゾ・ヴィムである。

「これは、まだ使えるな」ハッチが開き、中の操縦者だけが撃ち抜かれて死んでいるのだ。「おれの星の者にも、さっきの馬鹿のような男がいるのだな」

自警団とやらの、あの頼りのない弾丸でやられたのだろうか。操縦席には傷一つないようだ。中の男は、頭部に一発食らって絶命している。彼等はみな驚くべき肉体の強靱さを持っているが、さすがに脳を撃ち抜かれては生きてはいけない。カイは、中の男に手を伸ばし、引っ張りだそうとした。……風が変わった……周りを囲まれていた。……地球人達……それぞれ手に構えた銃をカイへと向けていた。

第六章 生きているのなら、行動しろ

1

高度な文明といっても単な歴史の積み重ねであり、生身の生物が地球人に比べて桁外れに強いはずもない。そうタカをくくっていた自分達の考えを、彼等はほんの数秒後に呪う事になる。自分達は五人、しかも相手は両腕で同胞の死骸を抱え持っていた。彼等は町の自警団の者である。煙幕などを使用して、赤毛髪の少女を無事救出したばかりだ。赤毛の少女は恐怖に麻痺したのか、全く動こうとしなかった。二人がかりで抱えあげ、なんとか彼等の目の届かない場所へ逃げる事が出来た。また急追して来るのではないかと恐れたが、いらぬ心配だった。すぐさま敵軍との戦いが始まったからだ。

少女は瓦礫の上にしゃがみ込み、目もうつろで放心したように何かを呟いている。

両軍の戦闘は短時間で終了した。自警団の逃亡を助けてくれた側の敗北だった。だが、勿論、彼等も憎むべき相手である事に変わりはない。一人がこちらに向かって逃げて来る。身を潜めて銃を構えるのは、当然の行動だった。

恐るべき相手である事は最初から分かっている。だから彼等は、声をかけて投降を求める事もせず、目配せによる合図で、いきなり発砲した。だが異星人の男……カいは、すでにその場から消えていた。うろたえている一人の首筋に横から手刀が叩き込まれた。白目をむき、倒れそうになる。カイはその男を盾にとり、悠々銃を取り出した。光弾が空気を引き裂き、そして一人の地球人の未来を引き裂いた。銃声がする度に確実に命が一つ減っていく。人質を無視して攻撃を加えるべきか、逃げ出すべきか、それとも……ほんの一瞬たりとも迷ってしまった事が、地球人達の敗北に繋がった。最後に、カイが人質にとった男が残った。カイが手を離すと、それは地に崩

れた。続いて光弾がその頭部を消し去った。

カイは作業を再開した。ゾ・ヴィムの中に入ろうとする。

すすり泣くような少女の声に動きをとめた。さらさらとした赤い髪を風になびかせながら、少女が、崩れ落ちた大きな壁に腰を降ろし、両膝に顔を埋めていた。

「地球の女、そこにいると邪魔だ」

地球の女？ 少女は……ルキロ・エ・ルは顔を上げた。

「タグザムティアか」

ルキロは黙っている。だが、間違いはなさそうだ。

ルキロは再び顔を沈め、両手で頭を抱えた。死んでいった地球人の顔が浮かぶ。今まで殺してきた人間の顔が浮かぶ。……アロ・イグの銃を自分に向けたウエル顔が浮かぶ。

何だ、この感覚は……。カイの心の中に、今までに感じた事のな何かが生まれていた。仲間と、憎しみの目を向けてくる敵……カイの記憶の中で人間と云う存在はただその二種類だけで、人々の様々な「感情」に触れる機会などなかったのである。

自分が感じている気持ちの正体が分からない事が、たまらなく不快だった。無意識のうちに体が動いていた。ルキロの頭を、容赦なく蹴りつけていた。ルキロの抵抗なく横倒しになった。その体制のまままで起き上がるうとはしなかった。

「何があったか知らんが、いつまでもそばで泣くな」理性で制御できない突発的な感情と云うのは、彼等には極めて希薄である。だが、カイは今、それを初めて体験した。「生きているのなら、死ぬまで行動しろ」

何を云っているのだ、このおれは。カイは自問した。……ああ、そうか。キーレンとの問答の中で、おれの中に知らず溜っていた「何か」……それを吐き出しているのか。

「じゃあ……殺してよ」

力無く、哀願するような瞳をカイに向ける。ルキロの台詞が終わるか終わらぬかのうちに、カイの手にした銃は倒れているルキロの

額に当てられていた。ルキ口は初めて、薄く笑った。これからの出来事に心を運ばせている。苦しみから逃れられる。

カイは、ルキ口の頭を土足で踏み、固定し、まったくの躊躇も見せず、引き金を引いた。

カイは知っていたのだろうか。……エネルギーは切れていた。

2

「敵……なんでしょ、わたしは」

「お前のようなつまらんやつを相手にする気はない。自惚れるな」
居住ビルの上階は消し飛んでなくなっていたが、下の数階は完全な状態で残っていた。

ルキ口は部屋の隅にうずくまり、相変わらず惚けたような表情を浮かべている。邪魔になるから、とカイに引つ張ってこられたのだ。カイは、何かの役に立ちそうな物を、と棚などを片っ端から物色している。作業する手を休めはしなかったが、少女に何が起きたのかをあらためて訊いた。彼なりに気になってはいたのだろう。ルキ口は素直に答え始めた。もしかしたらそれで少しは楽になれるかも知れないと考えたから。自分が逃亡兵として追われる存在である事。チームの仲間であり、ある特別な仲だった若者に、射殺されかけた事。それらの事を、無意味なほどに事細かに長々と話した。聞き終えてカイは、

「……もしおれがお前達と同じ低級な生物だったならば、おそらく腹を抱えて大笑していた事だろうな」無表情に呟く。さらに表情を殺して、「そんな距離で、軍人が弾を外すかよ」

ルキ口は膝を抱えてしゃがんだ姿勢のまま、横に倒れ、転がった。ウェルハシャゲキノメイシュデシタ……

呼び出し音が鳴り、カイは腰の通信機を手についた。

「キーレンか……」

3

闇の中に炎が浮かんでいた。大きな炎だった。ゆらゆらと揺らめいている。その中に、服やら木の破片やらが時折投げ込まれる。地に座った十数人の男たちが、炎を囲んでいる。その男たちを、さらに十数機のジーン・ウーズイが囲んでいた。

平和で賑やかだったこの町は、戦火にさらされ、時間わずかにして完全に壊滅した。

像が吹き飛び、水も枯れている噴水の、狭いふちで器用に四人ほどの男が踊る。タグザムティア北方の民族舞踊とされている踊りである。周囲の男たちが拍手をし、踊りに合わせて歌をうたう。

彼らは、目をこらせばそれと気付くほどに透明に近い黄色いドーム状の空間内にいた。上から落ちてくる枯れ葉や塵などが、それに触れるとたちまち蒸発したように消える。しゅ、と音を立てる。その小さな音はひっきりなしに続いていたが、楽し気に騒いでいる彼等の耳には入らないようだった。だが、ある音に、彼等は一斉に立ち上がった。踊っていた者たちも、腰の銃を抜いた。ある音とは銃声であった。彼等めがけて銃弾が打ち込まれたのだ。枯葉同様に、障壁に触れたそれは小さな音を立て、空気に解けた。

立て続けに銃声が鳴り響く。

地球人がいるぞ！ 一人が叫んだ。障壁の向こう、崩れた壁に隠れて武装した数人の男達の姿を見つけた。彼等のはのんびりとキャンブを張っている憎むべき異星人を狙い、銃を撃ちまくった。だが一発たりとも障壁を通過する事は出来なかった。逆に、兵士たちの撃ち返した光の弾丸は障壁を突き抜け、面白いように命中していく。生き残った地球人達がみな逃げ去った後も、彼等は戦闘体勢を解く事なく、障壁を解くや否、ジーン・ウーズイへと乗り込んだ。だが、それは、地球人に追い討ちをかけるためではなかった。斥候からの通信が敵の接近を知らせたからだ。

乗り終えた彼等が、待機されていた動力のスリープを解除するのと、暗闇の中からそれぞれ六機のゾ・ヴィムとギ・グルーグが現れるのとはほぼ同時だった。そして、ジーン・ウーズイの巨体が動き

出すのと、敵が攻撃を開始したのも、まったくの同時だった。ジン・ウーズイは、レーザー銃による攻撃を避けながら、ギ・グルーグの群れの中へと身を踊らせていく。空と陸からの攻撃という敵の有利を打ち消すための当然の戦術だ。かくして乱戦が始まる。ギ・グルーグとジン・ウーズイが刀を振るい合い、その最中、宙のゾ・ヴィムをジン・ウーズイの銃が狙う。ゾ・ヴィムは飛び交いながらも、巧みに足場をずらしながら戦うジン・ウーズイを狙撃する機会をうかがう。奇策の立てようのない単なる個人の技術の競い合いとなった。

ギ・グルーグの一機が、脚を叩き折られ、よろける。その機会を狙い、別の一機が、背後に回り込み、首を落とした。ギ・グルーグの胸部の扉が開き、黒づくめの格好をした男が、ジン・ウーズイへと跳躍し、手掛りという手掛りも無い胸部扉に、その握力で強引にしがみついた。手操作で外からハッチをあけようと、ハッチの脇にある小さなカバーを引き剥がし、小さなレバーを捻った。空気の抜ける音と同時に、胸部のハッチが開いた。この間、ほんの二、三秒ほどしか過ぎていない。……結局、彼はジン・ウーズイの中に入り込み、敵の首をあげる事はできなかった。操縦席内からの銃撃に、背中にくつもの穴が穿たれ、最後は頭部を打ち抜かれ、彼は地へと落下した。隊長が叫んだ。

「だから操縦席狙えと云ったろう。格闘にもちこまれたら、一瞬で首もつていかれるぞ」

エクシユールは操縦者が生体ユニットとして加わって、初めて機能する。彼等と同じ脳波を持つ生物でなければ扱う事は出来ない。だが彼等が今敵としている者達は、死への運命と引き替えに自己の脳波を変えてしまう事がある。ただは死なぬ、一機でも道連れに、と彼等の常套手段となっている。別のジン・ウーズイに乗っていた者は、すでにその方法で命を奪われていた。いや、まだ息はあるのかも知れない。だが、隊長はためらわずに、部下と敵のいる操縦席内に銃の照準を合わせ、撃った。

「あんなのが地球人より優秀だなんて絶対認めないぞ」

エイジは燃え残った建物の中から、異星人同士の戦いを見ていた。「人は、何かを守るためだけに戦うんだ。……あいつらののは、何かを奪うためのもんですらないじゃないか。ただ狂っているだけだ」タクはその後ろで、黙って夜食のパンを口に運んでいた。黙っているのは、単に、兄がこ難しい言葉をひっきりなしに喋っていたからだ。だが、兄がようやく口を閉ざしたため、タクは兄に話し掛けた。

「ごはん、食べないの？」

エイジは振り向いた。

「ああ。……でも、お前にみんなあげるって云ったじゃないか」

「でも、お姉ちゃんがいなくなっちゃったし……」

「いなく……ルキロはきつと……いや……そうだな。ルキロはうまくやってるだろう。……じゃ、傷みやすい物から、あとで二人で分けて食べよう」

4

空を飛ぶゾ・ヴィムの姿は、暗闇に溶け込んでいた。ただ一つ目が真っ赤に光っていた。

「何を考えてるの？」

「何がだ」

カイはルキロに一瞥もくれず、スクリーンに映る黒い空を見据えたまま。

ゾ・ヴィムの操縦席後ろの狭い空間に、ルキロは窮屈そうに体を押し込んでいた。

「敵を、こんなとこに乗せて」

「お前みたいなのは敵じゃないと云っただろう。それに、大陸北方はすべて自由に移動する権利を与えられている。敵と遭遇したら戦えばいいだけだ」

「どこにも変わり者はいるんだね」

「おれは変わり者ではない」

スクリーン脇の副画面に人の顔が映った。かなり太っている男で、鼻も口も赤くて大きい。「カイの友人」と「異端」とを自称する男、トキ・ワ・キーレンである。

「やあ、カイ。ちゃんと、その場所に向かっているんだろっね」
丸く、柔らかそうな二つの瞳でカイを見つめている。

「うるさいな。お前がうるさいから、仕方なく云う事を聞いている」
無愛想なカイだが、キーレンを相手にすると、少しばかり様子が変わってくるようだ。

少し前、ルキ口はカイの通信機でキーレンと会話をした。キーレンの話術の巧みさに、ルキ口は様々な事を聞き出され、喋らされていた。どうせ隠しても仕方のない事ではあったが、とにかく「異端者」キーレンはルキ口に興味を覚えた。そして、ルキ口の行き先に「カイは黙って彼女の行きたいところへ連れて行ってあげればいい。他の大陸に行くわけじゃないし、違反ではないんだから」

カイは鼻をならした。同時に、彼は思う。キーレンの態度はいつもと同じ、相変わらずの変人だ。ただ……やはり、何かが違っている。演技のように思えてならなかった。気のせいかも知れないが、何かまとわりついていてる空気が違っているような気がする。

キーレンは、スクリーンの中でいそがしく舌を回し続けている。

「……そうだね、ルキ口。確かに我々の星と、地球とは文明の共通点はかなり多い。例えば、地球に昔あった自由の女神、あれと同じような物が、我々のところにもあるし。……接触があったのは確実として、どっちからどっちへ、それはいつ……という事だね……」

「ウソ偽りのない我々の歴史に、記録されてないわけがあるものか。地球との関係だと……くだらん。こんな下等な惑星が……」

カイが言葉を挟む。

「ウソ偽りだらけなんだよ。きつと」

ルキ口はけだるそうな表情のまま、横目で黒い空を見ていた。

第七章 プロトタイプ

1

青い水晶のような半球形レーダーにいくつかの光の点が明滅し始めた。おおよその位置を特定し、さらに範囲を拡大する。点の色は黄色と白。ライスカイスの識別信号を出しているのが黄色。それ以外が白である。カイは進路をずらし、その場へと向かった。

通信を拾う。隊長が抑揚のない声で作戦指示をしている。カイのすぐ後ろ、狭い空間で窮屈そうに体を縮めているルキ口は、その声を聞き、複雑な表情を浮かべていた。まず、単純に、命のやりとりが馬鹿馬鹿しくなってしまったという事が理由の一つ。そして、やはり自分はタグザムティアの人間であり、その自分がディオと呼ばれる敵の戦闘兵器に乗っている事。彼の「少しでもおかしなそぶりをみせたら、キーレンに後で何を云われようと構わない。おまえを殺す」などと云う声に、かえって安心するほどであった。

上空に到着してみると、すでに全ては終結していた。

今までに目が腐るほど見てきた、小さな町での攻防戦だったようである。

炎上している家屋。エクシュールやディオの残骸らしき物体が見える。人影などは暗くてまったく判然としない。ゾ・ヴィムは地上三百メートルの高さに浮いているのだ。

カイの指が操作盤のスイッチ類に触れると、地上の映像が拡大された。

どれほど激しい戦いだったのだろう。両軍ともにおびただしい数の残骸を出している。

ルキ口は信じられぬ光景を目にし、混乱した。男達が地面に立てた柱に縛られ、他の人間達に撃ち殺されていく光景。銃を持つ男達……タグザムティアの……いや、銃が……地球人！ 地球人に仲間が……いや、ライスカイス……交じっている……！

また一人、頭を撃ち抜かれて絶命する者。他の柱の男は、四肢を次々に撃たれ……

楽しんでいる……。笑っている。地球人による、異星人の虐殺……。地球人も、結局。

続いての光景に、また疑問が湧く。女達の姿。まだ燃えている機体から引き出されている。男は、柱に縛りつけるまでもなく即座に殺されてしまうのもいたが、女達はみなにかつがれ、どこかに運ばれていく。これも同じくどちらの星の人間もいる。

「どこに連れていかれるのだろう」

「おまえらには、耐えられないだろうな。地球人の慰み者になるのは」

ルキ口の全身の血液が逆流した。殺されるのはいい。仕方がない。だが……

「高度を下げて。おろしてよ。……助けなきや。あいつらをやつつ

……」

ルキ口は身を乗り出し、カイの首を締んばかりの勢いで騒いだ。

「これは戦争だ、馬鹿。しかも、おれたちが勝手に押し掛けた、な」

「で、でも……でも……」

引きずられているタグザムティアの女の一人が、口から血を流し、崩れた。地球人達は、残念がり、そしてその肉体を蹴飛ばした。彼女は、自分の舌を噛み切ったのである。

「あんたの仲間だつて、いるんだよ」

また女が一人、数人に担がれて運ばれていく。真っ白な顔に、黒いスーツ、そして血の赤。四肢の全てが撃ち抜かれ、動きを封じられていた。

「知っている。……こいつは、同じ師団に属してた。シェイルという名だ」

画面に映っているその女を指で差し示す。

「それじゃあ……どうして……」

「やつらはどちらも、地球人との戦闘に負けたんだ。わざわざ地球

人を倒しに行っても、時間の無駄だ」

「酷いよ、そんなの。仲間なんだよ！」

「せいぜいその『尊い感情』に浸っているがいい。……もう行くぞ」
ゾ・ヴィムの駆動音が大きくなる。急加速に、ルキ口は後ろに引
つ張られるような気分を感じた。途端に、集音機の風を拾う音が強
まり、ばりばりと激しい音をたて始めた。だが、ルキ口の耳には全
く入っていないようだ。小さく口を開いて、何かを呟いている。カ
イは音よりそちらのほうがよほど鬱陶しく、集音機をあえてそのま
まの状態にしておいた。

点のように小さく見えると、どんな悲劇でも滑稽に思えてくる。
だが当然、その犠牲者達には関係のない理屈であり、悲劇は現実と
して次々と起きていった。死にきれなかった女たちも数多い。特に
タグザムティアと地球の人間同士は酷似した遺伝子構造になってい
るのか……やがて憎むべき地球人の父を持つ私生児が生まれ、タグ
ザムティアで、そしてこの地球で、後の歴史に大きく関わっていく
事になるのだが、それはまた別の話である。

2

「これは、渡れないよなあ。話に聞いた通りだった」

旅立つ時、汚染地帯とただ言葉に聞いていただけのエイジは、と
ころどころに腐臭を放つ沼地のある湿地帯を想像していた。だが、
目の前に広がっていたのは、砂の海だった。

「兄ちゃん、黄色の風って、こんなのが運ばれてくるのかも知れな
いね」

「うん。……単なる荒地を想像してたけど、ここまで完全な砂漠地
帯とは思わなかった。町で云われた通りだ。……なら、強引に進ん
でも放射能でやられるだけだ。どうしょ」

「……あっちでまたやっているよ、兄ちゃん」

タクが、自分達のやって来た南東の方向を指さした。

ゾ・ヴィムとアロ・イーグの空中戦。もう、これまでに何度見た事だろう。以前ならば、タクは興奮しながらその戦いを見ていた。エイジはそれをたしなめながらも、自身タクと半ば同じような気持ちを覚えていた。それはあくまで自分に被害が及ばなかったからだ。もう見飽きてしまったし、それに、人々の死をあまりに多く見過ぎた。嫌悪と侮蔑の感情こそあれ、エイジの心象をよくするような要素はこの戦闘にはもう何も無い。

二百メートルほど離れた場所で、どうやら、三対四の戦いを繰り広げているようだ。ゾ・ヴィムが三機、アロ・イーグが四機。姿勢制御と推進補助のための炎を四肢から爬虫類の舌のようにちらちらと出しながら、下降、上昇、旋回、そして旋回、集結、目で追い切れぬ素早い動きを繰り返す。幻想的ですらあったが、エイジには、彼らは何を考えて戦っているのだろう、という疑問しか湧かなかった。

幻想的な光景と戦力の均衡が崩されたのは、一瞬にして二機のアロ・イーグの頭部が爆発した瞬間だった。当初、タグザムティア側が数の上では優勢に見えたが、操縦の技量においてはわずかに及ばなかったようである。ゾ・ヴィムが三機、アロ・イーグが二機、数の上でもアロ・イーグが劣勢である。だが、逃げようとする様子は全く見られなかった。

タクは叫び、北西を指さした。黄色い海の彼方から、もうもうと吹き上がる砂塵。嵐ではなかった。何か低い高度を高速で飛行しているのだ。どれくらい速度だったのだろう。雷のように速い事は確かである。タクが声をあげてから、数秒もたたぬうちに、その物体はみるみると大きさを増し、はっきりと視認できるようになった。

「エクシユールか……それともディオ」

エイジは、その謎の飛行物体に目を奪われた。それは、先ほどからの戦いの場へと一直線に向かっている。まだ距離はある。一機が、アロ・イーグが首をそちらに向けた。何かをとらえたアロ・イーグ

がメインカメラで確認しようとしたのだろう。だがその瞬間、アロ・イーグのその首が消滅していた。何か光線のようなものが……

ずっと目で追っていたはずのエイジは、いきなりそれを見失ってしまった。タクが先に気付き、指の示すほうに視線を向けた。その機体はすでに、黄色の海を渡り終え、じゃれ合っていたアロ・イーグ、ゾ・ヴィムらの後方へと回り込んでいた。そしてその右手には、アロ・イーグの頭部が……五指がすべてアロ・イーグの頭部に埋まっていた。腕を振るい、それを投げ捨てる。その機体の大きさは、エクシールやディオと変わらなかった。赤錆に包まれたような色の装甲で、頭部、人間でいう目にあたる位置には横長の黒い空間があり、緑色の光が右に左にと素早く移動していた。

動き出した。背中から恐ろしく大きな炎が吹き出た。ほとんど白に近い、微量な青を含んだ炎の噴出。背中側から見れば機体のほとんどが隠れてしまうほど。そしてそれは、ゾ・ヴィムやアロ・イーグの操縦者達にとって、巨大な白い悪魔の姿だったのである。

実際に戦っているのは赤銅色の機体なのだが、エイジ達にもそれは巨大な白い悪魔に見えた。悪魔が手伸ばし、アロ・イーグやゾ・ヴィムを包み込んでいく。その都度、獲物は爆発し、命が確実に散っていく。

何やら靄に包まれたように全く事態を認識出来ずにいるうちに、すでにエイジたちの視界には、その悪魔しか存在していなかった。巨大な亡霊は姿を消し、もとの大きさに……赤銅色の機体へと戻っていた。

エイジのすぐ近くで、重い金属音がした。ギ・グルーグがライフ銃を構え、立っていた。ゾ・ヴィムを倒したいわば敵であるその機体に向けて、放った。光線が赤銅色の装甲を貫いた。いや、その寸前で、光線は拡散、消滅していた。

赤銅色の機体は、背中の大砲を、上を通し正面へと回転させた。撃った。無気味な光の塊が滲み出すように吹き出てきた。それは光線としてはあまりにも巨大で、そしてあまりにもゆっくりとしてい

た。燃え尽きずに落下してくる桁外れに大きな隕石のように……
ギ・グルーグを狙ったその巨大な光は、エイジたちをも包み込む
うとしていた。

何も見えない。音も何もなく、皮膚の感覚すらもない。真っ白な
光の空間の中に入り込んだ。時間はまるで静止したのかと錯覚する
ほどにゆっくりと過ぎていった。

3

それは地球側からの、ささやかな接待のはずだった。国防省セン
タービル跡地に立てられた催事館に、両軍の主立った地位の者たち
が賓客として迎えられた。

宴もたけなわに近づいた頃、その部屋の中に、武装をした男たち
が入り込んできた。異星人の未知なる部分、そして既知の部分、ど
ちらも驚愕に値する事を理解している彼らはの装備は、何かのまじ
ないでもあるかのように重たい物だった。防弾服を二枚重ねて着
込んだ上にレーザー反射鏡をくまなく張り付けている。手には、確
実な威力を相手に与えるために鉛の実弾を発射する短機関銃。

政府の首脳陣を人質にとったわけではない。それは、彼らそれぞ
れの星にいるのだから。だがこの行動が無意味である事もなかう。
これを切り札に、有利な交渉をしていくのだ。

彼等への返答は、思いのほか早かった。それは、両軍からの集中
砲火であった。建物の存在した場所一帯は全で一瞬にして気化し、
巨大なクレーターをあとに残した。

両軍とも、ほとんどが替え玉であったし、結局、地球の行動は、
地面に大きな蟻地獄を作っただけだった。「彼等の怒りをもってし
まった」そう恐れた地球人達には、その蟻地獄が自分たちの運命、
未来を飲み込んでいく地獄への門のように思えた事だろう。

以上、冗談にもならない出来事ではあるが、事実として起きた以
上は記したまでである。

地上数百メートルの高度に、一機のゾ・ヴィムが浮遊していた。薄暗い操縦席の中、ルキロはついに画面にその光景を見る。そして、気を引き締めた。

広大な黄色い砂の湖が見える。雲から漏れる陽光を反射し、砂粒一つ一つが輝いていた。

カイは映像を、キーレンへと送った。その返事を待っていた。

副画面に、一行の文字が表示された。ルキロには読めなかったが、ゾ・ヴィムの駆動音の変化からその内容は読みとれた。ゾ・ヴィムは飛行を再開した。

「さっきの残骸、なんか気になるな」

また、ルキロは呟く。

「どこでもやっている事だ」

汚染地帯との境目で、ゾ・ヴィムとアロ・イーグの残骸を見た。密集して六、七機。少し離れた場所に、一機。映像を拡大してみた。操縦者はみな生きてはいまい。ただ、あれが、普通の戦闘でやられたものなのだろうか。離れた一機は、正面が完全に溶けてなくなっており、残った背中側の装甲などからかろうじてゾ・ヴィムと判別できた。

近くにあった車のタイヤ跡らしきものが、風に吹かれて少しずつ削られていた。

リーダーはなんの反応もみせなかった。だが、視界にははつきりと映っていた。ゾ・ヴィムのカメラは確実に捉えていた。そして、二人はそれを見た。遙か低空、地面すれすれの高さを、何かが接近して来る。砂が高く舞い上り、煙のようにくもるが、すぐに砂自体の重みでそれは降りてゆく。それは、空気抵抗のない宇宙空間をでも進むかのような……彼等の常識からも考えられない速度で、近づいて来る。

「何、あれは？」

ルキ口の心臓の鼓動が早まる。

砂煙の中を猛烈な速度で進む「それ」が、高度を変化させた。浮き上がったのである。

一時は死すら恐れぬルキ口だったが、それと襲い来る驚愕や、「未知」が本能の中から呼び起こす恐怖などの感情は、また別の次元のものだった。

暗い。……スクリーンを、ぼやけた人のような影がふさいでいた。今まで、遙か下方にいた「それ」は、一瞬にして、ゾ・ヴィムに肉迫する距離にまで迫っていたのである。

カイは操縦レバーを思い切り引いた。ゾ・ヴィムの急上昇により、画面は下へと流れる。重たい物を載せられたような衝撃を頭を感じながらも、ルキ口は画面から目を離さない。赤い空と一緒に、見た事のない赤銅色の機体が画面下へと消える。

カイはゾ・ヴィムの飛行能力を全開にした。ルキ口には、その考えが分かった。「逃げる」だ。機体性能差を考えれば、そうすることは当然だ。

無惨に溶けていたゾ・ヴィム。おそらくこの謎の機体が……。彼女は唾を飲み込んだ。

最大出力。続いて画面分割率を変化させ、全方位を均等に確認できる状態にする。

「まだ、さっきのところにいるよ。攻撃して来たわけじゃないのかな」

「いや……来るぞ」

普段眠っている機能呼び起こす事で、ゾ・ヴィムもかなりの速度を出す事が可能だ。少なくとも最大速度はアロ・イーグを上回る。その速度により、さきほどの赤銅色の機体はものの十秒もせぬうちに豆粒ほどの大きさになった。だが、その数分の一、一瞬にも等しい時間で、豆粒はもとの巨大な姿を取り戻していた。……いや、もとの大きさではなく、そして赤銅色の姿でもない。もっと超大な、

白い悪魔へと変貌を遂げていた。

「な…… あれは」

「ただの巨大な炎だ。冷静に見ろ」

巨人の中央には、さきほどからの機体の姿があった。そしてそれは、ついに攻撃をしてきた。接近をし、手を伸ばし、掴みかかってくるという単純なものではあったが、その接近する速度が半端ではない。カイが紙一重でそれを避ける事が出来たのは、ゾ・ヴィムの機体性能の良さもあったが、それ以上にカイの操縦技術、反射神経によるものが大きかった。悪魔の機体は速度をゆるめず、ゾ・ヴィムを追いこし、振り返った。

見覚えがある……何か、見覚えがある。

生と死の狭間での攻防中、ルキ口の頭の中を何か判然しないものがよぎった。だが、横殴りの一撃が瞬時にして彼女の意識を現実世界に引き戻す。ルキ口に衝撃を与え、頭部を強打させたその直接の犯人は単純な慣性の法則だったが、間接的には謎の機体の攻撃を避けるために行った彼の無茶な操縦のせいだ。おかげで命が助かったのだから、文句は云えない。赤銅色の機体は、再び、遙か後方へ……向き直った。動きが静止している。いや……姿はもう小さくなってほとんど見えなかったが、何かが動いていた。

「防御幕を！」

少女の叫びと青年の動きは同時だった。ゾ・ヴィムの全身を黄色い光の粒子が覆う。同時に、機体を急降下させた。ルキ口はもうシートにしっかりとしがみついていたので、浮き上がる事はなかった。本来は人の乗る空間ではないので、ベルトなどはない。

恐ろしく大きな、うねるような光の束であった。しかも通常の光状兵器と違い、伸びるその様を視認する事が出来た。よほど密度の濃い、半ば物質化した光なのだろう。あまりの高密度のため、それを作り出す様々な物質の絶対量も少量の空間の中に凝縮されて存在する事になり、それが光の物質化と呼ばれる現象を作る。

その光の束が上方を通過していく。避けたのだ。だが……防御幕

が張つてあるし、その余波は全体から見ればほんの微弱なものであるはずなのに……防御幕はたやすく破られそうになった。カイは計器の動きからそれを一瞬で判断すると、機体を高速飛行用、地に対して完全に水平にし、防御幕を張るエネルギーのほとんどを背中側に集中させた。手が動くのがほんの少し遅かったならば、機体が溶けてなくなっていたかも知れない。

それでも機体にかんりの無理がかかっているらしく、噛み合わせの悪くなった歯車のような、軋むような、耳障りな金属音がしている。自分達の今いるこの狭い密室。このまま、自分たちが消滅してしまうのではないか。そんな恐怖がルキ口を襲った。……恐怖？自分は恐怖を感じているのか……

「これから何も喋るな」

カイのその台詞と同時に、ゾ・ヴィムがさらに加速をした。機体の揺れが激しくなる。戦うつもりなど最初からなかったが、いざという時の事を考えて、戦闘力を残していた。エネルギーが機体を流れる配分を変化させ、全てを速度へと回した。通常まず見られない激しい炎がゾ・ヴィムの背中から噴き出た。機体はより激しく振動した。重力制御装置で風船のように浮く事ができるとはいえ、高速で飛行すれば空気とぶつかるという点は、地球古来の飛行機械と何も変わらない。全ての能力をただ前方への推進へと使って飛ぶが、追尾して来る物体を振り切るのにはまったく約に立たなかった。

赤銅色の機体は、再び白い巨人の姿をとり、襲いかかってきた。

……完全な、戦闘姿勢……地に垂直になり、空気の抵抗を全身に受ける強引な飛びかたで。右に、左に動き、隙をうかがい、拳を伸ばしてくる。

敵との正確な距離、今一瞬の相対速度、機械が次々と記憶し、吐き出している敵の行動予測。計器は常に激しく変動し、動き、光り、音を出し、カイにそれを伝える。だがカイはそれに目をやる事は無い。音、そして画面に映る何気ない光から、それらを漠然と読みとる。視線は画面だけに集中している。

細かな振動と大きな揺れとが延々と続く。お話に出てくる巨人に、箱につめられたまま、振り回されている気分。鍛えてきたはずなのに、ルキ口は吐き気をもよおしてきた。Gを軽減させる機能は働いているのだろうか、あまり役には立っていないのだろうか。いや、それがなかったら、どうなっていた事が。

矢継ぎ早の攻撃。カイは素早く手を動かし、足を動かし、それに対処していく。訓練、才能、そして動物的な勘が、本来ならば数パーセントしか無事でいられる可能性のないこの逃亡劇を、ここまでもたせている。

これが、彼らの能力なのか。それとも彼だけが特別なのか。ルキ口は、あらためて、敵であつたはずのこの異星人の能力を見直していた。感情のない機械、どれをとってもまったく同じ人形程度に思ひ、馬鹿にしてすらいいたのだが、彼等は自分たちと同じ「個」というものをきちんと持っていた。少なくとも戦闘能力には個人間になりの差があるようだ。キーレンという男も、今までのライスカイスへの認識を頭から覆すような性格だった。冷たい機械なわけではない。表現する方法が違うだけなのだ。

画面には、恐るべき敵の姿が、めまぐるしくその大きさを変化させている。その都度に、死の川へと流されているかも知れないこの小さな密室が激しく揺れる。

一瞬、顔が大きく映った。また、離れる。からみあうように、両機は飛ぶ。

残酷なまでの酷使に、全ての機器、計器が悲鳴を上げていた。飛んでいる、ただそれだけの事に、機体の耐久力が急カーブを描いて落ちてきている。何もかもがレッドゾーンを示していた。いつ、ゾ・ヴィムが空中分解を起こしてもおかしくはない。

そうか……。脳を、鼓膜を揺さぶられながら、ルキ口は心に呟いた。どこかで見た事があるわけだ。こんなところにあるはずがないから、全く考えもつかなかった。だけど、実際、ここにこれはある。これが何を意味するのか……

「ウーズイのプロトタイプ、レイ・ウーズ」

口に出し、確認した。

「グルーグ、プロトタイプ、ゲオ・ゼオル」

同時にゾ・ヴィムを操縦している青年も呟いていた。ばりばりと、鼓膜を振るわす耳障りな音がする中、彼らは互いの言葉を聞き逃しはしなかった。

「あとで訊く」

「あとがあつたらね」

素早く云い、すぐに口を閉ざす。それにしても、グルーグのプロトタイプとはどう云う事なのだろうか。見間違い？ 似ているだけ？ ジーン・ウーズイのプロトタイプと云う事は分かる。確實だ。実物を見た事はないが、資料に目を通した事はある。もう四五百年以上も昔の機体のはずだ。一般的にプロトタイプウーズイとして資料公開されているが、正確にはエクシユールのプロトタイプである。飛行能力、破壊力、機動性を持った個人用究極破壊兵器を目指して開発された。様々な地での汎用性を考慮し、人型が採用された。

タグザムティアでは、星の歴史は政府と一部の学者たちだけの独占物になっており、公にされる事はない。だが、技術史に関しては別である。政治を知って何かを学ぶ必要はない。政府の出す優秀なテキストを学び、政府の望む精神を作り上げていけばいい。反して、技術は過去の積み重ねである。それを職とする者は知るべきである。攻撃は執拗だった。乗り手の事を何も考えていない。あの無茶な動きで、なぜ中の者は生きていられる？ 誰が乗っている？ 地球人か？ 同じ疑問が二人の脳裏をよぎる。その思いが強くなるほど、ある一つの疑問への気持ちが高まる。この先には、何がある？

5

あいつは、戦いのセンスが皆無だ。カイは吐き捨てるように心の中で云った。いったん気付けば、もう攻撃を見切る事はたやすかった。計器の伝える反応が、同じようなりズムを繰り返している事に

気付いたのだ。だが……

ゾ・ヴィムの機体が大きく回転し、二人の身体を今までにない衝撃が襲う。カイは何とかバランスをとろうと努力した。ゾ・ヴィムの右腕が、肩から引っこ抜かれたかのようにもげ落ちたのである。空気の抵抗に耐えきれなかったのだ。続いて左腕も同様の運命を辿った。どのみち残る腕も切り離していただろうから、それはかえって都合がよかった。

結合部から火花を散らしながら、少しだけ速度を増したゾ・ヴィムは飛ぶ。

追ってくる……白い悪魔が……両手を広げて……もの凄い速さで追ってくる。

そしてルキ口達の目に……

あらわれた。それは、空気から湧いて出現したかのように突然だった。

都市であった。無数のビルのいくつかは、ルキ口が今までに見てきたどこの星のどこの建物よりも高い。五六百メートルはあるだろうか。ビルの間を、同じく無数の、様々な太さの管が通っているのが確認できた。

近づいていく。その都市は、ドーム状の薄黄色い靄のようなものに覆われていた。防御幕？　だが、都市を覆い包めるほどの防御幕など、二人とも聞いた事がない。なにかを攪乱するための空間が、ここに生成されているのか。リーダーに反応がなく、肉眼でも、突然に飛び込んできたように見えたのは、そのためか。

この速度で、このゾ・ヴィムの防御幕で、通り抜け、中に入る事が出来るだろうか。

自分らの進む方向、光の壁が……ドーム状を形作るその物質の一部が、開いた。ゾ・ヴィムが楽々と通れるほどの空間が生まれた。

追跡者は、白い悪魔である事をやめ、その炎はみるみる縮む。魔法が撃ち破られたかのように。炎の噴出がとまる事で、赤銅色の機体の動きもゆるやかになる。

カイも速度を落とした。このままでは、あっという間に都市を通過してしまう。そして、ゾ・ヴィムは開いた穴をぐり抜けた。……「何か」の存在するこの都市に、ルキロたちはついに到着したのだった。

分割された画面は後方をはっきりと映し出す。追跡者も、その穴を通過していた。都市に入ってきていた。

ゾ・ヴィムは静止した。

静かになった。今まで酷使される機械の唸りが絶えず耳に轟いていたのだ。

画面に映る都市も、レイ・ウーズも静かであった。

「攻撃、してこないよ」

「都市がおれたちを迎えようとしたんだ。だから、あいつも攻撃をやめた」

ゾ・ヴィムの高度がゆっくりと下がり始める。

「もう少し調べてからのほうが」

「おれは何もしていない」

ゾ・ヴィムは、何かに引っ張られていた。

6

光などまあ確かに必要ないのだが、だからといって、一人でいるといちいち消してしまうのは何故だろう。

習性が残っているのか。

どこに。

「脳」にか。

つまらない冗談だ。

この脳なしめ。

音なる。

画面を見る。

太った男のシルエット。

「あったよ」

とだけ云った。

「そう」

同じく短く返す。高く、幼い声だった。

「場所は、ここだ」

大陸北の地図が映る。北西のある一点が赤く光る。

「わかった。こちらにも、半数ほど回収し、残りは、戦わせておこう。そちらのほうにも、動くようにと指示を出しておくから」

その後、どちらも何も云わず、映像はいきなり消える。部屋は再び真っ暗になる。

この脳なしめ

プー

7

「元帥代理、ここにいましたか」

第八章 お前達はみな罪人だ

1

金属が硬い地面と触れあう音。それにとまなうかすかな衝撃。箱に詰められ深海の底に辿り着いた、そんな異様な緊張感。二人を包んだ小さな空間は、いきなり真っ暗になった。スクリーンの映像が消え、続いて計器の灯りが全て消えた。

ゾ・ヴィムは機能の全てを停止した。操縦席内の人工重力場がすべて消失し、小物がばらばらとカイに落ちてくる。それはさらに転げ、ルキロに当たった。

すっかり消失していた自分の体重の感覚が蘇ってきた。

「どうする」

ルキロが訪ねる。

「お前はもうしたいんだ」

失念していた。ルキロ自身の冒険だったのだ。自分は何をしたかったのか？ ここにある、自分たちの歴史に関係した「すべて」を知る。ただそれだけだ。ならば、今とるべき行動は一つしかない。ここから出る事だ。

「出るから開けて」

云い終わると同時に、なにやら物音が真っ暗闇の中でし始めた。

金属のレバーを捻る音。錆び付いた金属の立てる、耳障りな嫌な音だ。動力が切れたため、手動で開閉の操作をしているのだらう。ルキロにも馴染みのある音ではあったが、滅多に聞く事はない。

カイは足下にある左右のレバーを手を伸ばして捻り、ロックを外した。外扉と内扉の間にある、機密性を高めるための、何枚かの薄い金属扉が左右に開いていく音。この原始的、直接物質的な装置と、光学的な要素との組み合わせにより、操縦者の安全を守るのである。瞬間的に空気の抜けていく音。そして、外の光が隙間から入り込む。そう何分も闇に包まれていたわけではないのに、ルキロにはそ

れがとても眩しかった。

カイは、上体を起こし、足を引き抜き、背もたれの部分にしゃがむ姿勢を取った。ルキ口も懸命に体勢を整えようとしているが、なにぶん狭くて思うように動けない。

緊急時に、未知の場所で、未知の人間に囲まれた場合、咄嗟に動く人間の反応は二種類に大別できるだろう。その囲んでいる人間たちに攻撃をかけ、叩きのめし、身の安全をとりあえず確保した上で、未知なる部分を解明すべく行動する。もう一つは、単純に両手を上げてしまふ、という行動だ。「昔は、自分の事を好戦的だなんて思っていたけど、今考えると後者のほうだったんだ」ルキ口は後にそう思った。だが、彼は前者の方に属する人間だった。ゾ・ヴィムにのぼってくる足音。そこから、その重み、性別、性格などに思いをめぐらせるのと、扉をはねのけるように開き、跳躍するのは同時だった。

馬鹿……。ルキ口は罵る。迎え入れてくれたのだ。自分で、そう云ったじゃないか。

そして、科学力も未知数なのだ。もしかしたら、地球人ですらないかも知れないのだ。

そんな相手の地で、戦いを挑んで何の益があるものか。

だが不思議と物音は何も聞こえなかった。

ルキ口も懸命に手がかりを探し、身を起こし、はいのぼる。開いている外扉の小さな取っ手を掴み、身を引き上げ、外に頭を出した、その瞬間。……落下する感覚？ いや、浮遊感？ 体が何かに引き上げられるように……。実際、浮いていく。ルキ口の体が持ち上がっていく。外に出た。さらに宙に上がっていく。カイの体も宙に浮いていた。そして……

男たち……。地球人？ 見た目は自分らと変わらない。おそらく地球人なのだろうが

変な物を着ている。そうだ、資料にあった。東洋の「僧」の格好。黄色い布きれを体に巻き付けている。頭髮は剃り上げてある。

一、二……五人。ほとんど同じ背格好をした中肉中背の五人の男。ルキ口は首をまわし、今いる場所を確認する。広い道路が交わっている地点。そこにゾ・ヴィムは落ちたのだ。さきほどに見た、一番高いビルが多い地点。その辺りだ。落下前に、画面に映っていた場所と変わりはない。あの後に、ゾ・ヴィムの位置を怪しげな技術で動かしてはいないという事だ。今いる位置の確認は、ここから逃走する時に役に立つ。

五人全員の体が宙に浮き、二人と三人、右と左とに別れた。

ルキ口は、一緒に重力の縄に捕縛された道連れを見る。彼なら、発砲しかねない。それをしないのは何故……納得した。彼の頭上、銃が浮いていた。それは、ゆっくりと、ゆっくりと高度を増していった。そして、銃は小さくなり、見えなくなった。

二つに別れたその中央、遙か向こうから、一人の、やはり黄色い布を体にまいている姿が近づいてきた。宙に浮いている。さらに近づいてくる。老人であった。ルキ口たちのすぐそばまで来て、静止した。ルキ口と老人はしばらくみつめあった。視線をそらしたのは老人のほうだった。正確には、続いて男のほう、カイに視線をやった、というだけだが。

老人は口を開く。拍子抜けするほどにカン高い声だった。

「いつかやってくるとは思ってはいたが、まさか、一緒に来ようとはなあ」

「わたし達を知っているのですか」

「知らんよ……おまえさんたち個人はな」

「どういう事だ」

カイが問う。

「さて」と老人はとぼけてみせる。

「わたしは敵じゃありません。……ただ、すべてを知りたくて来たのです」

「それはいい。知りに来た、か。それはいい」

ルキ口の台詞に老人は笑った。いつまでも笑っていた。

2

ソシテスベテガアツマリ。ソシテスベテハウゴキダス。

ナンノタメニ……。ソレハ……

「元帥。……元帥代理……」

足音。声。闇が光へと変わる音。扉の開く音。

踵を合わせる音。空気が揺れる音。

3

薄暗い部屋だった。だが、それ以上に薄暗く、しかも蒸し暑いゾ・
グイムの中にずっといたのである。それにくらべれば、とても不快
とは云えなかった。

「その地で、自分の身に何が起きるのか」。そんな事は思っても
みなかった。

ルキ口は一人きりだ。二人は引き離され、それぞれ独房と思われる
部屋に入れられた。

地球の建築物に付き物の、穴に透明板を取り付けたような窓は、
どこにもない。牢獄だからではないようだ。彼らの居住空間は、ど
うやらすべて地下にあるらしい。防御幕のドームだけでなく、地面
と地下との狭間には厚さ数メートルにも及ぶ特殊な金属が張られて
いる。ここは、ほぼ完璧なシエルターと化していた。地球が天変地
異で滅ぶとしても、一番最後に滅ぶのはここだろう、と長老と呼ば
れていたあの老人が云っていた。

もちろん尋問はされた。だが、拷問はされなかった。おおまかに
は、ルキ口たちがどういう存在なのかわかっていているようであり、さ
ほど興味もなかったらしい。ルキ口は逆に質問を交えもした。だが、
ルキ口たち個人をとってみると、謎の侵入者であるわけで、いくら
ルキ口がその潜入の目的を話しても、簡単に教えるは貰えなかった。
「なら、どうしてわたし達が入って来るのを拒まなかったのですか」
ルキ口の質問も、長老には笑いの対象でしかなかった。実際、笑っ

てばかりいる老人だった。

まるでからかわれているかのよう。

ただ、一つ、どうにも気になる台詞があった。

「来るのは分かっていた。だが、おまえさん達かは知らないし、何かを教えるべきかどうかはまた別問題なんだよ。まあ、教えたものかどうかは彼らが考えるだろ」

「何ですか、彼らとは」

「彼ら、さ。あわせるかどうかは、今から考える」

その後、一人の女に案内され、ルキ口たちは体の自由は相変わらず奪われたまま、宙を飛び、地下都市の中を案内された。そして、そのまま独房へと入れられた。犯罪者として捕らえたというわけでもないのなら、独房に閉じ込める必要もないのだろうが、別にルキ口にはまったく文句はなかった。他の、一般の部屋も、粗末さではそれほどかわらなかったのだ。娯楽設備がまったく無いどころか、生活に必要なものも原始的な物ばかりだった。逃げられては困る人物を安全に移動させるためだけに、反重力装置を使用したらしい。

ルキ口は隅にしゃがみ、両膝に顎をのせ、思考していた。

ここに来てはみたものの、疑問はますます膨らんだ。何故、レイ・ウーズがここにあるのか。彼らは何者なのだろう。

都市の広さに比べて、実際にここにいる人間は少ないようだ。ほとんど姿をみかけなかった。彼らはここに仕方なくいる。よそから来て、何かのためにいる。ここにある何かを守るために、最低限の人数で。……いろいろな考えがひらめくが、ただの空想で、確たるものはやはり教えてもらわねば分かりそうもない。

彼にあつてみるといい……。教えたものかどうかは彼らが考える

……

彼らとは特殊な階級の人間なのだろうか。それとも、ある具象的な何かをさして……

足音が響いてきた。静かに歩いているつもりなのだろうが、よく響いた。

足音が止まる。この部屋の前だ。誰か立っている。

「おい」

知っている声。ルキ口は慌てて立ち上がり、扉に近づく。

扉が開く。カイの姿がそこにあった。カイは仁王立ち。扉や壁に手を触れた様子もない。何秒もの遅れて開くはずもないし、扉は何に反応して開いたのだろう。独房なのに、内側からだけ反応すると云うのも変な話だ。ルキ口の疑問は、もちろんカイにもわかる。

「自分で見ろ。そういう事だろう。……彼に会ってみろ、と」
「彼に……」

通路へ出る。暗い。壁や床がぼんやりと発光している。唯一の光源だ。足下をみる。自分の足が真っ黒な影として見えるだけで、足の細かい様子までは全く分からない。

ルキ口の体だけに再びあの奇妙な浮遊感が訪れた。ルキ口は宙に浮き、進み始めた。

カイは別段表情も変えず、少女の後を追ひ、歩き出す。

4

さて。

来るぞ。

どんな者か。

もう知っておる。

ドットで捉えたデータではないぞ。

我らの内に入れてみた感覚よ。

長年の間に、何がどうなったか。

我々の歴史の終結を果たしてつけてくれるのか。

うむ。

だがな。

だがなんだ。

ちよつと待て。

あれが近づいて来る。

確かにあれの反応が感じられる。

一機、いや二機。だが、なぜあちらにも。

わしは、どちらかと云うと、こちらのほうが楽しみだったわ。さて。

来るぞ……

来る……

く……

………

5

壁はあいかわらずほのかに光ってはいるが、弱く、暗闇と変わらない。自分だけふわふわと宙に浮いているなんて、どうもみつともない気がするが、後ろの足音の主の顔をうかがい知る事もできないほどの、それは暗さだった。

「どこへ連れて行くんだろう」

囁くような、ほとんど呼気とかわらないほどの声の大きさで、ルキ口は思いを口にする。

明かりが見えてきた。そして、ひらけた場所へ出た。牢獄が終わったのだ。出口の左右に、男が一人ずつ立っていた。十字路。だが今までとはうってかわって、明るかった。照明も完全に動作していたし、壁の色も明るい感じた。何か別の建物に、あとから、いま通ってきた通路をくり抜いて作ったように思える。地下都市は、地上にあつたいろいろな建物の地階を利用しているのだろうか。そもそも、いつ出来たのだろうか。

「あの、ドアが勝手に……」

男はまだこちらを見てもいないと云うのに、ルキ口は云いわけがましい事を先に口にする。だが、相変わらず、男達は前方を見据えたままだ。

「云っただろう。出ていいから、扉は開いたんだ」

ルキ口は左へと曲がった。あいかわらず宙に浮いたままだ。

どこの惑星だったか……アロ・イーグでどの雲よりも遙かに高いところでの空中戦を思い出した。自分がリーアック隊のレクズの命を結果的に奪う事になってしまった戦いだ。

相手の兵器は地球の「カニ」に似た形状だった。エクシールより一回り大きい。

宇宙と呼んでも過言ではない高度。ルキロがエイジに聞いていた昔の地球のような、青い空、そして黒い宇宙空間が紫の細い線をさかいくつきりと別れている。やられていく敵や味方が、もの凄いくさで地上に引っ張られ始める。かなり重力の強力な星であり、落下を始めた瞬間、もうそれは真っ赤になっている。

！

ルキロは声にならない悲鳴をあげた。いきなり体が上昇し、天井に頭を強打したのだ。

「何をしている」

「いや、ちよつと……」

ルキロは疑問に思った。誰のつまらぬ悪戯だ、と考えたのだが、ここの主が果たしてそのような事をするものか。まさか……。自分は何を考えていた。そう。あの戦い。

反重力装置の故障だ。宇宙戦闘用エクシール、リユー・ヴェルグは、操縦席のすぐ真下にその反重力装置がある。被弾し破損した場合、まず爆発し、操縦者も死ぬ。その装置が故障した。さっきの体当たりで……。そして、重力に引き込まれ始めた。

「あ、熱いよ……助けて」

まだ幼さからやつと脱したばかりという容姿のルキロは、ことさらに背伸びしていたが、時が戻ったかのように……母親に助けを求める幼い娘のように、顔を歪めて泣き叫んだ。

誰かの機体が背中から抱き着いてきた。誰？ ツーの叫びが、それに答えてくれた。

「おい、馬鹿。何やってんだ、レクス」

レクス。背の小さな、嫌な中年男。子供子供と自分を小馬鹿にしていた男。何故？

温度が下がっていく。速度が落ちていく。

助けてくれた……レクスが……

レクスのリユー・ヴェルグが爆発した。背中を撃たれたのだ。遙か上方から。からみあい、落ちてゆくこの二機は、格好の餌食だったのだ。

爆発の振動に、ルキロは体を震わせた。続いて心ががたと震え始めた。

まだ、レクス機の機能は活動していた。二機は、ゆっくりと落下していった。

戦闘終了後、ルキロは雲のすぐ上で回収された。

タゲンも、ウェルも、誰も何も云わなかった。云えるわけがない。故障だったのだ。そして、ルキロの運命を救ったのは、レクスの命令を無視した行動だったのだ。ノウヤンの視線がルキロの心を貫いた。ノウヤンは口を閉ざしている。「あんたは、あたしの足ばかりじゃなく、レクスの命まで奪ったんだよ」……そう、ルキロは彼女にそう云って欲しかったのだ。責めて欲しかったのだ。ただ黙っているなんて……辛すぎる。

一瞬の回想だった。あの時ほど、重力が恐ろしいと思った事はない。戦友たちはみな、重力への感覚が麻痺している。そう、自分のその感覚は地球人に近い。

空へ……。もっと高く……

強く念じたあの気持ちを無意識に思い出していたのかも知れない。ために念じて見た。もっと高く上がれ、と。すると、天井が近くなった。

「降りろ」

重力の縄がたちまちにしてルキロの体を感じがらめにした。ル

キロは床に落ち、うまく着地できず、よろけた。

「この装置は、わたしの心に感応している」

カイは、興味なさそうに歩き続ける。相手が自分の知らない科学力を持っている事はもう分かっているのだ。

つまり……ルキロはさらに考える。ただまっすぐ進むだけならともかく、分岐点で自分は左に曲がった。あの扉を開けた時同様に誰かの意思が働いたためのなのか、それともなければ……自分は進むべきかを知っていた。自分は、ここを知っている。

知っているよ。おまえさんたち個人は知らないよ……

長老の言葉。

遺伝子の記憶……。遺伝子には脳など記憶にならないくらいの個人の記憶が詰まっている。当然である。親の、親の、とすべての記憶が……。脳すらも完全に忘却しきった記憶が完全な配列で記録されているのだから。

そう唱えた学者が、ルキロの星にはいた。

その記憶が、時折脳に送り返され、時折肉体に流れる。遺伝子は個人の記憶を学習する。配合により生まれた者は、二人分の遺伝子記憶を持つ。その遺伝子の学習が肉体に影響し、起こる現象の一つが「進化」である。

読み物としては面白い。ただ、感銘を受け、研究しようにも、人類の起源などの歴史はほとんどが政府管理のもので、学習する事ができないのだ。個人で研究する人間から直接話を聞いた事があるが、どうしても自分らの星では、何の先祖となる生物の化石も発見する事ができない。地球では、「猿」という生物に似たものが進化して現在の人間になったらしい。自分達は何なのだ。今のこの姿のまま、あの星の空気中にいきなりわいて出たのだろうか。自分達は、どれだけの事を秘密にされているのだろう。

目の前の、斜めになった二枚の扉が、それぞれ右上に左下に音もなくスライドする。

二人は進む。ルキ口はあれからはずっと床の上を歩いていた。自分の体が宙に浮くのはどうも気持ちが悪い。アロ・イーグなどに乗り、浮いている時も、自分の体重は席に押しつけられていた。操縦席中には重力が働いていた。ここに来て初めて無重力を自身で感じたわけで、まだ慣れていない。気持ちが悪い。

入った先は、部屋と呼ぶのがためらわれるほどの巨大な空間だった。屋根が遙か上に見える。白い明かりが明滅している。何かの作業をする場所だったらしい。錆び付いているが、大小様々な機械の類を目にする事ができた。

錆びた鉄の匂い。

もう宙に浮いているわけではないが、ルキ口は自分の勘を頼りに進んでいた。自分が何かを知っているのなら、「それ」に会う事を念じながら、自分の意志で進んでいけば、きつとたどり着くはず。そううまくいかなくても、何かしらの導きはあるだろう。ここを出て、それに会うための許可は出ているのだから。

突き当たる。また扉だ。ただ、今度は、部屋に負けぬくらいのとてつもない大きさの扉だった。二人が立つと、その扉は左右に開いた。

また同じような空間がそこにある。ただ、今度は殺風景なものである。

扉が閉まる。ふわりと浮き上がる感覚。またか。いや、違う。この空間が動いているのだ。巨大な昇降機のような。なるほど、とルキ口は納得する。あの錆びた機械から分かる通り、ここは何かを作る工場だったのだ。地上から見た光景を頭に思い浮かべる。ビルの隣、あのひらべったい建物の下だろうか、と。

停止した。

カイは表示板を探した。地球の数字を表す文字は学んだ。表示板があれば、全何回か、いまどの辺りか、などが分かる。それらしき物はみあたらなかった。

扉は開いた。

独房のあった通路ほどではないが、かなり薄暗い。その薄暗い明かりの中、ミイラと化した無数の死骸があった。長い長い時を経て室内に溜められてきた腐臭が、一気に解放された。怨霊の群がルキ口を襲った。

ルキ口は口元をおさえ、駆けた。近く作業機械の陰に行き、屈む。床に四肢を着く。右手の横に髪の毛の長い死体。彼女は悲鳴をあげかけ、同時に食道をのぼってくる液体を一部気管に入れてしまい、激しくむせた。苦しくて、涙目になっている。むせながらも、吐いた。

このような時に初めて気がついたのだが、とてつもなく空腹な状態だった。激しい嘔吐感に襲われながらも、出てくるのは胃液だけだった。口の中に残った胃液の嫌な味を唾で流してしまいたかったが、唾が全然出てこなかった。

自分は色々な障害を乗り越えて、強く成長したと思っていた。だが、この星に来て、それらの気持ちはすべて覆された。自分は弱い強くなっていたのは、あくまでも、ただ戦争時に常に存在する事物に対してだけだった。ただの敵の死体、味方の死体、そして自分自身を襲う「死」の運命。ただ、それらに関しての感覚が麻痺していただけたのだ。だが、今は、この周囲の死体が怖い。そして、それ以上に自分の死が怖い。「永遠の無」がとてつもなく怖い。……ここにありミイラとなった死体のような……あんな姿になりたくない。……死にたくない……

吐き気がおさまった後も、ルキ口は頭を抱え、狂ったように泣き叫んでいた。

狂気が空気を震わせ、自分へと跳ね返る。より錯乱していく。だが、泣き続けると涙も枯渇するように、ルキ口は体中の狂気を放出し尽くしてしまった。今度は静寂が訪れる。「克服」したわけではなかった。弱いままだ。弱いからこそ、それが萎えてしまった。

「そっか……わたしは、こんなに弱いんだ……」

自分を納得させるようにわざわざ思いを口にした。

「そっだな」後ろにカイが立っていた。「行くぞ」

カイは歩き出す。

「行こう」

ルキ口は立ち上がった。

いくつか扉はあったが、ルキ口は真っ直ぐ進み、突き当たりの扉の前に立った。開く。狭く長い部屋だった。薄く盛り上がったガラスに覆われた箱が、部屋の端までびっしりと並んでいる。

中をのぞき込む。人間がいた。人間が立ったまま、カプセルに入っている。そのカプセルが背中合わせに二つ置かれ、それが長い部屋の端から端まで続いているのだった。カプセルの数は五十ほどはあろうか。男と女が交互に並んでいる。どれも、ルキ口の感覚では美しかった。とくに女のほうなど、自分など比較の対象にするのもおこがましいと思えてくるほどの美人だった。色が白い。生きているのか死んでいるのかはわからない。

植物の種のように保存されて目覚めの時、または生誕の時を待っているのか。だが、もう設備は壊れているらしく、彼らが活動を開始する事はあるまい。とはいえ、今にも目を見開き、動きだしそうな生々しさではある。

ただ、この色の白さ……地球人のものだろうか……

「おれの顔を見るな」

「ごめん」

ルキ口はもう、カイにもカプセルの中の人間にも目をくれず、まっすぐ歩き続けた。突き当たる。そして、次の部屋への扉が開き、進む。扉が閉まり始める。

カイには珍しい事だが、何か気になり、振り向いた。

彼らが立っていた。カプセルから抜け出していた。全員、こちらを見ていた。表情のない顔で。ただ、立っていた。

扉は完全に閉まった。

「どうしたの」

何か激しい呼吸を聞き、ルキ口は疑問に思って訊ねた。

「扉が閉まる直前、今のカプセルから抜け出たやつらがこちらを見

ていた」

「見間違いでしょう。誰も立ってなんかかったよ。もう一度、開けてみようか」

「いや。いい」

みつともないことだが、確かに見間違いだろう。そんな詰まらぬ事はどうでもいい。カイは歩き出す。

「あのさ……何を云ってるのかって思っても知れないけど、へたな自尊心は、今この場に全部捨てておこう。わたしも今、経験して思った事だけ……自分を弱く無価値なゴミくずのような人間だと思つて、この先のぞまないと、とんでもない事になるかも知れないよ」
「無意味な問題にいちいち心を動かし、惑わされ、まぬけな暴走をするお前達や、地球人などに云われる筋合いの事じゃないな」

何も無いこの部屋を抜けると、正面には壁、狭い通路が左右に走っている。

「左だよ」

もうルキ口は自分の直感を信じている。

左右に扉がある。

「ここじゃない」

また扉がある。どこまでつづく通路なのか、この薄暗がりではまったく確認できない。

「ここも違う」

次。右側に扉があった。真っ赤に塗られた扉であった。何かプレートに書いてあるが、二人には分からない。だが、ルキ口は心の中で頷いた。

「ここだ」

ルキ口は扉に手を触れる。開く。

青い光が部屋を照らしている。さほど広くないその部屋の中、床から無数の管が人の腰ほどの高さまで突き出ている。よく見ると管ではなく、さきほどのカプセル同様に何らかの物が収納されているようだ。植物の蔦を連想させるコードで、それぞれが繋がっている。

何かが上に載っている。半球状のケースの中に、何かがある。

カイは、水の中を泡がのぼる音を聞いた。ルキロも、水の中を泡がのぼる音を聞いた。そして、その中を見、あついに来たのだな、という実感を持ったのである。

半球状の中には、脳があつた。羊水の中の赤子のように、脳が水の中に浮いていた。部屋の青い光に照らされていた。その、脳を載せた柱がさして広くもない部屋の中をみつしりと埋め尽くしていた。

柱を結ぶ蔦のようなコードが音を立てた。動いているのだ。それらのコードはうねり、集まり、束になった。そして「ヘビ」が鎌首をもたげるように、しゅるりと音を立てて浮かび上がった。二人は用心した。ルキロも、「この部屋なのだ」という実感こそあれ、ここで何が起るのかは全く分からない。

だが、その用心は無駄になった。少なくとも一人には。よけきれぬほどの速度、いや目で追う事すら不可能なほどの速度で、それは襲いかかってきたのだ。

鈍い音がした。より集まったコードの束は、鋭い先端を作り、その赤子の拳大ほどもある先端は、容赦なくルキロの頭蓋骨を砕き、貫き、突き抜けていた。

ルキロの動きがとまった。力が抜けたように、腕がだらりと下がる。硬直した、そのコードが、ルキロの体を支えていた。そのコードの先端にカイは目をやった。赤と灰色、ピンク色の、どろりとした粘液状の液体がこびりついている。ルキロの頭部から伝わり、赤い液体が一滴、また一滴と先端から床にこぼれおちる。

「死んだか」

カイが誰にともなく云う。

「当然だ。こんな物で、頭をぶちぬかれたのだから。……結局、何をしに来たのだ。死ぬためか。ゴミくずのように思えた。そうすれば、死ぬ運命への恐怖も少しはやわらぐと考えたのか。だが、それは、お前だけが思っておけばよい問題だったな。だいたい……」

いつになく饒舌になっている自分に……いつまでも喋り終えぬ自分に腹が立って仕方がない。この胸くその悪い気分は何なのだ。くそつたれ。

6

「助かる可能性は……そうだな……なんとも、云えないね」

医者はそう云った。

目の前で、弟のタクが寝ている。

あの赤銅色の、謎の機体。それを狙ったギ・グルーグがいた。だが、攻撃は跳ね返され、それは反撃に転じた。レーザー砲の類だろうか。やや離れた場所に車をとめていたエイジは、それでも、その攻撃に、光に包まれた感覚を受け、全ての感覚が麻痺し……しばらく呆然としていた。

車から降りて、戦いの様子を見ていたタクは……まだ小さなタクは、すさまじい風に吹き飛ばされていた。無数の砂が体に皮膚を食い破り、気味の悪い痕になっていた。エイジはぐったりしているタクを抱き上げ、車に乗せた。

圧倒的な強さを示した赤銅色の謎の機体は、いきなり体から煙を吹き出しはじめ、ゆっくりとした飛行で、もと来た場所へと戻っていた。

エイジの網膜には、その機体の姿はしっかりと焼き付いていた。絶対に忘れる事はない。だが、まずは医者だ。エイジは来た道を引き返し始めた。

体に食い込んでいた砂は、すべて吸い出した。怪我に対しての応急処置はすべてすませた。だが、体に入り込んだ様々な菌が問題だった。

「破傷風ですか」

「それだけならまだいいよ。……放射能が……」

「放射能」

「あとこの辺まで来れば、まあ放射能に直接つて事はないけれど、それらの影響や、他の大気汚染なんかもかなりなものでね。弱っている、しかもよその空気に慣れた人間には耐えられないかも。……と云つて、この辺に大きな病院はないし。長く車に揺られるのなんて、こんな状態では絶対に駄目だ……昔の医学ならば、簡単に治せただろうけど……」

……を犠牲にした事により、我々は心を手にいれたのです。科学の進歩と人類の進歩は同義ではないのです。なぜならば、進歩、そして進化とは、魂がともなわねばならないからなのです。確かに、人に対する善なる行いから、技術が進歩していく事もあるのでしょう。尊くないとは、思いません。だけれども、人の心や命と引き替えにしているものではないのです。そのために、一人でも救う事が出来ないのならば、もうそれは、価値のないものなのです。進歩は、一人残らず、万人へ幸福をもたらすものであるべきなのです。すなわち、それは、心以外にはありえないのです。

みなさん、神に祈りましょう。

エイジは教会で何を話しているのか、神父が何をしているのかに興味を持った時期がある。町へ降りた時に、ふらりとそこへ向かった事がある。もう五年ほど前になる。

中に入るまでもなく、シスターが外で人々の前で話していた。エイジはそれをつまらなそうに聞いていた。だが、後々思いだし、もっともだと考えていた。だが……

シスター……。あんたの云う通りなら、心つてやつのほうこそいいじゃないか。……おれには、今……

医学や科学を捨てて、心でタクを救えるのかよ。

あんたの云つてた事なんて、何の役にも立たねえよ！

タクは、ベッドに縛り付けられた。まだ眠っているが、時々苦しそうな顔をする。起きた時に、もっと苦しい思いをするだろう。そして、暴れ出すだろう。

「強力な薬を使うからね。……悪くすれば、髪の毛が全部抜け落ちるかも知れない」

「苦しくて暴れないように、ですか。かわいそうじゃないですか。苦しいんだから、暴れるくらいなら……」

「いや、抜け出して、空気の悪い外へ出ないようにだ。そして、激しい喉の乾きを覚えるはずだから、それで喉をかきむしったりしないように」

エイジは力無く頷く。

「なんで、こんなとこまで来たんだっけ……。誰のために。そうだった。……。いや……。エイジは苦笑し、首を横に何度も振った。」

7

戦艦ゴ・スウィッグ、船尾のの居住区画、ある一室。

異端者と呼ばれていた男の一人、トキ・ワ・キーレンが射殺された。

今、数人の男たちが冷静に死体を見下ろしている。

死体の胸と腹との二箇所、大きな風穴があいている。ライスカイスの中では、ひとときわ表情の豊かな男であったが、今転がっているこの死体の顔は無表情で、何を読みとる事もできなかった。ただ、目を開き、天井を見上げている。半開きにした口から、左頬を伝い、赤い血が床に落ちる。

敵と内通しているらしい。そのような情報を手に入れ、諜報部が独自に動き出した。銃を突き付けると、奇声を発し、刃物を片手に飛びかかってきたため、やむなく射殺した。

カイは静寂の中、ただ一人きりとなった。

青いほのかな光に照らされ、幾多の脳に囲まれている。部屋は暗く、数歩先はもうはつきりもしない。壁自体がはっする小さな光が、この部屋の狭さを教えてくれる。

目の前に、薄明かりに照らされる少女の死体がある。ただの肉塊だ。そう思いながらも、目をそらす事ができない。

？。……今のは見間違いだろうか。少女の口が、かすかに動いたような気がする。……まただ……。見間違いではない。恐怖と驚愕に見開かれていたような少女のその目が、生氣を取り戻したように、しかし、ややうつろな感じで、前方を見つめていた。

また口が小さく開く。生きている……。これは……。超科学……。ルキ口の右側頭部を貫いたコードは、そのまま左側頭部から飛び出していた。カイはその飛び出た部分を左手で掴み、右手でルキ口の頭を押さえ、一気にコードを引っ張った。

「おれは……」

なにかを呟きかける。いや、その先は云ってはならない。認めてはならない……

カイはつかんだその先端を、自分の頭に力一杯に突き立てた。血が飛んだ。

そこは宇宙であつた。どこまでも続く空間に、恒星が明滅している。宇宙空間で星が瞬くと云うのも奇妙な話だが、少なくとも彼にはそこは宇宙空間に感じられた。

どこに視線をやっても自分の姿はなかった。自分の体を確認する事ができなかった。ただ、自分はここにいる、という思いは強烈なものとして、そこにあつた。自分は確実に存在している。水に溶けてしまったかのような感覚。ゆらゆらと、ただし確固たる自らの意志を持って、カイは進んだ。カイには分かっていた。いきなりこの世界につれて来られた少女と違い、自分からここに入ってきたのだから。

「誰か……いるの？」

幼い声。だが、聞き覚えのある声。さきほどの少女の声だ。もつとも、彼女の思念を勝手に「声」として捉えているだけだろうが。
「ああ。いる」

カイは答えた。少女には、どんな「声」として届くのだろう。精神の世界において、人は赤子から老人までのすべてを持つている。だが、時と感覚を超越したその世界において、人の持つ、本人の望む「個」はただ一つ。彼女の本質は「幼い」のだ。この世界では、それは滅ぶまで変わる事はない。キーレンが楽しそうに話していた事を思い出す。

「怖い……」

少女の精神が、いつの間にかすぐそばに感じられた。

「本来の精神の居場所ではないからな。おぞましい連中の生み出した世界なのだから」

「云いおるわ……」

それは、老人の「声」であつた。

「おまえは呼んではおらんのだがな」

また「声」が加わる。

「扉を開けたではないか」

「そうか。うつかりしていたわ。耄碌してな」

「くだらない戯れ言をおっしゃいます。……耄碌など、してみたいものですわ」

女の「声」が加わった。その「声」からはどのような年齢も想像する事ができなかった。

「ともかく、こやつはどうしようか」

また一つ「声」。

「殺してしまうか」

また一つ。

時間にして、ほんの一瞬なのかも知れない。長い時間が過ぎていくのかも知れない。とにかく、様々な「思考」「声」が一気にこの

空間内にあらわれる。

「それが慈悲かも知れぬが。まあやめておこう。……出ていくな、今の内だぞ」

「おれにも知る権利はあるだろう」

「お前さんたち、魂の脆弱な者どもに、こういう領域に入られても迷惑なのだなあ。震えている子供がおると、繊細で壊れやすいわしらまで影響を受けてしまう」

「それが、望みでもあるのだが、出来るなら、もっと穏やかにやつてもらいたいものだ」

「おれは、恐怖などは感じない」

「そうかな。そう思うように作られているだけだからな」

「どんな存在だろうと、狂っているわけではなし、生物が恐怖を感じぬわけがなからう」

「ウイルスに抵抗する、抗体の正体を知っておるのか？」

「人の科学の源を知っておるのか？」

「人がなぜ笑うか」

「なぜ生きるか」

「そしてなぜ殺すか」

「お前は知るか？」

「お前は知るか？」

「くだらん座興だ。……何なのだ？　それが、恐怖だとも云いたいのか？」

「わかつているじゃないか」

光の明滅が激しくなる。

まるで笑っているかのように。

「あなたたちは、一体……」

少女の「声」。ルキ口の思考が、この暗黒の羊水内を駈ける。

「聞きたいか」

「我々は」

「科学の頂点を極めた者」

「それ故、大罪人としての罰を受けた……いや、みずからにその運命をかした者」

「それぞれに、医療や工学、殺傷兵器、様々な物を研究していた者」

「地球規模の、最後の大戦を起こした者」

「地球を汚した者」

「その元凶となった者」

「だが、我々は正しい。間違っではない。人類は、幸せをつかんだのだ」

「すべての悪魔は滅び、真の、地球にとって平和な時代が来た」

「地球人類にとっても然りである」

「だが、人々は、このような惑星にした我々を許さなかった……」
ルキロもカイも、ただ啞然としていた。

「それは大戦時、」

「ときの主力は人造生物である兵士たち」

「強靱な生命力を持ち、恐怖心は脳の奥へとしまい込まれ、」

「勇猛、かつ、残虐な行為を平然となす」

「ただただ、恨みを分散せんと、人間に利用されていただけの存在」

「人形。……ただの道具である」

「そんなくだらぬ、そして哀れな道具にすらも、人々は……」

「人形は、さらに感情を押さえられ、ノウアと呼ばれる箱に押し込まれ、宇宙へと……」

「我々は脳だけとなり、ここで脳が朽ちるまで生きねばならぬ罰を受けている」

「脳には勿論寿命があるが、ここではその時間の流れがまちまちでなあ。それが悩みで」

「同じ処分を受けた仲間、二万人ほどいた。いまでは、この部屋の三十六人だけだ」

「いや、あいつが今朽ちたぞ」

「地核研究をしていたヤツだ。三十五人になったぞ」

「みんな、祈れ！」

（略）

「脳を取り出された我々の体」

「残った我々の体」

「二万の虚ろな肉体」

「政府と教会は……」

「それは罰であり、疲弊した国民の感情をそらす措置」

地球にそんな歴史があっただろうか。地球の世界史はルキロもざつと学んだが、そのような事実は聞いた事がない。……地球も、誰かに歴史を操られているのか……

「さて、それは……」

「機械脳」

キカイノウ！

「頭蓋に機械脳を入れられ、生ける屍と化した罪人たちの肉体は、」

「罪人たちの肉体は、」

「交配用の捕虜、奴隷女数十万人と共に、」

「さきの人形同様に、宇宙へ、」

「生存環境の劣悪と思われる星系へ、」

「さて、その罪人の子孫たちは、今頃、どこでどうしているのやら星が明滅した。」

「声」は聞こえないが、星は激しく明滅を繰り返していた。

脆弱を破ったのは、カイの「声」だった。カイの叫びだった。

宇宙が縮小した。星々の残像が中心へと線を描く。巨大な星が、光を遙かに凌駕する速度でとび、軌跡を描き、中心へと小さくなつていく。

浮遊していたカイの、精神の肉体を何者かが浸食していく。何かが入り込んでくる。悪意の牙を持った無数の粒子が体に食らいつき、浸透していく。めり込んでくる。食い破って入ってくる。突き破り飛び出した物が、戻り、再び突き破る。

神……

形は何も見えない。ただ、宇宙と、揺れ動く星があるのみ。

神の声、悪魔……哄笑、
笑っている。笑っている……

神の大きな手に握られ、凝縮された精神が、神の手が離れると同
時に砕けた。

四散した。

そしてすべてが……

幻覚だったのだろうか。ルキ口は目が覚めた。床に倒れていた。
首をぶるぶると横に振る。視線が定まらない。

青い光がうつすらと部屋を、自分の体を照らしている。

頭に手を伸ばす。なんともない。ただ頭の両側に、鈍い痛みが感
じられた。

男の呻き声。隣で男が、ルキ口同様に床に倒れ、赤子のように丸
くなり、震えていた。歯をガチガチとならしていた。生来の顔の青
白さははずなのだが、ルキ口はなにかそれに異質なものが交じって
いるように思った。

ルキ口はゆっくりと、よろめきながら立ち上がった。

部屋には無数の柱が立っている。破片が落ちている。ガラスの欠
片。すべての……

そう、柱の上に、水に浮いた脳があった。そのガラスが今はすべ
て砕け散っていた。

最終章 答えは風の中に

1

微かな振動。微かな音。何の音だろう。

揺れ方が激しくなってきた。振動が床から足へ、そして心臓を震わせた。不安と恐れとを包んだ精神が、肉体とともに揺さぶられる。ルキ口の意識は完全に覚醒していた。全ての感覚が針のように鋭く研ぎ澄まされていた。

何故なら、彼女は全てを理解したから。

ルキ口は視線を落とした。自分の足下に、男が転がっている。寝転んだまま、幼児のように膝を抱えている。震え、怯えている。声をかけたが、返事はなかった。何やら意味の分からない言葉を呪文のように呟いているだけだった。

「悪いけど、わたしは……もう、行くよ」

ルキ口は躊躇せず、部屋を出た。全力で走り出す。

全てに決着をつけるために。

東の空を見る。昇り始めた太陽が、赤黒い無気味な色合いに輝いている。巨大な太陽は、ビルの隙間からルキ口を照らし出した。無数の亀裂の入った地面に、淡く長大な少女の影を作り出した。鳥のように舞う無数の影が、少女の影にまわりつくように交差する。

アロ・イーグ、ゾ・ヴィムがビルの谷間を縫い、飛んでいる。手にした銃から青や黄色の光が放たれる都度、爆音と共に地が裂け、建物が吹き飛び、崩れた。

さらに上空へと視線を向ける。両軍の輸送艦であるガ・ガーヌ、キュー・ジ・ヴィの姿が都市へ幾多の影を落としている。そして、それらの遙か上空、雲の隙間からそのほんの一部分をのぞかせているのは、白銀の超大型戦闘艦テオ・リユー・フィルクだ。

何故ここを攻撃している？

ルキ口はその自問に即座に自答する事で、彼らの目的への理解を確実にした。

何故ここは彼らの進入を許している？

ルキ口はその自問に自答する事で、この人間たちの立場を理解した。

長老の言葉が浮かぶ。「たとえ天変地異で地球が減びても、ここは一番最後になるだろう」あの薄黄色の防御幕と、プロトタイプ・ウーズイであるレイ・ウーズ……都市を護るそれらの存在が、まったく機能していない。

この都市の人間は牢獄の番人。近代の歴史を守護する者。それを今、自ら放棄しようとしている。その考えは理解する事が出来た。だが、ルキ口自身にとっては、番人のその決定ははなはだ本意なものだった。このままではいけない。これを、阻止しなくてはならない。何故ならば、ここには全てがある。ここには鍵がある。お互いがこれからも悠久に流れていくであろう歴史を築いていくにあたり、障害になるだけかも知れない。だが、乗り越えるだけの価値が、それにはある。

宇宙は、地球のこの都市がある事を知らなければならないのではないか。

ルキ口は駆けつけた。爆音の中を、爆煙の中を走った。

低空を飛行するゾ・ヴィムのソニックブームに、引きちぎられそうな激痛が体を襲う。両手で鼓膜を守りながら、吹き飛ばされそうになるのをこらえた。一呼吸すらつかず、またすぐに走り出す。

間に合って……。ルキ口は念じた。

この都市の中枢は地下にある。エクシールなどの攻撃では陥落させる事は出来ないだろう。だが、もし戦艦が主砲で狙ったら……。軍がなりふり構わない行動に出たら……。

背中から爆風を浴び、軽いその体は宙に舞い上がった。

地に落ちたルキ口は受け身を取り、転がり、立ち上がる。振り返りもせず、駆け続けた。

また、近くで砲撃による爆発が起きた。間違い無い。ルキ口を狙っている。

それでもルキ口は、目的地へ向かう最短距離のコースを駆け続ける。

自分が彼等に狙われている事など、知っている。今さら驚く必要もない。

2

胸部の扉が開くと同時に、乾燥した、黴臭い空気が噴き出した。

レイ・ウーズの胸部の高さにある金属板の足場に立ち、手で開けたばかりの操縦席をのぞき込んだ。レイ・ウーズには、人間が乗っていた。レバーを両手でしっかりと握りしめている。だが、その人間は、すでに半ば白骨化、半ばミイラ化していた。骨に、乾燥した真っ黒な肉皮がうつすらとこびりついているだけだった。男か女かも想像つかない。果たしてどんな身分の人間だったのだろうか。

様々な計器が無音で、ただ点滅だけを繰り返している。待機状態のようだ。ルキ口は手を伸ばし、エクシユールを操作する時の要領で、操縦レバー付近をまさぐる。

空調機が作動し始めた。座っていた死体は、見る見るうちに崩れ、驚く余裕すらなかった。塵のように細かな砂となり、舞い上がり、天井に吸い込まれていく。服だけが残った。ルキ口は服を横に払いのけ、操縦席に入り込んだ。

操縦系の確認。エクシユールと同じ要領でいけそうだ。

先の逃走劇で、「内部のコンピュータが、誘導操縦により動いているに違いない」と、ライスカイスの青年は云った。その通り、自動操縦だった。キーを叩き、それを解除する。

開いた胸部扉の向こう、前方に壁が見える。赤く大きな文字で「B 3」と書いてある。

スイッチを入れる。

左右から回り込むように丸みを帯びた金属板があらわれ、隙間な

く合わさる。計器の小さな光を残して、暗闇に包まれる。続いて、上下から同様に薄い金属板が閉じ合わさる。

切り取った球の一部を裏側から見ているかのような、大きな画面が頭上にある。それが前方に回転した。画像が映る。数瞬前まで肉眼で見えていた光景が映っていた。

前方の壁、シャッターに爆風による亀裂が入る。外からの攻撃だ。丁度いい、とばかりにルキロは微笑む。だが、それは、無理矢理に作り出したような笑みだった。無茶な戦いを前にして、強引に自分の精神を昂揚させようとしていた。

ペダルを踏み込むと、レイ・ウーズは歩き始めた。壁が近づいてくる。手を伸ばす。さきほどの攻撃により出来た隙間に手を伸ばした。両手で掴み、力任せに左右に広げた。厚さ十センチ以上はあるシャッターの亀裂が、紙切れでも引き裂くように軽々と開いていく。やはり……とんでもない力を持っている……

内部の人間の寿命を縮めるだけの兵器である。そう判断され、量産される事はなかった。だが、無意味な技術であったわけではない。その技術があればこそ、安価な量産機にも十分な性能が備わったのだから。量産型である次世代エクシール……それがさらに戦略別に分岐し、ジーン・ウーズイなど現行機へと発展していく。

レイ・ウーズは外へ出た。まだ、両軍の都市への攻撃は続いていた。ルキロは画面が映し出す空を見ていた。

心をたかぶらせると同時に、心を静めてもいた。これからの事を思い、指を組み、簡易的瞬間的な瞑想術を行う。呼吸を整える。

彼らは、このレイ・ウーズを捉えている事だろう。そして、この都市の産物、仲間を地獄へと叩き込んだこの機体に対しての命令を下すだろう。

動きがあった。

ゾ・ヴィムが、そしてアロ・イーグが、こちらに向かって飛んできた。ルキロは……レイ・ウーズは動かない。ゾ・ヴィムが、そしてアロ・イーグが、さらに近づいてくる。そして、構えていた銃を

撃つ。

ルキロは中央のレバーから右手を離し、右膝横のレバーに手をやった。レバーを前に倒した。レイ・ウーズの背中から白い炎が出た。デリオとエクシールの同時攻撃により、レイ・ウーズが立っていた地面、道路は蒸発し、シャッターは溶け大きな穴が空いた。だが、レイ・ウーズはそこにはいなかった。

空を飛んでいた。操縦席の中、自分の体重の数十倍もの衝撃を体に受け、ルキロは一瞬だけ気を失った。だが、その凄まじい振動、衝撃に、すぐに現に引き戻された。

レイ・ウーズは宙に静止している。

ゾ・ヴィムの五機編隊が上空から一斉射撃。当たったかどうか、彼らに確認をする時間はなかった。何故なら、その時すでに、五機のゾ・ヴィムは胴体を真つ二つに両断されていたのだ。レイ・ウーズは彼らの機体よりもさらに上にいた。右手に光る刀を持っていた。刀に細かい霧のような粒子がまとわりつき、それが黄色く輝く光を放っている。

ルキロの孤独な死闘が始まった。

群がってくる敵全てを、一撃で葬っていく。ルキロは邪魔する敵を切り伏せながら、ひたすら上を目指していた。上へ。あの雲の間……

ゴ・スウィング、シル・カル、すべての戦艦の主砲が、都市を狙っていた。

すでにそれぞれが一度、発砲していた。それにより、地球人どもがこの都市に張ったやわな防御幕は破れたのだ。彼らはそう考えていた。たかが地球人どもの防御機構など、と。

主砲の冷却は完了し、エネルギーの充填が始まっていた。全艦が放つ次の砲撃で、この都市は完全に滅びるのだ。都市同様に滅びねばならない機体レイ・ウーズ、それが今死神となり、刀を振るい、次々とアロ・イーグとゾ・ヴィムを破壊しながら上昇してくる。空

中格闘戦のできるすべての機体がレイ・ウーズを阻止せんと立ちはだかつていた。

レイ・ウーズの背中から吹き出る炎が、エクシールやディオを遙かに凌駕すると思われる巨人の幻影を作り出す。その幻影の巨人が、次々と立ち向かう者を飲み込んでいく。

本来ならばあり得ない事である。シル・カルがレイ・ウーズに向け、主砲を放ったのだ。

レイ・ウーズの暗い操縦席内が、突然、カメラの捉えた強烈な明かりに照らされ、眩しいほどに明るくなった。赤い髪の毛、ルキロの目は歪み、口元は両端が釣り上がっていた。それは、眩しさ故ではなく、単に笑っていたのだ。ただの微笑なのか、それとも何らかの皮肉による苦笑なのかは分からない。ルキロ本人にすら分かっていないのだから。

ルキロは中央レバーの根本、右にある大きな赤いボタンに拳を叩き付けた。

ルキロ・エ・ルは逃亡者から、完全な反逆者になった。そして、標的の一つとして知らされているあの機体、プロトタイプ・ウーズイ。この一撃は、両方を始末する事ができる。プロトタイプはあの通りの性能だ、多少の犠牲はやむをえまい。

シル・カルの艦長の一人であるフギット・ザイ・ヤーは、そう判断し、そして主砲の発射を命じた。遙か上方のテオ・リユー・フィルク内にいるメルリカ元帥代理には制止されたのだが、彼はたかが小娘と馬鹿にし、命令を無視した。

エネルギーは十分に蓄えられてはいないが、たかがエクシール一機、どうとでもなる。そして、手柄をたてれば、申し開きなどどうとでもなる。

伸びる光はゾ・ヴィムやアロ・イーグを巻き込み、まっすぐにレ

イ・ウーズへと襲いかかる。レイ・ウーズの性能がたとえ優れていると、操縦者が優れていると、逃れるすべはない。「たかがエクシユール一機を主砲で攻撃しておいて、自慢げにほくそ笑んでいた」。フギット艦長は、後生そう云われていたかもしれない。そうならなかったのは、彼にとつて幸だったのか不幸だったのか分からない。何故なら彼から感想を聞く事は、もう永久に出来なかったから。

レイ・ウーズの背中から回っている大砲は、まっすぐシル・カルへと向けられていた。大砲の先端に光が収束しだした。そしてそれは、砲の口径を上回る巨大な毒蛇へと一瞬にして変貌を遂げた。鎌首をもたげ、不意にシル・カルという獲物に襲いかかった。そのうねるように伸びる巨大な光は、シル・カルの主砲が作り出すエネルギーの大きさを遙かに上回っていた。それぞれが、半ば物質化した光である。ぶつかりあい、押し合いになったが、それはほんの一瞬の事だった。全長一キロ弱もあるシル・カルの全体がレイ・ウーズの放った光に完全に飲み込まれていた。

（捕足）実際には、単純な押し合いが行われていたわけではない。地球に存在していたこのレイ・ウーズには、誰の常識をも撃ち破る科学兵器が多々搭載されていた。一見、戦艦の主砲がそのまま搭載されているように思えるこの兵器も、実はまったく異なる原理の物だった。ブラックホールのように激しい傾斜の重力空間を作り出し、その力で素粒子レベルへの攻撃、つまり空間そのものの破壊を行ったのだ。敵の打ち出した攻撃エネルギーの存在する空間そのものを砕きながら攻撃を行ったのである。視認出来るエネルギーの大小など関係なく、レイ・ウーズが勝つのはごく当然の理屈なのである。

火山の噴火のように、同時に数百、数千の火柱が立った。あまりの熱量、衝撃に、シル・カル内部の様々な機械が爆発したのだ。誘爆が誘爆を呼び、実にあっけなく、シル・カルは朽ちた。地上へと降下していく途中、大爆発が起きた。

ルキロは、ボタン一つで数千の命を闇に葬ったのだ。

鼻で笑い、また口元を歪めてみせる。それは演技であった。邪悪になりきろうとしていた。努めてそうしなければ、彼女の「純真」が耐えられずに砕けてしまう。

無意識のうちにしてしまう歯ぎしりをおさえているうちに、口元から血が流れた。口を手でおさえる。せき込む。手のひらを見ると、驚くほど多量の血がこびりついていた。

右手の、親指を抜かす四本の指で、顔の表面を左から右にすべらせる。四条の赤い線がルキロの顔にひかれた。血化粧……。自分への暗示。

炎上するシル・カル。徐々に小さくなっていく。砂漠の上へと落ち、最後の大爆発を起こした。砂の間欠泉が吹き上がり、続いて嵐のような強烈な風が届いてきた。

十機のゾ・ヴィムがレイ・ウーズを取り囲んでいる。

ルキロは応戦した。レイ・ウーズの能力を利用し、敵の後ろへ後ろへと回り込みながら、一機、また一機と首を飛ばしていく。

十数秒後、ゾ・ヴィムを七機ほどしとめたところで、ルキロはその声を聞いた。

「なんでそのまま逃げなかった。ルキロ」

アロ・イーグ……。そのすぐ後ろにもう二機が続く。

「ウエル？」

それと、タゲンとノウヤンか。

「投降しろ。……いや……逃げろ！ ルキロ」

ウエルは叫んだ。捕まれば、もうルキロの運命は決まっている。自分ごとくに変えられるわけがない。それならば、逃げてほしい。遠い辺境の惑星だが、死なれるよりは……いや、そうになったら自分もここに残ろう。

「ウエル、馬鹿を云ってんじゃねえ」

タゲンの叫び声。

「馬鹿なものか」

三機のゾ・ヴィムを相手にしているレイ・ウーズの動きは鈍っていた。

ウエル……。ルキロの心の中で、嬉しさと悲しさとが同時に爆発した。やっぱり……。わたしの……。てくれた……。でも……。駄目だよ、ウエル。……。どうして、今……。

レイ・ウーズの防御幕は、ゾ・ヴィムの銃撃程度の攻撃には有効だろうが、それは科学反応によりレーザーを拡散させるだけで、体当たりや刀などの攻撃には効果が無い。だから、ルキロはウエルの声に動揺しながらも、必死で戦っていた。レイ・ウーズに乗ってようと、油断をすれば死、という状況はいつもと変わりはないのだが……。動揺しているせいではなく……。レイ・ウーズ自体の動きが……。あきらかに鈍ってきていた。無茶をさせすぎたか……。それとも、さっきの大砲が……。レイ・ウーズをどう扱えばどうなるのか、それは彼女にはまったくの未知の領域だった。最後のゾ・ヴィムの首をねじ切ったその時、レイ・ウーズの四肢の装甲の隙間から白い煙が吹き出た。

「ルキロ、こんなところで一人で戦い続けていなくていい。はやく逃げるんだ」

「ウエル……。ごめん。いろいろと……。でも、わたしは……。ウエル？」

ウエルの声の様子がおかしい。

「どうした、ウエル」

タゲンも気づいたようだ。

「……。体が……。痺れる。……。首が……。痛い。頭が割れそうだ……。何だ、この声は？」

「ウエル、しつかり」

ルキロはうつろたえる。……。樹脂コンピュータ。ルキロにあの時の記憶が蘇る。エイジと車に乗っていた時。いきなり襲った頭痛。体の痺れ。あれは故障、暴走ではなかった。コンピュータの、もしくは、誰かの意志。裏切りを許さぬ、誰かの意志。

「おまえは何もかもを滅茶苦茶にする」

ノウヤンの鋭い叫び。アロ・イーグが刀を振り上げレイ・ウーズに斬りかかってきた。

「姉さん」

「そう呼ぶな。あたしが引導を渡してやるよ、ルキロ。どうせ、殺されるのなら、せめて……」

レイ・ウーズは防戦一方。アロ・イーグは出鱈目に斬りつけてくるだけで、鈍っているとはいえレイ・ウーズがそれをかわすのは造作もなかった。

もしかしたら、ノウヤンにも……いや、違う。ノウヤンは……

ルキロは叫んだ。

「聞いて、姉さん、タグザムティアは……」

「うるさい」

「ライスカイスと地球とは……」

「うるさいと云っている」

「大事な話なんだよ」

「お前を殺すほうが遥かに大事さ」

ルキロはせき込んだ。血を吐いた。意識が朦朧とする。

目を見開く。画面の中で、アロ・イーグが刀が振り下ろしていた。レイ・ウーズはその攻撃を避ける事が出来なかった。金属と金属がぶつかり合う。金属が金属を引き裂く音。火花が散る。爆発した……

アロ・イーグが……

ノウヤン機と、ルキロのレイ・ウーズとの間に、アロ・イーグがもう一機。

「ウエル！」

ルキロとノウヤン、そしてタゲンの声が同時に響く。ウエル機は、背中を……右肩から左の胴まで切り裂かれていた。火花が激しく散っている。爆風は操縦席内にも及び、ウエルの体にはいくつもの破片が突き刺さり、血を流していた。

「ウエル……なんで……なんでなの。……わたしなんかを……どう

して……」

「だって、許嫁だろう。……あの時、君だけがウーズィで出る事がなければ……君がずっと一緒だったなら、こんな事にはならなかったのに。させなかったのに……」

ルキ口は、ただ許嫁の名前を繰り返し叫ぶ事しか出来なかった。

「その声、は、泣いている、の、ルキ口？ 笑ってくれよ。ぼく、は、君の笑っているところが、とても好きだったんだから。君は、天使みたいに、笑うんだ。とても、かわいくて、好きだった。……本当の事を云うと、ぼくが両親に頼ん……」

再びウエルに乗るアロ・イーグを襲った爆発、それが二人の男女の異星での物語を終わらせる幕となった。

3

とめどなくあふれる涙に邪魔をされて、落ちていくアロ・イーグの姿がよく見えない。

「う、裏切り者をかばうからだ。あたしのせいじゃない」

ノウヤンは何かから逃れようと、必死に声を荒らげる。

ノウヤンの鼓膜を、そして心を、ぞつとするような不気味なうなり声が震わせる。それはルキ口の声だった。誰も聞いたことのない、ルキ口の奥底に潜む声だった。

火山の噴火のように煙をもうもつと出していたレイ・ウーズだったが、もうそれはおさまっている。赤銅色の機体が、ポツンと一機浮いていた。小さな……それは、アロ・イーグとさほど変わらぬ大ききだったが、この無数にいる敵、エクシール、ディオ、そして戦艦、その中であつて、とても卑小な存在に見えた。それが一瞬にして変貌した。再びあの悪魔の姿を、いや、それ以上の何かをたくわえ、さらに凄まじい怪物へと変化した。

熱気と怒気とに支配された空間の中で、ルキ口は獣のように吼えた。

巨大な……とてつもなく巨大な怪物が、両手をふりあげ、突っ込

んでくる。ノウヤンには、そう映った。レイ・ウーズがエクシールとはとても思えぬほどの激しい炎を燃やし噴出しながら、刀をふりあげ、向かって来たのだ。距離を測定レーダーのカウンターが、目で追えぬ速さで変化していく。化け物に飲み込まれる！ そんな幻想の中、ノウヤンの体は冷静に現実への対処をしていた。横なぎの一閃を、アロ・イーグは刀で受け止めていた。だがそのまま押される。出力が段違いだ。全くレイ・ウーズに抵抗する事が出来ない。レイ・ウーズは、アロ・イーグの体突き飛ばし、あらためて刀を振り下ろそうとした。タゲンのレ・アロ・イーグが間に入り、その刀を受けた。だが、レ・アロ・イーグの刀は叩き折られ、返す刃でその両腕を切断された。動揺を伝える電流が神経を流れる。それが脳に届いた時、すでにレ・アロ・イーグの首はなかった。

「タゲン、引きな」

ノウヤンは隊長に命令するように叫ぶ。胴体と脚部だけになったレ・アロ・イーグの横から、ノウヤンのアロ・イーグが飛び出した。銃を構えていた。ノウヤンが、銃を撃つ操作を行うよりも早く、レイ・ウーズの頭部にあるバルカン砲が火を噴いた。一秒間に数百と発射された細かい弾丸は、アロ・イーグの頭部を一瞬にして粉碎し、巨大隕石の雨に襲われた小さな衛星のように滅茶苦茶な形となった。エクシールの差だけではない……あの娘に、こんな潜在力があったとは……。ノウヤンは息を切らしていた。

レイ・ウーズの刀が振り上げられた。動きがとまる。ほんの数秒だが、ルキ口には、その数秒は、数時間に等しい時間といえた。様々な思い、考えが映像となり、消えていった。両者の間に一触即発の緊張感が高まっていく。寂寞を破ったのはノウヤンの声だった。耐えきれなかったのは、ノウヤンの方だった。

「何してる。……命を助けて、脚の借りを返そうってつもりかい。ふざけんじゃないよ」

ルキ口は抑揚のない声で応えた。

「そんな低次元の話は、どうでもいい」

切り掛かるレイ・ウーズの残像。レイ・ウーズは上昇した。ノウヤンのアロ・イーグは、両腕、両脚を落とされていた。背中に小さな爆発。ただの人を乗せた金属の箱となったアロ・イーグの残骸は、落下を始めた。そして、それを、タゲンの乗る首のないレ・アロ・イーグが二の腕だけで器用に受け止めた。

「操縦席は何ともないかい？ 隊長さん」

ノウヤンは力抜けたように呟く。サブモニターにタゲンの顔が映る。

「ああ。お前も……おい、ノウヤン、お前……」

ノウヤンの黒かった髪の毛は、すべて真っ白になっていた。

4

レクンはただ呆然としていた。隣の少女が訝し気な眼差しで見ている。

こんな事になるなんて……。ウエル……

通信兵であるレクンはウエルとルキコのやりとりをずっと聞いていた。

ウエルの言葉が蘇る。

「あの時、君だけがウーズィで出る事がなければ……君がずっと一緒だったなら、こんな事にはならなかった。させなかったのに……君だけがウーズィで出る事がなければ……」

レクンは自分の行為を思い出す。そして、悔やんだ。涙があふれ出す。

隣の通信兵の少女は、ますますふしんがり、仕事にならない。

仲を引き裂いてしまいたいという気持ちは強くあったが、あの事は、ちよつとした悪戯のつもりだった。大事になるとは思わなかった。大好きな人と、それを奪ってしまう嫌な娘とを引き離す事が出来ればどんなにかいいだろう、と考えていた。

それを実行する機会がおとずれた。あの日、幼なじみの整備士に

声をかけた。彼は担当を転々としていたが、最近では、ウエルヤルキ口のいるリーアック隊の整備もしていた。作戦が始まれば、小隊はいつも一緒だ。あの人、あんな娘といつも一緒だなんて耐えられない。許せない。どこがいいの、あんな娘。

5

グイツケ・ン・ボー艦長の視線は、シル・カル操舵室スクリーンに映った驚嘆すべき映像に釘付けになっていた。後々、自身にその運命が訪れなかった事に感謝するのだった。

ライスカイスの戦艦ゴ・スィッグの一隻が、数十ある副砲をすべで一点に発射したのだ。シル・カルの主砲を撃ち破る能力を、レイ・ウーズが有している事はすでに目にしている。だが、連射は出来まい。大型のジェネレーターを持っている戦艦だつて、そうなのだから。そう考へての攻撃だった。レイ・ウーズの姿は眩しい光に包まれた。跡形もなく消滅するはずだった。だが、その光の中から、レイ・ウーズは悠然とあらわれた。

無傷！　ゴ・スィッグへと近付いて行く。両手に掴んだ刀を振り上げ、ゴ・スィッグの装甲に突き立てた。怪物は刀を深々と刺したまま、一瞬にしてゴ・スィッグの上を通過した。そして、ゴ・スィッグは……

「巨大戦艦の副砲塔の一斉射撃をまともに受けてもなんともないほどの防御幕だと？……エクシールが……ありえん。そんな、馬鹿な。非現実的な」

「防げるとしても、どこからそのエネルギーは……」

「資料では、そこまでの力など……。プロトタイプが……」

「その後……あのシステムを完成させた……と云う事、か」メルリ

力は一人冷静に分析していた。「未完成、不完全、解析不能……結局我々はその技術は捨てたけども、こちらでは出来上がっていた」

6

刀を一振りするたび、ゾ・ヴィムの首が落ち、アロ・イーグの腕が飛ぶ。ある機体は胴を差し貫かれ、または一瞬にして機体を二分され、炎上しながら地獄へと落ちていく。

ルキ口の顔はやつれていた。顔だけではない。それなりにふくよかだった体つきも、不自然に肉が落ちてきていた。レイ・ウーズの乗ってからまだ十分と過ぎていないが、その間にルキ口の顔つきは、かなりの変貌を見せていた。目は赤く充血していたが、その光だけは変わらず、ぎらぎらと輝いていた。

ただ一人の人間が、ただ一機の機体が、すでに数千の個人の運命を変化させていた。だが……違う。そんな事を望んでいるのではない。まだ、自分の望むものは、何も変えていない。それは、まだ、上にいる。それだけを変えたいのだ。何故、邪魔をするのか。何もせずに、自分を行かせてほしい。それでも自分、レイ・ウーズへの攻撃の手は緩む事がない。ゾ・ヴィム、アロ・イーグの執拗な攻撃、追撃がレイ・ウーズを狙う。だが、それは小さな蝶々が、巣を張って待ち構えている毒蜘蛛に向かうのに似ていた。次々と搦めとられ、その羽ばたきを奪われていった。

レイ・ウーズは雲を抜けた。

テオ・リユー・フィルクの銀色の影が見えたが、それはすぐに、アロ・イーグの編隊にふさがれる。レイ・ウーズは刀を出鱈目に振り回しながら、その隙間を強引に突破した。

テオ・リユー・フィルクの副砲塔が、一斉にこちらを向く。それに気付いたルキ口はさらにレイ・ウーズを加速させる。機体の耐久度が分らない以上、危険は避けるにこした事はないのだ。

顔の皮膚がはがれおちそうなほどの痛みが走る。そして急減速。筋肉、臓器など肉体の全てが同時に悲鳴を上げた。だが、

もうテオ・リユー・フィルクが発砲できぬほどの近くに、レイ・ウーズの姿はあった。

二キロ近い全長を誇るテオ・リユー・フィルクは、上に降り立ってみると、一つの島と云っても過言ではなかった。その島の中央に高さ二百メートル強のタワーが小さな突起のように存在していた。レイ・ウーズはそのタワーに沿い、さらに上昇した。最上部で、レイ・ウーズの刀が一閃する。

突然の衝撃、そして巻き起こる轟風に、オペレーターや警護の兵たちはうろたえた。風にとばされぬよう、必死に何かを掴んで体を支えている。

オペレーター一人と副艦長が、突然出来たその穴に飲み込まれていった。

元帥代理メルリカ・カ・レ・ムは中央で、一人平然とした表情を浮かべていた。彼女が座っている椅子は、重力場制御が常にはたらくており、集中砲火を浴びても揺れはほとんど感じない。緊急時には床と天井から空気が吹き出て独自の安全圏を作りだし、室内が突然真空状態になろうと彼女の命だけは確実に保証されるのだ。

プロトタイプ・ウーズイの攻撃により、壁が斜めに切り裂かれていた。亀裂の向こうに赤銅色の機体が見えた。激しい空気の噴出はもう止まっていた。亀裂がふさがったわけではないが、もう空気の流れは調整されていた。

メルリカはオペレーターに命令し、レイ・ウーズと回線を繋いだ。同時に、元リーアック隊ルキロ・エ・ルの資料に改めて目を通す。

「わたしと……話し合いに来たの？ ルキロ・エ……ル。……ル？ 最下層か」

メルリカは鼻で笑った。

「何をいまさらの事のように。……それに、タグザムティアに上も下もないよ。……なかったんだ」

「何を知ったのか分からないけど……。話にくい。中に入って」ルキロは黙っている。メルリカの言葉が信用出来ないわけではな

い。ただ、このメルリカの存在そのものが信用出来ないのだ。無邪気で、優しく、悪戯好きで、よく笑った。そんなメルリカしか、ルキロは知らない。

メルリカは、ルキロが中に入ってこないのを別の意味に受け取った。全員に部屋の外に出るよう命令した。当然反対されるが、再度の命令により、全員従った。呼ぶまでは何があっても絶対入ってはならないと念を押す。

レイ・ウーズの胸部のハッチが開いた。ルキロはさらにレイ・ウーズの体を亀裂へと密着させた。耳をろうせんばかりに風の音が激しく唸り続けるが、体には風は全く感じない。赤い髪の毛も全く風になびいてはいない。空気の流れを操る力場が発生しているからだ。ルキロはテオ・リユー・フィルク内部に入ってきた。かなり疲労している様子。

「ようこそテオ・リユー・フィルクへ」

メルリカは椅子から立ち上がり、ルキロへと近づく。メルリカはルキロよりもたいぶ身長は低い。だが、その表情は自信にあふれている。

かたや祖父に全軍の指揮を任せられ、数万の人間の命、運命を操る者、かたやただ一人で運命に戦いを挑み、直接に人々を地獄に叩き落としながら、ここまではい上がって来た。それは、どちらも少女であった。その二人が、今相對していた。

ルキロは熱線銃を腰から引き抜き、メルリカの頭部へと向けた。メルリカの表情に全く変化はなく、涼し気な微笑を浮かべている。むしろ、銃を突き付けているルキロのほうが、耐えられずに険しい表情になっていた。

「答えて。何故、地球に来たの」
ルキロは問う。

「何を云っているの。わたしは、ここに来る前は、ただ元帥の孫娘だというだけで、なんの権限も持ってなかった。知っているでしょう」

「とぼけないで。……とにかく、あなたも知っているはず。ここへ来た目的を……。元帥を殺したのも、あなたかも知れない。指揮権を手に入れるために」

「意味ないよ、だってあの肉体は滅びかけていたのだから。どんなに技術が発展しても、それが生身の肉体である以上、死の運命は避けられない。速度をゆるめる事くらいしか」

「あなた個人やその周囲の事なんて、本当はどうでもいい。わたしが知りたいのは、この計画を考えた者たちの意志。あなたにも、さらに上の者がいるのでしょうか」

「それは当然だよ。わたしは元帥代行。軍の権力者の、さらに代理人に過ぎないのだから」

「そうじゃない。政府だなんだ、身分の上下の事を云っているのではなくて……」

質問の意図は全て理解しているくせに、からかっているのだろうか。

「下で……下の都市で何を知ったの？」

メルリカは巧みに答えをはぐらかそうとするが、反対に自分は正直に話してしまおう。どうせ、この少女はその事実をとうに知っている。そこから聞き出せる事もあるかも知れない。

「たくさんの、博士たちの意識があつた」

「博士たち？」

「この都市は彼らの牢獄で、それが少数の番人に護られていた。それだけじゃない、いろいろな工場があつて、研究所があつて……数百年前の大戦で、地球は今のようになってしまったのだけれど、その前後の歴史は何かはつきりとしなかった。それが、この都市にはすべての答えがあつた。よく調べたわけではないけど、調べれば絶対にその答えがある。そして、タグザムティアやライスカイスにも無関係じゃない」

「それは、どんな？」

「レイ・ウーズ。……エクシールどころか、ライスカイスがディ

才と呼んでいる兵器、あれらすべての原形。この地球で作られたものだった。それどころか、わたしたちの科学はすべて、地球のものだった。あの時地球にあった技術のほんの一部。地球がみずから捨てた忌まわしい科学のほんの一部分。わたしたちは最初から地球の足下にも及んでいなかった。そして、それを捨てて生きている今の地球人の心は、我々よりも遙かに気高い」もちろん色々な人間がいるのだが、ルキ口は全体を一つの個として語っている。「でも、そんなのはどうでもいい。だって、わたしたちの星の人間はもともと……」

「なんだ。全部、知っちゃったんだ」

メルリ力は笑った。機械人形のような、ぞつとする笑みだった。

「そうだよ。だから来たんだ。実際、地球人たちは、何も知らなかった。星の記憶は、この都市だけに封じ込まれていた。もしも知っていたら……」

「地球を滅ぼしていた」

「そう」

「なぜ、そんな事を」

「わたしたちは、怒っていたんだよ。五百年も前から、ずっとね。

……わたしたちにだって、感情はあるんだよ。だって、そう作られているんだから」

感情があるくらい分かっている。何をいまさら、とルキ口は訝しがる。メルリ力はルキ口など眼中にないと云った様子で話し方が熱を帯びてきている。

「パズルの断片のような最低限の情報だけをメモリーされ、生身の空箱に押し込まれ……地球の市民たちが喝采して喜んでいたよ。記憶の風化も何もない。わたし達には、今も昔も全くの同等なのだから。……わたし達が何をした？ わたしはただの情報、ただの電流。お前達こそが、あの忌まわしき奴らの子孫だろう。呪われた……汚れた存在め！」

メルリ力は気がふれたように目を見開き、ルキ口につかみかかる

うとした。武器を持たない小さな少女だ。恐れる必要はない。だが、ルキ口はメルリカが全身にまとった空気に恐怖し、無意識に熱線銃の引き金を引いてしまった。しまった！ と心の中で叫ぶルキ口。もう遅い。超高温の熱線が、メルリカの頭部を一瞬にして蒸発させる。……そうなるはずだった。だが……

メルリカの体はルキ口の足下に倒れた。何らかの科学物質の溶ける嫌な匂い。メルリカの頭部は消失してはいなかった。顔を覆う人造の皮がすべて蒸発し、中身が露わになっていた。鉛色の髑髏……。数枚の金属板が集まり、頭部の骨格を作っていた。歯だけが、真っ白に、綺麗な配列で並んでいる。

そうだったのか……。ルキ口は、全身の力が抜けていくのを感じた。

「機械の怨念の復讐劇……でも……確か、二万人の科……」

ルキ口の言葉は途中で遮られた。メルリカの肉体は活動を停止させたわけではなかった。痙攣したように、四肢をつっぱらせた。両腕が動く。手を床につける。空気から物質が作られていくかのよう、首からメルリカの人造皮膚が再生していく。肌色の皮膚が顎を覆う。ピンク色の唇が出来る。

「お願い……」メルリカの……機械の唇が動いた。「もう一度、わたしの頭を撃つて……完全に破壊して。ルキ口お姉ちゃん。わたしを助けて……。早く、撃つて……」

本当の、メルリカの意志……。ルキ口はふたたび銃を構える。手が震える。腕が下がる。

「だめだ。……撃てない。ごめん、撃てないよ」

さきほどは驚いて無意識に指が動いてしまったが、意識的にメルリカを撃つことなどルキ口には出来なかった。それがメルリカを永遠に苦しめることになるかも知れない、そう思いながらも、でも撃つ事が出来なかった。

メルリカの小さな鼻が出来上がり、目の回りが覆われる。額、そして頭頂まで完全に皮膚で覆われた。頭髮が生え始める。弱々しい

表情となっていたメルリカの顔が、また先ほどまでの不遜な表情へと戻っていく。

「たかが肉体の記憶ごときが、わたしを操ろうなどと笑止な……」
メルリカは熱線を浴びる前と寸分変わらぬ姿で立っていた。

二人は同時に口を開く。だが、言葉が発せられる事はなかった。大きな画面が映し出すその光景に言葉を失っていた。

都市が爆発したのだ。砲撃による爆発、建物の倒壊は先ほどから目にしていたが、今度のはそれとは全く異なるものだった。噴火のように、内部から吹き上げるように爆発し、巨大な火の柱を幾本も立てていた。火の柱は高層ビルを遙かに上回る高さだ。ビルは炎に飲み込まれ、炎の中に崩れ落ちていく。低い高度にいたゾ・ヴィムやアロ・イーグなども炎に飲み込まれていった。爆発は何度も繰り返され、その都度に規模が大きくなっていった。それほど時間がたたないうちに、地上の建物はすべて跡形無く吹き飛んでいた。ルキ口はただ黙ってそれを見ていた。

仲間と戦う事になっても、仲間を失う事になっても、残ったもの。かかったもの。「歴史」であり、「罪」であり、「希望」であったもの。いまは無理でも、時間をかければ分かっていっただろうに……。上も下も……。何もないのだという事実が。なにに縛られる必要もないのだと云う安心が。おのれが皆全て自由だという事が……。全ての力が、立ち上る湯気のように体から消えてしまっていた。心臓が動いているのが不思議なほどだ。肉体がどうしようもなく、けだるい。メルリカの声に、ルキ口は少しだけ我に返った。彼女は、全軍を地球から退かせる命令を発していた。そして、ルキ口に視線をやり、一言、

「行け」

ルキ口はゆっくりとメルリカに視線をやった。

「早く消えろ。それとも残るか。確実に処罰されるだろうがな」
ルキ口は口を閉ざしている。メルリカは続ける。

「わたしにも感情はあると云っただろう……。これは、悪戯だよ。…

…この、地球人め」
地球人め。その言葉の残響がいつまでもルキ口の頭の中をかけめぐっていた。

7

ゴ・スイツグの居住区、トキ・ワ・キーレンの部屋である。
ジ・ク・ジャットは驚きの声を隠す事が出来なかった。ライスカイスの人間で感情を表す叫びなどを発する者は、「異端」を除いてはほとんど例がない。それほどにジャットの驚きは凄まじいものだったのだ。

キーレンが倒れている。胸部、腹部に大穴を開けられている死骸である。先ほど彼等が殺したのだ。当然、動かない。だが、頭部だけは違っていた。死んでいるはずなのに、何やら音が聞こえるのだ。微かな音だったが、ジャットの聴覚はそれを完全に捉えていた。キーレンの右耳の根本、皮膚が裂けており、そこから鉛色の物が覗いていた。手をかけ、引っ張ってみると、驚くほど簡単に皮膚はそれから剥がれた。それは、人工の頭蓋骨だった。

トキ・ワ・キーレンは、頭部だけが完全に機械化していたのだ。頭蓋骨、額にあたり、製造情報を示すプレートらしきものがあった。地球の文字を理解している者に、読ませてみる。

「……カリフォルニア支局エドワード・ハイアン。二四九七……」
その男は最後まで喋る事はできなかった。銃弾がその男の頭部を貫いたからであり、そしてジャット自身も撃ち殺されてしまったのである。

さらに数発の銃声。的確に、その数だけ、そこにあらたな死体が生まれた。

「それを見たものは、同胞といえども生かしてはおけない」
五人の男が立っていた。

「旧アメリカ、カリフォルニア州の研究所。ハイアン博士の本物の脳と引き替えに組み込まれた、この頭脳は、たまたま彼だったとい

うだけだが、タグザムティアの肉体を転々とし、そして初めて我々の肉体にも同調できる事を示してくれた。キーレンという男を使つて。キーレンはもとも「異端」。脳のいかれていた男だから、摘出し、実験をする事に誰もためらいはなかった。この頭脳、生命体に寄生せねばいきらない仕掛けとなっている。さて、記念すべきこの頭脳を、息絶えさせるわけにはいかん。「異端」は今ここには誰も存在せぬが、さて、次は誰が……」

一人が一瞬の躊躇も見せず、「自分が」と名乗り出た。

8

はたして戦争と呼べるものであつたのか。後生の史家から見れば実に馬鹿馬鹿しい争いだつたのではないだろうか。だが……宇宙の歴史を考えれば、確かに馬鹿馬鹿しいものではあるが、地球だけに視点を向けると、苦難の歴史はこれからが始まりだつた。それはこの大陸だけでなく、全地球に係るものだつた。

双方が最初から地球に向けて発表していた自分たちの目的。地球の統治。タグザムティア軍元帥代理メルリカ・カ・レ・ムは、ライスカイスの地球統治を認め、自軍を全て引き上げ、宇宙へと去つた。さて、これらは後日談ではあるが……気弱になつていた地球の国々の大半は、異星人の統治をあつさりと受け入れてしまった。断固反対の意志を貫く国が一国たりとも存在しなかつたのである。その上で、へりくだる態度を意地しながら様々な条件交渉を開始し、自分たちの国を有利な展開へと運ぼうとした。

すっかりと気弱な体質が染み付いてしまつている地球人の、「何があるうと争いはせず……」「攻めず……」「それが平和を守る事だ……」と云う主張、それはあながち間違いでもなかつた。美点でもあるだろう。だが、戦うべき戦いというものも存在するのではないだろうか。そんな気骨のある者たちは、民間の中からあらわれた。

まだ水面下の事ではあるが、民衆たちが護民軍らの協力を得て、

どこかへ集結しつつあるという。軽い損害のエクシユールやデイオを集め、独自の色に塗っているらしい。ライスカイスの統治定着後も「革命の赤」として恐れられ、敬われる色となる。……回収班の連中は、無傷のエクシユールのあまりの多さに、タグザムティアの策ではないかと訝しんだものである。遠方でかく乱していてくれれば、自分たちの戦争がやりやすい……などと考えているのではないかと。

異星人の統治が世界へと広がっていく中、地球人達は反乱者達が立ち上がりつつある事を噂には聞いていた。それはさらなる不幸が来るのではないかという恐れ、何らかの幸せをもたらしてくれるのではないかという期待などが入り交じっていたが、相対的には彼等は常に恐れ、混乱していた。すべての時間が牧歌的に流れていき、国もなにもなく、世界はただ自分の周囲だけ。それが、異星人に襲来により「外」「さらなる外」を強制的に認識させられた。混乱しないはずがない。かくして、地球全体を暗い影が覆い始める。

9

狭くて暗く、暑く、湿度が高く、本来人間の神経が不快に感じる空間である。それがことさらにルキ口の気持ちを落ち込ませていたわけではない。ここは、むしろ彼女にとっては安心できる空間なのだから。

レイ・ウーズは高度百メートル程の空中に浮いている。推進力はどうの方向にも働いておらず、風任せに宙を漂っていた。

山をそのまま逆さにしたような……蟻地獄のような、大きなクレイターが出来ていた。半径にして三十キロはあるだろうか。広大なそして水の無い湖である。その中心部、その真上にレイ・ウーズは在った。

ここには、すべてが在った。溶け、崩れた様々な物の残骸が見える。

すでに悲しい気持ちはなかった。恋人の死すらも、もう悲しくは

なかった。いや、悲しくはあるのだが、すでにその感覚が枯れてしまっていた。悲しいはずなのになあ……と、自分の心の構造を不思議に思う。だが、体が憶えている記憶はまた別なのか、気がつくと涙が頬を流れていた。やつぱり悲しかったんだ。ルキ口はほっとし、しみじみとその涙を流す自分を受け入れた。地球に来て、自分は何度涙を流した事だろう。自分は弱くなってしまったのか。

つまらぬ事を思考し、自分を誤魔化してみせる。

弱くなった。そうだ、もう、あの都市の地下で、それは気づいた事じゃないか。あの、ミイラを見て吐き、泣きわめいた時。……それを、あの青年に見られてしまった時。自分の弱さに気づいたじゃないか。

……あの青年は、どうなったのだろう。まあ、この状態では、生きているわけもないか。しばらく一緒にいたというのに、名前も聞いていなかったな。名乗らないし、尋ねもしないんだもの。あの青年は、最後、子供のように怯えていた。結局、人はみんな……。結局、みんな人なんだ。

弱いとは、何だろう。そもそも、強いとは何だろう。

強い、弱い、能力の有無、勝敗……ただ傲慢なだけの無意味な誇りもそんなところから生まれる。なら、全員が強くなればいいのか。いや、みんなが弱くても、それをみんなで認めあえばいい。底い合えばいい。

そうだ。弱いから……小さな存在だから……神でない身だから、すべてに耐えられる。

まだ……そう、まだわたしは生きられる。

死ねない。この新しい舞台で、思いきり生きてゆきたい。

ルキ口は叫んだ。言葉とも、ただの唸りともとれる、だがとても楽し気な声。反響する。レバーを倒す。急加速。メインスクリーンに映る真っ赤な空が激しく後ろへと流れ始める。顔を伝う汗が光る。ルキ口は急加速に顔をひきつらせながらも顔をほころばせて笑った。声が漏れる。それが大きくなる。とまらなかった。こんなに大笑い

をした事など、久し振りだった。何が楽しいのか。自分に問いかける。決まってる。今笑っている事に笑っているんだ。

10

エイジは車の屋根の上に座り、呆然としていた。口がだらしく開いた、文字通り呆けた表情で、定まらない視線で空を見上げていた。目は真っ赤で、周囲にクマが出来ている。

銃を握りしめている。血の気の引いた青い顔をしていた。

弟が死んだ。

強力な薬を打たれ、飲まされたタクに、激しい副作用が訪れた。泣き叫び、血と、意味の滅裂した言葉とを吐きながら、体を痙攣させた。睡眠剤を多量に注射し、かろうじて寝かしつけた。それでも震えや汗はとまらない。呻き、歯軋り、うわごとが絶えない。舌を噛んで血が出てからは、猿ぐつわをかませた。ベッドに大の字に縛られている。

エイジたち現代の地球人は、肉体に様々な抗体が宿っており、少々汚染された川の水を直接飲む事など、別に気にするほどの事でもなかった。だが、この付近の川の水は危険度が高く、タクには医者を用意した安全な水を飲ませた。

苦痛から完全に解放されたわけではないのだろうが、とりあえずタクは暴れるのをやめて、おとなしくなった。それに安心したエイジは、そのまま眠ってしまった。医者はその一時間前に、エイジに薬を渡し、自宅へと帰った。

エイジは無理な姿勢で寝ていた。ベッドの柱を背もたれに、床に座り、脚をのばし、前に倒れ込むようにしている。腹が圧迫されて窮屈だが、看病であまりに疲れていたため、ぐっすりと眠り込んでいた。

小用で目が覚めたエイジは、それに気付いた。驚愕、焦燥などの思いが、滝のようにどつと脳に飛び込んでくる。タクの姿が消えていたのだ。左手を縛っていた紐がほどかれており、右手を縛っていた紐は輪の形を保っていたが血で赤く染まっていた。エイジはタクの名前を叫びながら、外に飛び出した。

すぐにみつかった。それは、すでに冷たい体となっていた。川の流れに顔をつっこみ、死んでいたのである。

直接の死因は、何か分からなかった。水が肺に入り込んでいなかった事を考えると、手で水をすくって飲んでいる最中に、「恐れていた時」が来てしまったのか……

黄色の海は、あの時と全く変わっていないように見える。実際、朝から晩までいても何の変化も起こらない。ただ……遙か向こうで大爆発が起きた時は、その激しい揺れと風は、本物の海のような波を……津波を起こした。もう、あの戦いの時のアロ・イーグとゾ・ヴィムの残骸は砂に埋もれてしまっており、影も形もない。

あの戦闘の時にいた、もう一機。赤っぽい色した……。あれがタクを殺したんだ。学校に行けると、喜んでいた弟を……。

置いてくればよかった……。ルキ口に謝って、あの時、二人で帰っていればよかった。

ルキ口……酷く懐かしく思える。もう、リーアック隊とかいうチームと合流して、自分の星へと帰ってしまったのだろうか。きっとそうなのだろう。婚約者がいるって云ってたし。……結局、地図のあの場所には行けたのだろうか。

あの機体、なかなか来ないな。あたりまえか。だが、ここにいるしか、おれには出来ない。でも、こんな拳銃が何の役に立つ。誰が乗っているんだろう。誰だろうと、構うものか。ありったけの銃弾をぶちこんでやる。その後、しがみついて、はいのぼって、扉をこじあけて、首をかききってやる。来なければ、こちらから行ってや

る。汚れた地だろうと、知ったこっちゃない。

その時、舞い上がる黄砂の向こう、遠くで何かが光った。

あれは……

エイジは、右手の銃の感触を確かめた。エイジの目に光が戻った。

11

風をきる。空がどんどん後ろへ流れていく。今までにない気分の昂揚を感じていた。

すべての鎖から解き放たれ、今、自分は自由だった。

おさえようとしても笑みがこぼれる。心臓の鼓動がはやまる。自分のために楽し気なビートを刻んでいる。

地位、血、心、過去、様々なものから解放された。

ウエルに感謝していた。命を救ってくれただけではなく、これからの希望を与えてくれたのだ。彼の分まで生きようと思う。

とりあえず、たよる場所。たよる人。すぐにエイジの顔が浮かんだ。行ってみよう。地球人として暮らしたい。素直にそう頼んでみよう。

ルキロは自分の駆る機体レイ・ウーズと、そして自己の魂とを飛翔させた。トラックや、ゾ・ヴィムに乗ってここまで来たが、それをそのまま戻るつもりだ。ルキロの魂はいまにも爆発しそうなほどに激しく震えていた。沢山の希望と、ちよっぴりの不安とで。

もうすぐ汚染地帯、黄色の海が終わる。

レイ・ウーズの速度が落ちた。「奇跡」を、そのカメラが捉えたのだ。

正面の画面に、エイジの姿が映っていた。ルキロが乗ってきた、あのトラックの屋根に乗っている。疲れたような、暗い顔をしている。

わたしを待っていてくれたのかな。いろいろと迷惑をかけたな。あれ、タクはどこだろう。

さらに減速をし、地面すれすれの低空飛行をする。

画面の中、エイジがどんどん大きくなってくる。

もう、待ちきれない。

ルキ口はレイ・ウーズを静止させるべくレバーを引くと同時に、胸部扉を開けた。身を乗り出し、口を開く。

エイジ！

その言葉は一声たりとも発せられる事はなかった。

ルキ口の腹部を何か熱い物が貫いた。続けて心臓を、そして喉を貫いた。

身を乗り出しかけていた体は、その勢いに押され、見えない巨人の手に押さえ付けられるように激しく操縦席へと座った。

うなだれたように下を向いた。もう、その目はどこを見てもいなかった。

光が消えていく。

「喜び」から「疑問」へと転じ始めるほんの一瞬、そんな表情のままかたまっていった。

かつてエイジから、死ぬ間にソーマトーのように過去の印象深い事が全部頭をよぎると聞いた事があった。だが彼女は何も見る事なく、じっくり何を思う事もなく、輝いていた「生」から一瞬にして未来永劫果てなく続く闇の中へと落ちたのである。

12

その男の足取りはどうみても病人のそれであった。その表情も虚ろであった。

生来の白い肌に病的な色が加わり見る人々をぎよつとさせた。

その青年も、もともとは美しい顔立ちだったのかも知れないが……と地球人たちは想像する。だが今は、頬はこけ、口はだらしなく開き、涎をたらし、薄青色の髪の毛がところどころ抜け落ちて頭皮をのぞかせていた。片方の瞼が晴れ上がっており、目の形がおぞましく変型してしまっている。

人の賑わっている市場だ。みな、その青年を見ている。

「愚かな地球人に対する、あいつらの統治が始まるんだとよ」

中年の男が髭でびっしり覆われた面の奥から、まるで汚いものでも見るような目付きで青年を睨み付け、吐き捨てた。

「あいつらに逆らう軍が組織されるらしいぜ」

「なら、今あいつをやっちまうか」

「いや、まて。どうせあいつは……」

冷静な一人が制止する。

「黄色の海を、歩いて来たんだ……」

「なんで、まだ生きているんだよ」

「でも、もうもたねえんじゃねえか。肌だって、ぼろぼろじゃねえか」

青年は、肉が完全にそげ落ち、骨と皮だけになっていた。

よろよろと歩く。みな、避ける。脚をひっかけてやろう、などと思っ者もない。

青年は笑っていた。

声をたてて笑っていた。

それは壊れた機械のような……下手な役者のような……とても自然ではない作り物めいた笑い声だった。

いつしか人の輪が青年を囲んでいた。

青年は歩みをとめた。

高らかに笑いながら、両手を横にひろげた。

叫んだ。

「みる。おれ達だって、笑えるのだ。貴様らと、どこがどう違うというのだ」

男の笑い声がどんどん大きくなっていった。

涙が頬を伝った。

それは、真っ赤な血の涙であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1295f/>

アレグリア・バンディッツ

2010年10月20日00時58分発行